

方法としてのジモト

——地域社会の不可視化された領域をめぐるフィールドワーク

川端 浩平

(関西学院大学先端社会研究所専任研究員)

渡邊 拓也

(京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員)

平田 知久

(京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員)

森田 次朗

(日本学術振興会特別研究員 P D : 京都大学大学院教育学研究科)

芦田 裕介

(京都大学大学院農学研究科博士課程)

金 泰植

(獨協大学非常勤講師)

谷村 要

(大手前大学メディア・芸術学部講師)

松村 淳

(関西学院大学大学院社会学研究科後期博士課程)

2012 年 12 月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

はじめに

川端浩平

方法としてのジモト——地域社会の不可視化された領域をめぐるフィールドワーク

グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」
次世代研究ユニット
「地域社会で不可視化された領域を考察するための〈方法としてのジモト〉」

本ワーキングペーパーで試みているのは、地域社会で親密圏と公共圏が再編成される過程において不可視化されている領域を「ジモト」として考察することを通じて、これまでの地域社会を対象とした研究調査において焦点を当てられることがなかった、もう一つのジモト像を様々な場や人びとの営みから描き出すことを試みる批判的アプローチである。特に、以下に強調する2点を軸に、方法としての「ジモト」の枠組みの構築をめざした。

本次世代研究ユニットが対象とする地域社会をめぐるっては様々な研究蓄積があり、その大半は、地域社会で生活する人びとや資源に着目しつつ、それらの可能性をエンパワーする視座からの取り組みである。しかし、第一に、それらの研究においては、地域社会に存在するネガティブな側面を描いてくることはなかった、もしくは捨象してきたのではないだろうか。そのことによって、地域社会に生じている様々な問題に対する批判的な知が損なわれているのではないだろうか。また、地域社会を対象とする研究者がこれらのことに加担してきた側面もあるのではないだろうか。さらに、第二に、地域社会という概念が社会統合や包摂の意味合いを持つ場面（例えばまちづくり）では、マイノリティの存在が認識されていない場合がほとんどである。マイノリティの存在そのものがある種の地域資源とみなされる場合もあるが（例えばエスニックタウン）、その場合には当該地域社会もしくはホスト社会の外部に位置づけられるのであり、地域社会そのものの変容という認識とは結びつきにくい。少なくとも、地域イメージを高めない存在としてのマイノリティに焦点があてられることはない。

以上のような問題意識を踏まえて私たちは、メンバーがこれまで関わってきた研究調査の事例や運動の実践の場を通じて携わってきた地域社会とともに、それぞれの出身地や現在生活している地域社会など、何かしらの地縁を有する場やそこで生活する人びとを対象とした研究調査を行った。そして、研究者の連携を通じて、それぞれの

事例から地域社会の批判的考察とマイノリティ研究を架橋することにより、地域社会において表象されない領域としてのジモトについて明らかにすることが試みられた。ただし、ジモトという領域を明らかにするための実態調査ではなく、より包括的かつ多角的な視点から地域社会をめぐる現象を批判的に分析する方法としてのジモトに関する理論的枠組みの構築をめざされた。本ワーキングペーパーの構成は以下のとおりである。

1. 川端浩平「ジモトという視座——身近な世界を／から批判的に読み解く」
2. 芦田裕介「農村空間の商品化」に対抗する「田舎暮らしの主体性」に関する考察——現代農村に生きる若者たちへの調査から」
3. 森田次朗「地域社会における「不登校問題」と「居場所」の不可視化——現代日本のフリースクールの事例を通して」
4. 金泰植「在日朝鮮人と国家——韓国における在外国民国政参政権をめぐる」
5. 谷村要「アニメ聖地巡礼者の持つ2つの欲望——移動したい巡礼者／ジモトに滞留したい巡礼者」
6. 平田知久「KEY 半島をめぐる私論／試論」
7. 渡邊拓也「魔法使いの遺産——まちづくりはなぜ失敗するのか／大曾根商店街(名古屋市北区・東区)」
8. 松村淳「地方・女性・建築家——反転するマイノリティ」

《目次》

はじめに	1
《目次》	3
序章：ジモトという視座——身近な世界を／から批判的に読み解く （川端浩平）	4
「農村空間の商品化」に対抗する「田舎暮らしの主体性」に関する考察 ——現代農村に生きる若者たちへの調査から（芦田裕介）	21
地域社会における「不登校問題」と「居場所」の不可視化 ——現代日本のフリースクールの事例を通して（森田次朗）	42
在日朝鮮人と国家——韓国における在外国民国政参政権をめぐる （金泰植）	60
アニメ聖地巡礼者の持つ2つの欲望 ——移動したい巡礼者／ジモトに滞留したい巡礼者（谷村要）	78
Key 半島をめぐる私論＝試論 （平田知久）	92
魔法使いの遺産——まちづくりはなぜ失敗するのか ／大曾根商店街（名古屋市北区・東区）（渡邊拓也）	118
地方・女性・建築家 ——反転するマイノリティ（松村淳）	138
おわりに	151

序章：ジモトという視座——身近な世界を／から批判的に読み解く

1. はじめに——JR 岡山駅前の風景から



JR 岡山駅の東口の風景は他のターミナル駅前のそれとほとんど変わらない。もちろんすべてが同じわけではない。背中を向けた桃太郎像とその愉快的仲間たちは、岡山の地域アイデンティティの象徴として位置づけられている。この写真には映っていないが、駅前の目抜き通りは桃太郎大通りと呼ばれている。他にも桃太郎アリーナや桃太郎スタジアムもある。しかしそのような岡山を象徴する記号を除けば、これがどここの風景なのかということは、生活者や旅行で訪れたことがある人以外には特別な意味をもたないだろう。

この地方都市のターミナル駅はこれまでたくさんの人たちに利用されてきた。数知れない人びとの記憶や経験がこの風景とつながっている。筆者自身も国内外を旅するときには必ず利用してきたし、高校生の頃には恰好の待ち合わせ場所だった。携帯電話が普及していない 20 年前の高校生時代。待ち合わせをしたが現れない友人を 1 時間以上待っていたということもあった。そんな彼も今では家具職人となり、筆者の西宮のアパートにある木製テーブルをつくってくれた。そして、ビックカメラの北側には駅前商店街がある。そこは、戦後岡山で最大の闇市であり、在日コリアン（以下、在日と表記）のエスニック・コミュニティが形成された。というように、ローカルなジモトをめぐる記憶は、次々と様々な思い出を想起させ、過去・現在・未来のイメージを豊饒なものとしてくれる。

しかし、ジモトを代表する桃太郎と筆者とはほぼ無関係である。筆者のジモトのイメージに対しては何のインスピレーションも与えない。むしろ、ここに桃太郎がいるからこそ、思い出せないことがあるのではとさえ考えてしまう。試しに左手の人差し指で桃太郎を隠してみる。何だか色々と思い出してきたぞ、少なくともそういう気分にはなる。自分で考えてみようという気になるのだ。ジモトについて自分たちの言葉で語ってみること。そのような素朴な感覚が本稿の出発点にある。

* * * * *

本稿は、筆者が高校を卒業するまで生活していた出身地である岡山で行ったフィールドワークをもとに執筆したものである。ただし冒頭に明かしたように、それは自分にとって慣れし親しんだ故郷の人々や風景のイメージをそっくりそのまま調べてみるというのではない。あるいは、風土や歴史、さらには特産品といった地域イメージによって語ろうというのでもない。また、世界や日本の諸地域と比較して特殊な事例について語るわけでもない。むしろ、それらの地域社会を語る言説やイメージからは見えてこない、地域社会やそこで生活する人びとへと焦点があてられている。本稿では、そのような地域表象から抜けた落ちた領域をジモトと定義することにする。そしてこのジモトの領域こそ、筆者がフィールドワークを遂行した時空間でもある。ここで用いるカタカナ表記のジモトは漢字表記の地元とは異なり、地域社会と結びつけて肯定的に表象されることのない日常生活の領域を生活者の視点に寄り添いながら批判的に分析するための視座である。調査者にとってジモトを調査するということは、社会調査における調査者と対象者、調査者とフィールドといった関係性を根本から問うものであると同時に、近代における時空間の編成の過程をクリティカルに読み解く試みである。

筆者は、オーストラリアの大学院の博士課程に在籍していた 2002 年の 8 月から、岡山での参与観察型のフィールドワークを開始した。2003 年～2004 年の一年間は、午前 9 時～午後 5 時までの定時の時間に高校時代の友人が働く中小企業で従業員として働き、夕方以降と週末の時間を利用して在日の若者を中心とした調査を行った。その後は、2006 年に博士論文を執筆して岡山に戻り、在日を中心とした研究調査を継続した。本稿で用いるデータは、博士課程のフィールド調査とその後継している研究調査から得られたものである。自分が良く知っている（と思い込んでいた）友人やその同僚たち、もう一方でこれまで同じ場所で生活しながらも出会うことのなかった（と思い込んでいた）在日の若者との出会いを通じて、これまで自分が慣れ親しんだ風景は一変し、それまでの自分には見えていなかったもう一つのジモトの姿が見えてきたのだった。

ジモトという視座から見えてくるものは、人びとの日常的な営みであり、生活に根差した実践やそこから生み出される知識や世界観である。それらは、地縁に基づいた社会学的な研究対象としては、質・量ともにインパクトがあるとは見なされてこなかった領域であるといえる。農村、都市、地域といった場所を対象とした社会学においては、当該地域の生活者の視座に寄り添うことによって近代化が生み出す諸問題を映し出す鏡として批判的に捉えられてきた。しかしながらそれらはまた、社会的なイシューとして際立つ現象には目を向けてきたが、地味ながらも普遍性の高い——つまり日常かつ凡庸な——日常の問題からは目を背けてきたのではないだろうか。これに対してジモトという視座は、当該地域に関係する当事者の立場から、人びとの日常の実践という足元を見つめ批判的に考える思考を生成することの重要性を提起する。

以下本章では、第二節で現代日本社会における地元回帰の現象を分析することを通じて地域社会の表象——つまり漢字表記の地元の領域——が何を不可視化させているのかについて考察するとともに、地元という概念の系譜を辿り、地域社会をめぐる研究が抱えている問題を提起する。第三節では、知的ヘゲモニーに対抗する戦術的なアプローチとしてのジモトの視座について述べ、自分が育った場所を調査する際の諸問題と意義について議論する。

2. 地元現象

——地元が好きで悪いのか——、2010年5月15日の朝日新聞の土曜日版「be on Saturday」の「うたの旅人」という特集の見出しである。とりあげられているのは、八王子市出身の3人組、ファンキーモンキーベイビーズである。彼らの歌詞には「八王子の南口から家までへの帰り道」といったように、自分たちと地元をめぐる世界観が色濃く反映している。また、八王子観光大使を務めていることにもうかがえるように、地元を代表するミュージシャンとして認識されている。

そしてこの記事を書いた担当の記者も八王子の出身である。おそらく40代前半の男性記者は、故郷である八王子について次のように述べている。「社会人になると同時に実家を出て20年余、八王子に望郷の念を抱いたことなど一度もなかった。東京とは思えぬ田舎、退屈なベッドタウン、文化果つる地……自虐のネタにしかならぬ街だと考えてきた」。ところが、ファンキーモンキーベイビーズの3人や八王子の人びとを取材する過程で、八王子の歴史を振り返り、様々な魅力が発見されていくのだ（『朝日新聞』2010年5月15日）。

たしかに、かつてのような「故郷」は存在せず、流動的な時代を生きる私たちにとって、地元は存在論的な意味を与えてくれる。ヨソモノから見れば味気ない郊外のベッドタウンなのかもしれないが、そこで生活している人びとにとっては、日々のローカルな実践や意味づけがある。そこには、無数の記憶や経験が存在しており、同じ場所を共有した人びとにしか読み取ることのできない差異やそれを取り巻く歴史の変遷

が横たわっている。そのようなローカルな日常生活の記憶と経験を社会で共有することの意義は大きい。

しかし、そのような地元をめぐるイメージが掲げられるときに違和感を覚える場合も少なくない。地元を代表する観光地やユルキャラ、地域ブランド化されただけで味が変わらない饅頭やサブレ。それがいかに自分と関係しているのかさっぱりわからない。それに、自分のルーツを回顧する際に——例えば思わず出くわした同級生と立ち話する場合——感じるインスピレーションとはどうも違う。そしてこのことは、ローカルなイメージの構築を促す地域アイデンティティとしての地元と主観的概念であるジモトは異なる論理で機能していることを示している。そこで本節では、地元という概念を整理してみることにする。そのうえで、地元とジモトという概念を区別する。さらに、地元という言葉の系譜を探り、その現代的な意味を浮き彫りにする。そのうえで、地域社会の固有性を批判的な視点から練り上げていくアプローチとして、地元が前景化する過程で隠ぺいされるジモトの領域を考察することの重要性を提起する。

2.1. 地元とジモト

岡山市の中心市街地は、90年代後半から00年代にかけてグローバルな基準を満たすための再開発が行われてきた。JR岡山駅の新幹線のプラットホームから眺めてみると、点在する高層マンションが目飛び込んでくる。真下にはオープンスペースが広がり、駅ビルは「さんすて」（サンステーション・テラス）と改められ、今風の装いと空間が広がる。高齢者や障害者に配慮したユニバーサル・デザインの導入、英語のみならず、中国語やハングル表記の標識の設置など、グローバルな基準を満たすインフラ整備が施されている。駅周辺には、国際会議を開催するためのコンベンションセンターも新しく建設された。岡山に限らず、全国の地方都市の主要駅周辺には同じような光景が広がっているだろう。

その一方でそれらの標準化されたインフラは、地域の固有性を示すべく様々な記号やシンボルによって差異化が試みられている。所々にオープンスペースが施された駅前の目抜き通りは桃太郎大通りと呼ばれ、リニューアルされた競技場や体育館にはそれぞれ桃太郎スタジアムと桃太郎アリーナという名前がつけられた。駅の隣に新設されたコンベンションセンターの名前はままかりフォーラムである。いずれも、岡山の歴史や名産品と結びつけることによって、地域のブランドをめぐるイメージが掲げられている。

このような地方都市空間の再編成が進むなかで、地域で生活する人びとが目まぐるしく変化する空間を自分たちの拠り所であるべき場所＝地元として定義しようとするのはとても自然な流れなのかもしれない。外からの眼差しを意識しつつ、自分たちを固有の存在として確認する過程で安心できる場所としての地元への希求が高まっているのである。ナショナルリズムは、排他性が社会に周知されているし、どこか大袈裟だ。

だから、等身大で温もりの感じられる空間としての地元を、流動性と不安が高まる私たちの寄る辺のなさから解放してくれる拠り所として共有したいという感覚が広まっているようである（轡田 2010）。しかしまた、地方都市といえども、都市・農村部ともに郊外化が進展してきたことを踏まえると、お互いに顔の見えるような相互扶助的な共同体としての実体はなくなっているという意味で、地元は改めて「再発見」されているのだといえる。私たちはこれがかつて元神奈川県知事の長洲一二が提言した「地方の時代」に倣って、「地元の時代」とでも呼べばいいのだろうか（山本 1982）。しかしここで再発見されている地元とは、私たち一人ひとりの記憶や経験を取り巻く原風景として存在している——例えば同級生の友人たちとの会話で用いる——主観的な概念であるジモトとは異なる論理で機能している点に注意を払う必要がある。地域アイデンティティといった社会統合を示す概念である地元と素朴な水準における個人的な帰属感覚（sense of belonging）を示す概念であるジモトのあいだには緊張関係が存在するはずなのだ。

2.2. 地方、地域、そして地元へ

次に、地元という概念を地方・地域という概念を参照にしつつ整理してみたい。地元とならんで良く使われる言葉には、地方や地域がある。前者には否定的で開発の対象といったようなイメージが付与されており、後者にはそこで生活する人びとをエンパワーするような視線が感じられる。しかし、これらの言葉はどこか捉えがたく、抽象的な印象を拭えない。

そこでまず、私たちが使用している地方という言葉の紋切り型のイメージを概観してみることにする。ここでは、（1）自然地理的特徴、（2）都会に対する田舎としての地方、（3）中央に対する地方、（4）地域としての地方の四つに分類することとする。

まず地方は、その自然地理的特徴によって分類することができる。つまり、地理的な境界線によって定義された特定の物理的な空間を示す。英語にしてみると、**area** や **zone** に該当するだろう。この場合、関東地方や中国地方、ロシアの沿海地方や中国の内陸地方といったように国内外の比較的大きな地理を指すこと、また、国内外においても東京地方や岡山地方、カリフォルニア地方やミシガン地方などといったように比較的小さな地理を指すことが多い。細かい事例をあげればきりが無いが、いずれにしても、これらの場合の地方は気候や風土、歴史や文化といった自然地理的な特徴やその条件の下に生まれた場所を指すために用いられる。

次に、これはとても日常的な使い方であるが、都会に対する田舎としての地方という意味で使われている。英語にしてみると、**country** に該当するだろう。例えば、「地方は刺激が少ない」「地方はのどかなところである」「私は地方出身です」などなど、その場合、地方は都会に対して田舎であると捉えられている。ただ、明確な判断基準

は存在しないため、地方は良いイメージで語れる場合も悪いイメージで語れる場合もあり、その価値基準は相対的なものである。

この日常的な地方＝田舎のイメージを基底しているように思われるのが、中央に対する地方という捉え方である。英語にしてみると、local や辺境を指す periphery に該当するだろう。そもそも地方とは、日本に限らずヨーロッパの region や province、中国の県（懸）などは、統治と支配を目的とした軍事的な拠点とその語源としている。日本でも、室町時代の幕府の役職である地方（じかた）で、やはり地方を統治・支配するための拠点であった。

近代日本においては、地方官や地方改良運動といったように、地方は中央集権的な国家を目指した中央政府の統治・支配の対象であった。また、柳田國男に代表されるような民俗学的な視点からも地方の文化や風俗が語られ、再発見された。しかしそれは、地方に対する中央からのエキゾチックでノスタルジックな視点を抱えていた。さらに、戦後においても地方は中央による開発の拠点となり、日本の高度経済成長を支えた。いずれにしろ、中世・近世・近代と経て、地方は中央から価値を付与されることによって存在が意味づけられ、従属的な位置にあるといえるだろう。

しかし、1960年代後半ころから、世界で近代における産業化の発達をもたらした文明に対する反省的な気運が高まり、政府や大企業による地方における無秩序な開発や環境問題に対する責任が批判的に捉えられるようになった。中央に対する地方ではなく、そこで生活する地方自治体や生活者の視点から地域という言葉が用いられるようになった。経済学者の玉野井芳郎は「地域主義」(regionalism)を唱え(玉野井 1979)、その後社会学者の鶴見和子は西洋型の近代化モデルを脱却して、地域の風土に根ざしたオルタナティブである「内発的發展」の必要性を唱えた(鶴見 1996)。中央に対して従属的な地方という言葉に代わって、地方自治体や生活者の視点に根ざした地域という言葉が用いられるようになったのである。しかし、1970年代における「地方の時代」といわれた革新自治体の隆盛と退潮と運命を共にするかのようになり、それらの視点が現在も力強く受け継がれているとは言い難い。

以上見てきたように、現在では地方という言葉は、どちらかという自然地理的条件や田舎的なもの、中央に従属していることを指す場合が多く、地方の政治・経済・文化等の自立性を示す言葉としては地域という言葉が好まれて用いられるようになっている。しかし、地域という視点から地方を捉え返そうという試みが重ねられてきたにもかかわらず、疲弊や没個性といった負のイメージで語られる場合、今でも地方という言葉がメディアや日常で用いられる。地方の疲弊とはいうが、地域の疲弊とはいわれない。この事実が単純に示しているのは、地方はまだ中央に従属しているということである。またそれは、中央に従属的な地方で語られていない問題点が存在しているということである。言い換えれば、地方の人びとによる地方を批判的に捉えるという視点がないのだ。

そして現在、地方や地域に代わって用いられているのが地元という言葉である。この言葉も、地域社会の流動性がますます高まっていることを示すとともに、例えば近年のまちづくりに見られるように、——元気がない地元を盛り上げよう——といったように、そこで生活する人びとを再帰的にエンパワーする視点から用いられている。このような新たなる自分たちの生活空間に対する注目の背景には、グローバリゼーションの渦中でローカルな固有性が失われているという危機感がある。地方の中心市街地の商店街はシャッター通り化し、田舎の豊かな田園風景がジャスコをはじめとする巨大資本の風景へと変遷している。消費社会研究家の三浦展は、このような地方の状況に対してファスト風土化という絶妙のネーミングを与えている。2000年の大規模小売店舗法（旧大店法）の改正にともない、大型店舗の進出の規制緩和が図られた結果、それぞれの地域特有の歴史や社会的つながりが破壊され、地方はのどかな場所であるというのは幻想に過ぎなくなっているという（三浦 2004）。

その結果、地方で生活する人びとはグローバルに均質化された消費社会環境に包摂されていると捉えられる。地域社会の人びとや歴史と結びついた個性的な商店ではなく、グローバルな大資本が出店した消費環境へ依存する。そのような地方の人びとの消費社会的なライフスタイルを称揚するマーケティング戦略も行われている。ジャスコに行けば、「シブヤもハラジュクもうらやましくない！」というポスターが貼られている。「ジャスコしかないのかい！」と突っ込みを入れることも憚られるような雰囲気である。また、没個性的な消費環境は、地方における治安の悪化をもたらしているという。ファスト風土化が地域社会におけるつながりを解体し、それが郊外を中心とした地方での犯罪の増加と悪化を招いているとされている（三浦 2005）。またその背景には、日本の地方政策が公共事業に依存するいびつな就業構造の地方をたくさん生み出したということがあることも見逃せないだろう（五十嵐 2010）。

そのような地方郊外での危機感に対して、中心市街地では再開発と再活性化という二つの相反する動きが一体となって活発になっている。それはまさに先に述べた岡山市の中心市街地の光景だ。いずれにしろ、それらは地域アイデンティティとしての固有性を見出すエネルギーと結びつくことにより、地元志向という現象を生み出している。地方の中心市街地では、主要駅を中心とした再開発ビルやマンションが林立している。そして、そのような潮流のなかで、民・官・産・学が一体となった中心市街地を再活性化するための「まちづくり」が行われている。地方のローカル性を重視し、個性的な「まちづくり」をスローガンとして、様々な「○○塾」の設立や「持続可能なxxx」というスローガンなどが謳われている。もちろんそのようなとりくみには、切実かつ重要な問題意識を備えているものも少なくない（1）。

しかし改めて再帰的なメッセージが込められたこの地元という言葉にも、どこか空虚な感じ、さらには保守性や閉鎖性を感じざるを得ない。地元といった場合、それは誰にとっての「地元」なのかという視点が見え難いのだ。とりわけ 1970 年代後半以

降の村おこしやまちづくりでは、再帰的なものこそ——つまり近代がもたらした様々な問題に反省的であることを踏まえること——が新たなるグローバルな競争の資源として位置づけられていたことを踏まえると、再帰的＝反省的であることの本来的な意義がどこか置き去りにになっている感は否めない。つまり、反省しているフリをして、反省しているのか、していないのか良く分からないことも見過ごされてしまうような状況がある。そしてその過程で隠蔽され、見え難くなっているもう一つのジモト像があるように思われるのだ。

2.3. 地元への包摂

地元の再発見は、ファンキーモンキーベイビーズのようなポピュラーカルチャーのみでなく、サブカルチャーの領域においても見ることができ、それらが諸地域のまちづくりと結びついている。例えば、レゲエ音楽と静岡県の焼津という地域を結びつけた PAPA U-GEE の『焼津港』（鈴木 2008）や埼玉県鷲宮町におけるアニメ作品『らき☆すた』など（山村 2008、谷村 2008）では、クールな文化と地元が結びつくことによってまちづくりが試みられている。岡山でも「ヨサコイ祭り」のフォーマットが踏襲された「うらじゃ祭り」など、地元意識とまちづくりが強く結びついた動きが活発である。これらの例を見てみると、地元へと包摂される文化は、必ずしもその地域に固有なものである必要はない。また、地域の均質性のみを主張するのではなく、文化の多様性には寛容である。例えば、最近流行しているクリエイティブ都市論では、多様性や他者への寛容性の高さは、魅力を高めるものとして理解されている（フロリダ 2007＝2005）。つまり、グローバルに流通している文化やそのフォーマットを租借することはやぶさかではないというわけだ。つまり多様性や他者への寛容性の高さは、クリエイティブな資源として地元を活性化するものとして受け止められているのである。障害者のためのユニバーサル・デザイン、外国人住民や観光客のための外国語のサインといった多様性を証明するインフラの整備は欠かすことができない。そのように、地域の固有性を掲げながらも、積極的に多様なものを受け入れる過程において、地元は改めて発見される。地元は、自分たちに居場所を与えてくれ、自分たちとは何者かという存在論的な意味を与えてくれる。多様性に寛容であり閉鎖的ではない。さらに、地元の固有性を魅力として外へと向かって発信することによって地域アイデンティティとして前景化していくのである。

クリエイティブな資源、グローバルエリートである外国人ビジネスマンや資本、海外からの観光客といったヨソモノへの寛容性を備えた、規模は小さいもののグローバル都市としての岡山市という側面は前景化する。そのことを通じて地元に対する誇りが回復すると受け止められるのである。しかしその同じ地元を受け入れられないヨソモノが地方都市の舞台裏には存在している。つまり、地元の前景化がある種のヨソモノの後景化をともなっていることには注意を向ける必要がある。グローバル化に対す

る危機感から私たちの地元やそこで生活する人びとを守るために「どげんかせんといかん」と試みられるローカルなまちづくりや地元への包摂が、一部の例外を設けることによって成立しているとするならば本末転倒であろう。つまり、地元は誰を包摂し、誰を排除しているのか。地元のなかに在日などの外国人住民は含まれているのだろうか。ホームレスのように地域イメージを高めるとは考え難い人びとの存在はどうだろう。これらのジモトという視座から地域社会を捉えかえしてみると、流動化する近代を経験する私たちは何を顧みることから出発すれば良いのかが見えてくる。近代への反省が国や地域活性化の資源として動員される現在、その是非はともかく地域社会を批判的に想像する力はオルタナティブを想像するための最低必要条件となっているのである。

2.4. 可視化／不可視化される多様性が意味すること

多様性への観点から国や地方自治体によって進められている多文化共生のとりくみは、地域社会において生活する異なるバックグラウンドを持った人びとの存在を明らかにしている。またメディアやエスニックフードなどを通じて多文化的なイメージは消費を通じて広まっている。韓流ブーム以降は、かつては文化的に無臭化されていた焼肉屋や朝鮮料理屋も、**Korean BBQ** や韓国料理などの看板を大きく掲げている。岡山のような地方都市の中心市街地も、以前とは比べ物にならないくらいエスニックなイメージで溢れている。実際に、韓流ブーム以降は自分自身のエスニシティを表明しやすくなった、きっかけが増えた、という在日の声も良く耳にする。

ただし、行政のとりくみや消費を通じたエスニシティの可視化によって、在日への理解は深まっているのだろうか。むしろ、何かが前景化することによって、後景化しているものがあるのではないだろうか。たしかに、行政の多文化共生のとりくみに関わるのは一部の民族組織に深く関わっている人びとのみであるし、消費されるようなビジネス——例えばパチンコ屋や焼肉屋——を営んでいるのもまたほんの一握りの人々に過ぎない。そしてまた、かつて日本全国の主要ターミナル駅周辺や闇市、工業地帯や河川周辺などの形成された在日共同体は溶解している。ゆえにそれは、かつてのような可視化された差別やスティグマからの解放を意味しているが、ほとんどの在日たちはそこから離れ、地域社会の郊外の風景へと消えていったことを示しているのである。そして、90%以上の在日が日本人と結婚し、在日同士よりもダブルといわれる日本人と在日の親を持つ子供たちの方が増えている。しかし、そのような地域社会も他者と交わるなかで変化しているのだという混淆的なイメージは、行政や消費文化におけるエスニシティ表象からは窺い知ることは出来ない。一方で、北朝鮮バッシングや在特会や右翼団体の活動を通じて、在日に対する日常的な差別や偏見、暴力が存在している。そしてまた、就職差別や結婚差別といった問題も、現代の在日の若者が経験しているものである。

しかしこのような社会的風潮やメディア的環境のみが、地域社会における在日を不可視化させているわけではない。岡山で日本人に対する在日に対する意識調査や普段の会話からも明らかになったことだが、在日の知り合いや隣人がいるという人は少ない。また、消費文化を通じて、日常を通じて在日が生み出した文化に触れあっている。ただしそのことは、例えば普段の職場や学校といった公共の場所で語られるものではない。フィールドワークを行った中小企業でも、在日のことが話題に上ることはない一方で、北朝鮮バッシングをめぐる言説が職場の潤滑油となるジョークとして語られる。このことが意味しているのは、在日や他者に対する差別や排除が無知や無関心だけに根差したものではないということである。むしろそれは、労働や消費といった日常生活の最優先事項ではないものであるがゆえに、自分たちとは関係ないと切り捨てられているものである。

それに対して、そのような語りによって排除・選別される存在である在日にとって、そのようなストレスの発散は平凡なものではありえない。それは、暴力として経験される。しかし、そのような暴力はかつてのように在日という集団に対して向けられるものではない。このことは、かつてのような在日に対するスティグマや差別が都市空間においては解消されていることを示している。また、そこにはかつてのような差別・排除されるものの結末は存在しない。それらの諸問題は、より個人化しているがゆえに見え難く、社会問題として認識されるに至らないものも多い。朝鮮学校の学生に対する嫌がらせや暴力・暴言の類は集合的であるがゆえにメディアで取り上げられることもあるが、個別に経験される差別はほとんど可視化されることはない。そのような個別な出来事が、行政やメディアを通じて周知されることはほとんど皆無に近い。しかし、それらの問題は否応なしに諸個人に回帰してくるのであり、諸個人の在日が自己責任で向き合うべき問題として放置されているのが現状である——やさしかった彼の母親が、彼女が在日コリアンであることを知ったその日から無視する。この冷たい暴力にどのように対処すればよいのだろうか。でも昔にくらべればマシだし、どうにかなるだろう——。このような非集住的環境で生活する在日をめぐる問題は、個人化すること（アイデンティティ政治からの乖離）によって、また政策を通じて解決されたと判断されることによって、二重に不可視化されている。そしてこの二重の不可視化と個人化が結びつくことによって、日常的な差別・排除は、社会問題というよりは、自然現象（あるいは自然災害）のようなものとみなされてしまうことにより、在日の孤立を招いているのである。

しかしながら、従業員たちが自分や自分が生活している地域社会から切り捨てているのは在日の存在だけなのだろうか。これが不可視される領域とともに本稿で検討したい、もう一つの問いである。むしろ、切り捨てているのは、自分自身や地域社会との歴史・社会的なつながりが持つ固有性そのものなのではないだろうか。その意味に

において、批判的なジモトという視座は、不可視化された地域社会の多様性を明らかにするのみでなく、その固有性を発見していく視点へと連なっているものである。

3. 知的生産のヘゲモニーに対する戦術としてのジモトという視座

地域社会のイメージを魅力的に発信することに対して、ジモトという視座は批判的にそれらによって不可視化される次元を明らかにしようとするものである。しかしそれは、ジモトを明らかにすることによるネガティブ・キャンペーンではない。なぜならば、現代社会における産・官・学・民などのあらゆる領域において試みられているのは、近代化への批判的視座に基づいたものなのである。つまり、近代化がもたらす問題への批判的視座や対応そのものが、豊かさの生成やオルタナティブな価値観と結びつけて捉えられているのである。しかし、ジモトという視座は、いかに批判的なのかという次元においていわゆる地域ブランド的な固有性の発信とは異なるものである。

批判的な視座とは本来、地域社会のローカルな歴史社会から有機的に生じるべきものである。もちろん、他の地域での先進的なとりくみから学ぶことは大事なことだが、それを取り込む側のローカル性への視点がないとするならば、固有なものが生成されていくことはない。単なるコピーである。それが地域社会の現状と乖離する場合は、シュールな状況さえも生み出す。地域の豊かさを示す地域ブランドや関連商品には固有性から生じる驚きを感じることは少ない。まちづくりのとりくみなどにおいても、既視感で溢れている事例がなんと多いことか。それぞれのとりくみそのものは批判的なデザインであるのに、批判的な精神や言葉が生成されない状況が生じるのである。つまりここで問題としたいのは、地域社会をめぐるグローバル化と知識生産のヘゲモニーの問題である。批判的な理論や実践を安易にあるいは従順的に受け入れることは、批判的な知識が生成しないことを意味するのみでなく、批判的な知識を資源とするグローバルイズムのヘゲモニーにおいて周縁化されることを意味するのである。

そのような周縁的な場における知的生産の試みとは、地域ブランドにみられるような戦略的なものではなく、戦術的な視点から捉えられるものである。ミッシェル・ド・セルトーは、日常実践における人びとの行為を戦術 (tactics) として、戦略 (strategy) と対比して次のように定義している。戦略とは、「おのれに固有なものとして境界線をひけるような一定の場所を前提しており、それゆえ、はっきりと敵とわかっているもの (競争相手、敵方、客、研究の「目標」ないし「対象」) にたいするさまざまな関係を管理できるような場所を前提にしている」ものである。これに対して戦術とは、「これといってなにか自分に固有なものがあるわけでもなく、したがって相手の全体を見おさめ、自分と区別できるような境界線があるわけでもないのに、計算をはかること」である。セルトーは、このような戦術における頭の働きというのは、言説化されるものではなく、それそのものが決断であり、機会を「とらえる」行

為であり、その際の捉え方であると述べている（セルトー 1980=1987: 24-26）。本稿では、一般的な地域ブランドのような戦略的な視点から発信されるイメージや言説に対抗して、ローカルな知的生産の試みをセルトーが述べるような戦術的な視点から描き出していく。そのために本節では、知的ヘゲモニーに対して地域社会を批判的に分析・記述する視角である知的戦術と調査者にとって身近な世界を読み解く際の課題について述べ、境界域としてのジモトという視点から身近な世界と再会する＝他者化することによって分析・記述することの知的意義について述べる。

3.1. 分析・記述するうえでの知的戦術

グローバル化と知的生産のヘゲモニーに対抗するジモトという視座とは、ヘゲモニーの中心部で生まれた批判的な理論を受け入れつつも、ローカルな事例のリアリティを批判的に考察するものである。その場合、次の二つの知的戦術が試みられる。

第一に、事例と理論的枠組みを往還しつつも、両者に存在する緊張関係を捨象せずに記述すること。つまり、理論的な枠組みに都合の良い事例やエピソードを選択することによって切り捨てられる、それとは矛盾するようなフィールドワークのエピソードや経験が放つ迫力を記述していくことである。そのような作業を通じて、そこで生じている社会問題は、知的ヘゲモニーの中心を映し出す鏡として機能するのではなく、生活者の知的生産と結びつけて考察することが可能となる。

第二に、そのような理論的な枠組みに回収されない領域を当該地域社会固有のものとして捉えるのではなく、その現象の普遍性に着目すること。このことによって、知的生産のヘゲモニーのなかで周縁化された領域を横断的に結びつけてオルタナティブな時空間を想像することが可能となる。ジモトという視座が越境し、横断的に連なっていくことを通じて、知的生産のヘゲモニーに変化を生じさせることも可能となってくる。本稿では、これらの二つの知的戦術を、フィールド調査を通じて出会った人びととの協働の知的生産の試みとして位置づける。ただし、そのような協働の知的生産の試みは容易なものではない。自分が慣れ親しんだ場所や人びとを調査し、分析するといった場合の難しさについても以下で検討しておくことにする。

3.2. 身近な世界を批判的に読み解く際の注意事項

身近な世界を考察の対象とする場合、当事者としての地縁、知識や生活体験がフィールド調査をより豊饒なものとしてくるとともに、その逆にローカルな人間関係、知識や経験がゆえに様々な困難も生まれてくる。そしてそれらの困難は、フィールド調査を遂行していく際の問題のみならず、社会調査そのものが抱えている矛盾や問題点をも含んでいるのである。フィールドにおける人間関係とローカルな知識の二つの問題について以下で検討してみることにする。

第一に、ジモトをフィールドワークしたい調査者にとっての最大のアドバンテージはインフォーマントの獲得などの人間関係の構築である。例えば筆者の場合、在日の友人・知人はいなかったため、岡山市役所の国際課に勤めていた友人に電話で誰か紹介してもらえないかと問い合わせたところ、国際課と仕事上の付き合いがある民団の事務局長を紹介してもらった。旧知の信頼関係があるがゆえに、ジモトの領域での調査を進めていくこともスムーズに入れるのだ。ただし、そのような信頼関係に基づいて調査を始めるわけだから、それを裏切ることは自分が調査するフィールドでの信頼関係を揺るがしかねないのである。また、調査の過程で、高校生時代の同級生の在日と出会ったこともあった。この場合は、彼女がたまたま在日であるということを公然としていたので問題はなかったけれど、もし自分が在日であることを隠しているといった場合、調査を進めていくうえではとても厄介なものになりうる。これらの例が示しているのは、ジモトでの調査とは生活当事者としての利害関係者として調査することが求められてくるということである。そうであるがゆえに、調査者の調査倫理が生活当事者という根本的なところから問われるのである。もちろん、通常のフィールド調査でも同様の問題が生じるが、ジモトでの調査では、家族や親戚を含む自分と関係するすべての人びととの関係性が問われてくるのである。しかしそのことはまた、社会調査というものが実は対象者のみならず、調査者の親密な関係性を基盤として成立しているのだということを示している。そしてジモトでのフィールドワークを通じては、通常の人間関係と同様に、関係性とともによりフィールドという場所も変容していくし、それによって新たな問いが導き出されてくるということもある。ともかく、ただ単に好奇心で知りたいというわけにはいかず、常に誰が誰を何のために知ろうとするのかという動機が重要となってくる。

第二に、旧知の人間関係とも関連してくるが、自分にとって馴染みのある場所や人びとを改めて捉えかえすのはとても難しい。ジモトという視点で過去の関係性を捉えかえすならば、人間関係もまた変化していくものだ。しかし、家族や友人といった親密な領域において長年培ってきた人間関係を、改めて捉えかえすのはとても難しいのだ。そのためには、見慣れたものを見慣れぬものにするような視点が必要となってくる。そうしなければ、見慣れた風景や人びとの会話が想起させるものは既視感に溢れたものになってしまう。筆者自身も、話をしているうちに緊張感もなくなり、何だかどうでも良い感覚に陥るような経験もたびたびあった。最後まで話を聞くことに先行して筆者の解釈の作業が開始されてしまうからである。ゆえに、親密な風景や人間関係を他者化する必要がある。親密な領域を他者化する場合には現在の社会的な文脈とともに、過去の歴史的な文脈から得られる想像力がヒントとなる。

広島を出身とする音楽批評家の東琢磨は『ヒロシマ独立論』において、自分の出身地であるロサンゼルスに研究対象としたマイク・デーヴィスが引用しているウォルタ

ー・ベンヤミンの「遊歩者の回帰」にある次の言葉を引用して、故郷を調査するためのアプローチについて述べている。

皮相な誘因、エキゾチックなもの、絵に描いたように美しいものが効果をもたらすのは外国人にだけである。ある都市を描写するためには、そこで生まれ育った者はもっと別の、もっと深い動機がなければならない。地理的な遠くにではなく過去へと旅する者の動機が。生まれ育った都市についての本はつねに記憶とかかわりがあるだろう。そこで子供時代を過ごしたことは意味がないことではないのである（東 2007）。

つまり、ある都市で生まれ育った者にとって、故郷の風景とは特に刺激があるものではなく、とても平凡に映るのだ。そしてまた、故郷から離れて生活する者にとって、故郷の風景は懐かしい思い出とともに強固に定着している。ゆえに、そのような場所について描くためには、出身地をめぐるノスタルジアに対して、歴史的な想像力が必要となってくる。見慣れた街や人びとを見慣れないものにする作業とは、それらの過去さえも再想像していくようなプロセスとなる。知っていると思いついでいた家族や友人にインタビューしたり、知っていると思いついでいたりする場所の歴史を調べてみると、埋もれていた人と場所をめぐるローカルな知識が生成されるとともに、それぞれのエピソードへのリスペクトの感情が芽生えてくる。このリスペクトの感情とは、ナショナリズムや郷土愛から醸成されるプライドによる結びつきとは異なり均質的な全体性が措定されているわけではない。むしろ、日常的な人と場所をめぐるつながりと断絶の実態が明らかになることによって、他者へのリスペクトと自尊感情が生成される出発点を確認できるのである。

3.3. ジモト＝境界域を歩く

2002年のフィールド予備調査から、筆者のジモト歩きは始まった。中小企業で働き、彼・彼女らの家庭やプライベートにお邪魔する一方、在日の若者たちとカフェや居酒屋、様々なイベントを通じて対話した。懐かしさとともに、ここが嫌でアメリカやオーストラリアへ出て行ったのだということに改めて気づかされることも多々あった愛憎の旅。しかし、フィールドワークという旅を継続していくにつれて、フィールドの人間関係や問いが深化するとともに、過去をめぐるイメージも変化していったのだった。ふだん疑うことなく存在する私たちの親密な領域を、一步踏み込んで考察してみるとことによってジモトの姿が見えてくる。それは、知っていると思いついでいた家族や友人との再会であり、それまで知らないと思いついでいた他者との再会でもある。あまりに近すぎて見え難くなっている領域を他者化することによって、私たちが埋め込まれている状況が見えてくるのだ。

ジモトの家族や親戚、友人といった旧知の関係性にある人びととの対話から、今まで知らなかった様々なエピソードを知ることになる。そのとき、知っていると思い込んでいた人びとの語りがとても新鮮に感じられ、他者性が立ち上がってくる。その一つひとつは社会的な大事件ではないが、語られることのない社会における人びとのつながりや信頼関係を確認できるし、そしてまたそこには差別や排除といったシビアな現実が覆い隠されていることも明らかになる。しかし、自分の親密な領域だけを歩いていたのでは見えてこない問題がある。筆者は、自身の親密な領域と同じ生活空間にいる在日の視点から問い直すことを通じて相対化していった。在日との出会いを通じて、自分の生まれ育った場所を理解する多角的な視点を得るとともに、それまで知らなかったけれど存在していた彼／彼女らとの関係性が明らかになってくる。その意味において、それは出会いであるとともに、再会である。本稿では、このような批判的な視点を通じて再会する領域を「境界域」と捉える（ロサルド 1993=1998）。

レナート・ロサルドは、調査者が境界線によって調査対象を囲い込み、均質な集団・現象として捉えたいという「濃密」に記述する（*thick description*）ではなく、フィールドとそこで生きる人びとの営みを「性的志向、ジェンダー、階級、人種、民族、国籍、年齢、政治、服装、食べ物、趣味」といった枠を中心に現れる「境界域」として捉えている。このアプローチによって、記述対象の混濁性を捉えることができる。また、このアプローチを混濁性の抽出という点のみではなく、境界域という定義しがたい領域や対象を描き出す方法論として敷衍していけば、社会調査や分析によって無視されがちで雑多なものや平凡だと考えられている日常実践の営みが持つ迫力を描き出すことも可能である。そして、この場所へのアクセスは、特定の制限があるわけではなく、生活世界と解離することなく誰にでも等しく開かれている。境界域を歩き、出会い、語り合い、互いに学ぶことによって、ローカルな知的な生産の営みが遂行されていく。ジモトを歩くとはい、自己と他者とのあいだに生じる境界域を歩き、両者を遮る壁のようなものがいかに歴史的に形成されてきたのか、そして現在も再形成されているのかを生活者の視点から共働的にかつ批判的に観察する知的な挑戦である。

ジモトを歩き、出会い、語り合い、学ぶ。そのような日常実践を通じてローカルな場から生成された知識から、知的ヘゲモニーの覇権とその近代的な展開に対抗する流れを生み出す作業といえば大袈裟に聞こえるかもしれない。けれども、描かれることはないが世界中に無数に存在する日常生活の実践という営みの一つを照射することから、他の場所でも同じような現象が起きていることをお互いに確認するための道標となる。そこに、ローカルかつ越境的な知の生成と繋がりがあるのではないだろうか。

[注]

(1) 例えば水俣市の職員を勤めていた吉本哲郎が提唱した地元学は、水俣病で苦しんだ地域住民が環境問題に特化して取り組んできたことから生まれてきたと述べる。都市と比較して「ないものねだり」するのではなく、自分たちの力でそれぞれの地域の自然や歴史を見つめなおすことの重要性を説いている。そこには、かつて水俣にはたくさんの知識人が集まり、水俣病が社会問題化されていったが、そのことは地域住民が自分たちで考え、行動するというところに結びつかなかったという反省が込められている（吉本 2008、結城 2009）。

[文献]

- ド・セルトー、ミッシェル、山田登世子訳、1980=1987、『日常実践のポイエティック』国文社。
- フロリダ、リチャード、井口典夫訳、2005=2007、『クリエイティブ・クラスの世紀—新時代の国、都市、人材の条件』ダイヤモンド社。
- 東琢磨、2007、『ヒロシマ独立論』青土社。
- 五十嵐太郎、2004、『過防備都市』中央公論新社。
- 五十嵐泰正、2010、「北の「荒野」を往く—開発主義と向き合うドライブ紀行」『Posse』Vol. 7、72-92頁。
- 川端浩平、2010、「もう一つのジモトを描き出す—地方都市のホームレスの若者から地元現象を考える」『先端社会研究所紀要』第4号、関西学院大学先端社会研究所、2010年、35-51頁。
- 響田竜蔵、2010、「過剰包摂される地元志向の若者たち—地方私立X大学出身者を対象とする比較事例研究」樋口明彦『東アジアにおける若者問題』法政大学出版局。
- 三浦展、2004、『ファスト風土化する日本—郊外化とその病理』洋泉社。
- 三浦展監修、2005、『検証・地方がヘンだ!』、洋泉社。
- ロサルド、レナート、1993=1998、椎名美智訳、『文化と真実—社会分析の再構築』日本エディタースクール出版部。
- 渋谷望、2003、『魂の労働—ネオリベリズムの権力論』青土社。
- 鈴木慎一郎、2008、「“レペゼン”の諸相—レゲエにおける場所への愛着と誇りをめぐって」鶴本花織・西山哲郎・松宮朝編『トヨティズムを生きる—名古屋発カルチュラル・スタディーズ』せりか書房。
- 玉野井芳郎、1979、『地域主義の思想』農山漁村文化協会。
- 谷村要、2008、「インターネットを媒介とした集合行為によるメディア表現活動のメカニズム—『ハレ晴レユカイ』ダンス『祭り』の事例から—」情報通信学会誌 vol. 25 No. 3。
- 鶴見和子、1996、『内発的発展論の展開』筑摩書房。
- 山本英治、1982、「「地方の時代」から「地域の時代」へ」『現代のエスプリ』No. 176、5-20頁。
- 山村高淑、2008、「アニメ聖地の成立とその展開に関する研究—アニメ作品「らき☆すた」による埼玉県鷲宮町の旅客誘致に関する一考察—」『北海道大学国際広報メディア・観光学ジャーナル』No. 7。
- 吉本哲郎、2008、『地元学をはじめよう』岩波書店。

結城登美雄、2009、『地元学からの出発——この土地をきた人びとの声に耳を傾ける』
農山漁村文化協会。

[新聞記事]

『朝日新聞』2010年5月15日朝刊

在日朝鮮人と国家——韓国における在外国国民参政権をめぐる¹

金泰植

はじめに

本論文は在日朝鮮人の国籍をめぐる政治について、主に 2012 年 4 月の韓国国会議員選挙と 12 月の韓国大統領選挙から大韓民国の旅券を所持する在日朝鮮人に対して付与される在外国国民参政権との関わりの中で考察することを目的とする。ここでいう「在日朝鮮人」とは誰か。本稿では、「日本の外国人登録法上の国籍表示の如何を問わず、日本による朝鮮の植民地支配の時期および解放後の混乱期に日本に渡って来た朝鮮人とその子孫」を「在日朝鮮人（以下、括弧省略）」と定義する。在日朝鮮人をめぐっては他にも「在日韓国人」や「在日韓国朝鮮人」「在日コリアン」「在日同胞」「在日僑胞」などの呼称がよく用いられるが、本稿では引用文や特別な事情の無い限り在日朝鮮人の呼称で統一する。これらの複数の呼称の存在こそが、在日朝鮮人の歴史性と政治性の反映であり、在日朝鮮人を語る上での困難さを内包している。

在日朝鮮人の国籍について、日本社会と韓国社会ともに広く理解されているとはいえない。社会一般的なレベルのみならず、専門家や知識人の中でも客観的な事実に対する誤りはよく見受けられる。最も多い誤りは、所謂「朝鮮籍」を朝鮮民主主義人民共和国²の国籍と考え、「韓国籍」を大韓民国の国籍と考える誤解である。これは日本の外国人登録法上の表記の変遷に関する無理解だけに留まらず、本来在日朝鮮人の国籍の有無は日本の外国人登録法ではなく「本国」である南北両政府の国籍法によって決まるという初歩的な事実に対する理解の欠如によるものである。しかしその一方で、そのように象徴化されて来たのも事実である。

¹本稿は京都大学 GCOE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」の次世代研究ユニットの支援を受けながら執筆された「在外国国民参政権と在日朝鮮人の国籍をめぐる政治」（獨協大学国際教養学部紀要『マテシス・ユニウェルサリス』収録）に修正を加えたものである。

²朝鮮民主主義人民共和国の略称をめぐる主には日本のメディアでは「北朝鮮」と表記するのが一般的である。しかし朝鮮民主主義人民共和国の海外公民団体である総聯は「北朝鮮」という呼称を反対し、代わりに「朝鮮」や「共和国」との呼称を用いている。本稿では当事者が望まない呼称を使うのはよく無いので「北朝鮮」との呼称は用いない。しかしながら「朝鮮」の略称を採用すると外国人登録法における「朝鮮」表記と混同されやすく、「共和国」の略称は固有名詞が不明である上に韓国の歴代政権を指して「第〇共和国」とも呼ぶので、多少読みづらくなるのを覚悟の上で本稿では略称を用いないこととする。なお、大韓民国に関しては「韓国」と略す。

在日朝鮮人の国籍を考える上で、金英達の指摘した「観念的国籍」と「実効的国籍」という考え方がとても有用である³。在日朝鮮人は観念的国籍という点では南北双方の国籍法により二重国籍を所有しているが、実効的国籍という点では、国籍を行使する上で様々な制約が伴う。なお日本の外国人登録法上の表記を指す「朝鮮籍」「韓国籍」という呼び方は、一般的ではあるが国籍と混同しやすいという点、そもそも在日朝鮮人が入っている「籍」など無いという点から、本稿では以下「（日本の外国人登録法上における）朝鮮表記」「（同）韓国表記」と記すことにする。

近年韓国では在日朝鮮人を対象とした研究が活発に行われている。しかしその多くは、韓国でいうところの「冷戦・分断的思考」に捉われており、また客観的な事実に対する誤りを含み没歴史的に在日朝鮮人を論じている論考が多い。一つの例として、2011年2月25、26日にかけて東国大学日本学研究所が学術誌『日本学』の創刊30周年を記念して行った、国際シンポジウム「在日コリアンのアイデンティティと超国家主義」をあげられる。ここではシンポジウムにおける各発表を収録した『日本学』vol.32を参考にする。この号にはまず、本稿で取り上げる在外国民参政権と「在日同胞」の関係について論じた弘益大学校准教授である金雄基の論文「在外国民参政権と在日同胞社会の変化」⁴がある。金雄基論文は、在外国民参政権が実現した経緯について丁寧にまとめられておりこの問題を考える上で貴重な参考となるが、ここで使われている「在日同胞」の定義は非常に曖昧である。そもそも在日朝鮮人全てに参政権が与えられる訳ではないのだが、論文の中において「在日同胞の民族教育」について民団⁵系とされる学校4校のみが取り上げられるなど、金雄基のいう「在日同胞」は韓国表記の在日朝鮮人の中でも総聯⁶や朝鮮学校と無関係で、民団とのみ関係の深い在日朝鮮人に限定されているように捉えられる。しかしその一方で、「在日同胞」が参政権を行使することによって本国に与える影響についての章では、「オールドカマー」という表現を用いながら朝鮮表記の在日朝鮮人や韓国表記を持ちながら朝鮮学校や総聯と関係を保つ在日朝鮮人も含まれている⁷。このように、金雄基の論文においては「在日同胞」という言葉が文脈によって伸縮可能になってしまっている大きな問題点を指摘できる。

³金英達 1992.

⁴김웅기, 2011.

⁵大韓国民団. 1946年10月3日に結成された大韓民国を支持する在日朝鮮人たちによる大衆団体.

⁶在日本朝鮮人総連合会. 1955年5月25日に結成された朝鮮民主主義人民共和国を指示する在日朝鮮人たちによる大衆団体. 前身の在日本朝鮮人連盟は1945年10月25日に結成. 左傾化とともに出て行った在日朝鮮人が民団を建設した.

⁷これは日本政府が統計を出す際に朝鮮表記と韓国表記の在日朝鮮人を一緒にしてその人数を公表することとも関係があるが、中央選挙管理委員会も同じように予想選挙人数を計算している.

一方、同誌に収録されたソウル大学校教授である趙寛子の論文は、在日朝鮮人の呼称や国籍について詳細に論じながらも、「90年代後半には朝鮮籍を離脱し日本籍を取得したり、朝鮮籍を維持したまま韓国籍を同時に取得する現象が増加する」⁸などの、国籍と外登法上の表記を混同した記述がみられる。趙寛子の論文には、朝鮮民主主義人民共和国が「朝鮮籍」の在日朝鮮人に対し海外公民と認め旅券を発給して来たとの記述もあるが、これも正しい説明ではなく、朝鮮表記と朝鮮民主主義人民共和国の公民⁹が同じであるような印象を与えるミスリードだと言える。客観的な事実の誤りや、在日朝鮮人を南北に奇麗に分断する見方自体が、在日朝鮮人を取り巻いて来た政治力学に色濃く影響されている。

在日朝鮮人の生活世界は、金雄基や趙寛子の論じるような簡単に南北に分かれるものではない。また制度的なレベルにおいても、「朝鮮表記＝朝鮮民主主義人民共和国の国籍」「韓国表記＝大韓民国の国籍」ではないし、韓国表記のまま朝鮮民主主義人民共和国の旅券を取得することも可能なら、朝鮮表記のまま韓国旅券を取得することもできた。詳しく紹介できないが、筆者の知り合いには韓国表記のまま南北両国の旅券を取得した在日朝鮮人もいる。このような境界が曖昧で、矛盾を孕みながら重なり合う在日朝鮮人を取り巻く権力構造にこそ注目すべきである。

本稿の関心は、特に韓国との関係の中で在日朝鮮人の国籍がどのように問題になるのかという、国籍をめぐる政治についてである。国籍をめぐる政治は、ナショナル・アイデンティティの境界をめぐる政治である。特に参政権は国民の持つ権利の中でも中心となる権利の一つである。参政権の付与という、在日朝鮮人に国民としての権利を付与する国民化の動きの中で、在日朝鮮人がどのように境界をめぐる政治の影響を受けているかについて明らかにすることが本稿の目的である。在日朝鮮人の国民化は、国家が在日朝鮮人を国民化しようとする動きと共に、国家を求める在日朝鮮人の主体的な動きの双方向の要因から推進されて来た。そしてナショナル・アイデンティティの境界を再び引こうとする、または明確にしようとする、誰が国民で誰が非・国民かをめぐり政治の中で、在日朝鮮人のアイデンティティは引き裂かれ、片方の分断国家の選択と国家への忠誠を迫られているのである。その具体的な様相を本稿では描こうとするが、植民地過去と分断祖国を持つという在日朝鮮人固有の歴史性を考える必要があることは言うまでもない。そもそも韓国という国家のナショナル・アイデンティティ自体が、同族である朝鮮民主主義人民共和国を他者としながらも大韓民国の一部とする複雑なものなのである。

本稿ではまず、在日朝鮮人の外国人登録証における「国籍等」欄の「表記」と在日朝鮮人の国籍についての概説から始める。その上で在外国民参政権の付与に伴う韓国

⁸趙寛子 2011:205.

⁹朝鮮民主主義人民共和国は「国民」という言葉の代わりに「公民」という言葉を一般的に使う。例えば在日朝鮮人は「海外公民」になる。

政府による在日朝鮮人の国民化と非国民化について、朴正熙政権の下で行われた在日朝鮮人の国民化の作業との連続性の中で考察をする。その上でいくつかの事例を通して、在日朝鮮人の国籍をめぐる政治の重層性とナショナル・アイデンティティの境界をめぐる政治がどのように在日朝鮮人の生を規定しているかについて、主に韓国との関係の中で明らかにする。

1. 外国人登録における表記と在日朝鮮人の国籍

1-1. 外国人登録における表記

植民地時代、在日朝鮮人はみな「日本人」であった。とは言っても朝鮮総督府が管理する朝鮮戸籍に編入され、日本本土への渡航制限などもあり日本人とまったく同じ扱いを受けた訳ではなかった。1945年8月15日の朝鮮の「解放」後、新しい国家建設へと朝鮮半島が動く中でも依然在日朝鮮人は日本国籍を有していた。そのような中で、天皇の最後の勅令として外国人登録令¹⁰が發布されると、その第11条は「台湾人のうち法務総裁の定めるものおよび朝鮮人は、当分の間、これを外国人とみなす」と定めた。これにより旧植民地出身者は日本国籍を有しているのに外国人と扱われ、一度日本国外に出ると「再入国」を禁止され、また外国人登録証明書の常時携帯が義務付けられるなど日本政府にとって治安管理的対象として扱われたのである。そして外国人登録令の發布を受け1947年の8月から9月にかけて全面的に実施された外国人登録において、在日朝鮮人の国籍表示欄には「朝鮮」と記載されることとなった。

外国人登録が行われた1947年は、未だ南北両国家とも樹立されていない。1948年8月15日に大韓民国が樹立されると、それを支持する民団と韓国政府の強い要望のもとで、最初の切り替えの1950年以降表記を「朝鮮」から「韓国」または「大韓民国」に変更をする在日朝鮮人が現れた。そのような中で法務府民事局長通達「平和条約の発効に伴う朝鮮人、台湾人等に関する国籍及び戸籍事務の処理について」¹¹により、1952年4月28日午後10時30分サンフランシスコ平和条約の発効とともに旧植民地出身者の日本国籍は失われることとなったのである。

その後在日朝鮮人の日本における不安定な法的地位が続いたが、1965年6月22日に日韓条約が結ばれると同時に「在日韓国人法的地位協定」が結ばれ、韓国表記の在日朝鮮人にのみ協定永住権が与えられるようになった。そして日本の法務省は同年10月26日に、外国人登録証明書の国籍記載欄の韓国記載は国籍であるが朝鮮は符号であるとする「政府統一見解」を発表した。これに対し主に総聯に所属する在日朝鮮人たちは、差別的な永住権の付与に反対する運動を開始し、また朝鮮表記を朝鮮民主主義

¹⁰ 1947年5月2日公布・施行勅令第207号。

¹¹ 1952年4月19日付民事甲第438号

人民共和国の海外公民を表すものとして認めることを要求した。1965年10月25日に東京・九段会館で開かれた「朝鮮国籍要請者大会」、韓国表記から朝鮮表記へと再び戻すことを望む在日朝鮮人たちが作った自主組織である「朝鮮国籍に改める会」の名前から、朝鮮表記を朝鮮民主主義人民共和国の国籍として象徴化していた事実を読み取ることができる¹²。

その一方で作家である金石範などをはじめとした在日朝鮮人は、朝鮮表記を朝鮮民主主義人民共和国への支持を表す理由からではなく、朝鮮半島全体を表す表記として、つまり分断への抵抗と統一を志向する表記として捉えそれを守ることを主張している。このように日本の外国人登録法上の朝鮮表記と韓国表記は、それぞれの政治的立場を表す象徴としての意味を獲得していったのである。

1-2. 観念的国籍と実効的国籍

しかし在日朝鮮人の国籍は、本来日本の法律によって決まるものではない。誰が日本国籍を有するかについて決めるのは日本の法律であるように、在日朝鮮人の国籍を決めるのも「本国」の国籍法によってである。しかしここで複雑になるのが、在日朝鮮人の本国である朝鮮半島が分断しており、また日本と朝鮮民主主義人民共和国の間に国交が樹立されていないという点である。

朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国は、それぞれが朝鮮半島で唯一正当な国家であることを主張している。例えば韓国には、朝鮮民主主義人民共和国の行政区域を統括する以北五道委員会¹³があり、平壤市長などを初めとした行政の長も存在する。韓国の法律上は平壤市民も韓国国籍を有している韓国人であり、その逆もしかりなのである。そして在日朝鮮人も、南北双方の国籍法により日本の外国人登録法上の表記の如何に関わらずに南北双方の国籍を所有しているのである。¹⁴

ただし南北双方の国籍を有していると言っても、法律論上の話であり実態が伴っているとは言いがたい。ここで先にあげた金英達の「観念的国籍」と「実効的国籍」という考え方を参照したい。「観念的国籍」という面において在日朝鮮人は南北両方の国籍を有していると言える。しかしそれが実行力を持つかという点で非常に限定的である。金英達は、国籍を「居住権、参政権、兵役義務などのいろんな権利義務の集合体であり、パスポートの発給、属人法の適用範囲の基準、準拠法決定の連結素などのいろんな機能の束」と定義した。そしてこれらの「具体的な権利義務が実現し、個別的

¹²李敬史 2007:7.

¹³韓国の立場からみる朝鮮民主主義人民共和国に占拠されたままの黄海道, 平安南道, 平安北道, 咸鏡南道, 咸鏡北道を指して以北五道という. 各道の知事を委員によって構成されるのが以北五道委員会である.

¹⁴韓国の国籍法は1948年12月20日, 朝鮮民主主義人民共和国の国籍法は1963年10月9日に制定されている.

な機能が働いた状態を、実効的国籍と定義している¹⁵。このように考えると在日朝鮮人全てが南北双方の実効的な国籍を有しているとは考えにくく、ゆえに在日朝鮮人に対して「無国籍者」や「半難民」といった言葉が使用されたりもする。

例えば本国への参政権の場合、在日朝鮮人が韓国の選挙に参加することは今まで不可能であった。一方朝鮮民主主義共和国の場合、一部の総聯幹部の中に朝鮮民主主義人民共和国の代議員資格を持つものがあり、また選挙の期間に訪朝していた在日朝鮮人が公民として選挙に参加することがあったが、これは特殊で限られた例での参政権の行使であり、在日朝鮮人が広く選挙に参加できる訳ではないため、参政権が保証されているとはいえない。徴兵の義務に関しても、在日朝鮮人が朝鮮人民軍に入隊したという話は聞いたことがないし、一方大韓国の場合、国民登録などをしない限り事実上徴兵の義務は生じず、生じても在外国民二世以下は免除申請が出来る。

また在日朝鮮人はそれぞれの国の旅券を発給してもらうことはできるが、そのためには具体的な国民登録や旅券の申請手続きが必要であり、例えば南北両国家の旅券を取得するなど是非常に難しいのが現実である。このように在日朝鮮人は南北両国家の観念的国籍は有するが、実効的国籍になると極めて制限的で、双方の実効的国籍を同時に行使することは殆ど不可能である。これらの複雑な状況を鑑みても、単純に「朝鮮表記＝朝鮮民主主義人民共和国公民」「韓国表記＝大韓民国国民」という単純な図式が成り立たないことは明らかである。

2. 韓国政府による在日朝鮮人の「国民化」の系譜

2-1. 朴正熙政権と在日朝鮮人

1948年8月15日に大韓民国が、そして同年9月9日に朝鮮民主主義人民共和国が成立した。李承晩政権における大韓民国は、在日朝鮮人に対してさほど関心を見せなかった。李承晩は在日朝鮮人に対し学校閉鎖令が命じられたときこそ、それに反対する声明を出してはいるが、例えば朝鮮戦争に義勇軍として参加しようとした在日学徒義勇軍たちの申し出を当初断るなど、民団系を含む在日朝鮮人に対して国民として積極的に受け入れようとはしなかったように見受けられる。それなので朝鮮戦争の停戦後に在日学徒義勇軍たちに対して満足な補償もせず、彼らの日本への帰還実現のための努力をすることもなかったし¹⁶、1957年に朝鮮民主主義人民共和国が在日朝鮮人の民族教育に対して教育援助費と奨学金を送った時にも、日本政府の受け取りを反対しただけで民団系の学校に対する援助は決して行わなかった。韓国政府が在日朝鮮人に本格的に関心を示しはじめたのは朴正熙政権に入ってからである。

¹⁵金英達, 1992: 14-15.

¹⁶在日学徒義勇軍たちはサンフランシスコ講和条約により日本国籍を喪失したため、日本への再入国が禁止された。詳しくは金賛汀, 2007.

朴正熙は就任当初から韓国社会の深刻な外貨不足を補うために、在日朝鮮人からの本国への投資を促進させようとした。また朴正熙は国内で経済開発へと国民を動員する上で、反共主義と民族主義を徹底的に利用したことで知られている。その時に参照されたのが、まさに在日朝鮮人であった。在日朝鮮人は徴兵制の義務も無いのに朝鮮戦争へ駆け付けた勇敢な義勇兵として顕彰され、そして祖国の経済発展のために尽くした愛国的経済人として表彰された。1976年には異国で亡くなった在日朝鮮人たちのための追悼施設である「望郷の東山」が造成され、また在日学徒義勇軍犠牲者たちは国立墓地に安葬された。在日朝鮮人子弟のための夏季学校や、総聯同胞を対象とした墓参団事業などが推進されたのもこの時期である。

もちろんこれらの動きには、韓国政府の思惑と同時に在日朝鮮人自身の積極的な働きかけが存在した。祖国が再びソ連の植民地を危ぐし参戦した在日学徒義勇軍たちは、戦友たちの死を弔い自らも満足な補償を受けるために国家に認められることを望んだし、多くの在日朝鮮人たちの祖国への想いが祖国への投資や追悼施設建設のための陳情、祖国への留学へと繋がったのである。しかし上記の在日朝鮮人たちが韓国社会に包摂される一方で、排除される在日朝鮮人も現れた。主に総聯と関係がある、もしくはあるとされた在日朝鮮人たちである。この時期、学園浸透スパイ団事件¹⁷を初めとして多くの在日朝鮮人がスパイ容疑で捕まり、また当時のプロパガンダ映画には「北の手先」としての在日朝鮮人が多数登場している¹⁸。軍事独裁政権にとって都合の良い愛国者としての在日朝鮮人は、経済的投資や韓国内の愛国心を鼓舞する為の道具として積極的迎え入れられ、その一方で軍事独裁政権に対し批判的な者や総聯と関係のある在日朝鮮人は、スパイや憎むべきアカとして排除されたのである。

2-2. 在外同胞への関心の高まり

1990年代に入りながら冷戦体制の崩壊、そして中国ロシアとの国交正常化などの影響も受けながら韓国にて在外同胞への関心が高まった。1997年の在外同胞財団の設立や、1999年の在外同胞支援を行なっている NGO 団体である KIN（地球村同胞青年連帯）の設立、同じく 1999年の「在外同胞の出入国と法的地位に関する法律（以下、在外同胞法）」の制定、そして日本で作られた在日朝鮮人に関する映画や在日朝鮮人作家が韓国社会で紹介されることなどにより、韓国社会における在日朝鮮人への関心も少しずつ高まった。当初はあくまでも「自慢出来る韓国人」として、例えばソフトバンクの社長である孫正義、MK タクシー社長の愈奉植、そして柳美里や玄月など成功した文学者たちが紹介されたに過ぎなかったが、KINをはじめとした NGO 団体の

¹⁷1975年11月22日、ソウル大学を中心とする在日朝鮮人留学生18人が北のスパイとして捕まった事件。「真実・和解のための過去史整理委員会」によって冤罪であったと結論付けられ、現在も再審無罪判決が続いている。

¹⁸김태식, 2011.

地道な活動や、民主化の進展の中で行われた「過去史清算」の動きの中で、在外同胞全般に対する関心も高まった。しかし在外同胞への関心の高まりのもう一つ大きな要因として、経済的な要因をあげることができる。

金友子は韓国社会における在外同胞への関心の高まりは、1990年代中盤以降の深刻な経済危機と時を同じくすると指摘する。政界における在外同胞法の制定の背景には在外同胞の経済力を利用しようと言う思惑があり、近年台頭している韓国におけるディアスポラ研究も、人的資源として在外同胞を資源化する事が重要な課題となっているとその目的をあげている。そしてこれら政界と学会と思惑を一致するのが、韓国版華僑を目指す「韓商ネットワーク」論である。つまり韓国における在日朝鮮人への関心の高まりは、在日朝鮮人を「人的資源」として使おうという欲望を孕んでいると指摘できる¹⁹。同じように尹京媛も韓国におけるディアスポラ研究の多くがディアスポラを資源として活用しようとする意図のもとに行われ、そもそもなぜ韓国社会が植民地の解放後もディアスポラを生み出して来たかに対しての反省がなされていないと批判を繰り返している²⁰。

在外同胞国政参政権実現の道のりも、これらと時期を同じにする。金雄基によると²¹、在外国国民国政参政権はまず朴正熙政権下における1966年と1972年に海外不在者投票という形で実施されている。しかしこれはベトナム戦争に参戦していた者たちを対象にしたもので、在日朝鮮人はこれに参加しておらず、維新憲法の成立とともにこの制度も廃止されている。その後第5共和国における憲法の在外国国民条項に基づく海外不在者投票の是非を問う論議が起きているが、本格的な論議が始まったのは1998年の金大中政権に入りながらである。上に見たように在外同胞財団が設立されたのが1997年であり、翌年である1998年には金大中と新千年準備委員会により「在外同胞法的地位特例法制定案」が提出され参政権の問題が論議されている。結局この時点では参政権の付与はならなかったが、これらの流れが翌年1999年の在外同胞法の制定へと繋がっていくのである。

ただしここでも重要なことは、在外同胞を人的資源として活用しようという政府の思惑とは別に、在外同胞自身の積極的な働きかけがあった事実である。金雄基が詳述しているように、特に李健雨を中心とした参政権を求める裁判闘争は特記すべきであり、また在米コリアンやヨーロッパからも参政権を求める運動が活発に展開された。2004年以降は世界韓人議長大会に参席した各国の会長たちもそろって在外国民の参政権を求め始め、ついに2007年6月28日に李健雨などが起こした憲法訴願に対し憲法不合致決定の判決がくだされることによって、在外国国民投票権を巡っての本格的な議論が喚起されたのである。この2007年の判決を元に2009年2月5日に在外国国民に

¹⁹金友子, 2007.

²⁰尹京媛, 2011.

²¹김웅기, 2011.

本国国政参政権を付与する為の公選挙法などの改正案が可決され、2012年の選挙から在外国民が参加できるようになった。

しかしここで疑問が生じる。そもそも「在外国民」とは誰なのだろうか。また「在外国民」に在日朝鮮人は含まれるのだろうか。白井京によると、1997年に李健雨などが初めて起こした憲法訴願審判に対する1999年の判決では、

大法院の1999年時点までの判例によれば、北朝鮮の住民や朝鮮総連系の在日同胞についても大韓民国の国民として認めている。そのため、すべての「在外国民」に選挙権を認めると、北朝鮮住民や朝鮮総連系の在日同胞も選挙権の行使が可能となる。場合によってはこれらの者が決定権を行使することもありうるため、分断国家という現実から在外国民に選挙権を付与することはできない。²²

との論拠のもと、李健雨らの訴えを退けている。しかし2007年の判決においては、「在外国民は韓国の旅券等を所持しており、北朝鮮住民や朝鮮総連系の在日同胞との区別が可能である。」²³との新たな論拠が示された。つまり韓国旅券の有無が大韓民国の国籍を持っているかの判断基準になるとも取れる判決なのである。この論法で従うと、現在日本の韓国領事館は朝鮮表記の者に旅券を発給しないので、朝鮮表記のものは国民ではないという論理になる。しかしその一方で、2010年12月2日に法務部は初めて朝鮮表記の在日朝鮮人も大韓民国の国籍を有するという「検討意見」を表明している。これは朝鮮表記の大韓民国の国籍を有するかについて、いまだ整合性を保てずにいることを表している。

3. 重なり合う在日朝鮮人の国籍

3-1. 韓国表記の朝鮮民主主義人民共和国代表

このように在日朝鮮人の国籍について、韓国法においても混乱がみられるが、実際にはより複雑な様相を呈している。近年その最も注目を集めた例として、サッカー選手である鄭大世の国籍をあげることができる。鄭大世は産まれながら韓国表記を持つ在日朝鮮人であり、朝鮮学校を卒業したあとで川崎フロンターレへ入団、現在はドイツ2部のボーフムに所属している。鄭大世は同時に朝鮮民主主義人民共和国の代表として2010年南アフリカ大会の本戦出場も果たしている。韓国表記ではあるが、朝鮮民主主義人民共和国の旅券を有し、国家代表としてプレイしているのである。これは

²²白井, 2009:153.

²³白井, 2009:153.

韓国でも大きな話題となったが、まさに日本の外国人登録法上の表記が国籍と直結しない事を通して示される例である。

しかし鄭大世の朝鮮民主主義人民共和国代表入りは、決して簡単な道のりではなかった。鄭大世は朝鮮民主主義人民共和国の代表になるために、韓国表記を朝鮮表記にしようとしたが不可能であった。朝鮮表記を韓国表記に変える場合は、韓国領事館にて在外国民登録をし、その証明書類を持って日本の市役所などで表記を朝鮮から韓国へ変更することができる。しかし1965年の政府統一見解が示すように、朝鮮表記は朝鮮民主主義人民共和国を表さず日本は朝鮮民主主義人民共和国を国家として認めていないため、韓国表記から朝鮮表記への変更は韓国国籍の離脱と無国籍になるという意味合いも持ち、非常に難しいのである。

そこで鄭大世が取った手段は、韓国表記を維持したまま朝鮮民主主義人民共和国の旅券を取得することである。朝鮮民主主義人民共和国は韓国表記であろうがなかろうが在日朝鮮人を海外公民として認めているので、旅券の取得が可能である²⁴。旅券は国籍を証明する一つの重要な指標となり、FIFAも旅券をもって国籍を判断するために晴れて朝鮮民主主義人民共和国の代表として認められた訳である。しかしだからといって鄭大世の国籍が朝鮮民主主義人民共和国だけであるとは言い切れない。韓国は朝鮮民主主義人民共和国を国家として認めていないので韓国国籍からの離脱も認めておらず、また実際に二重国籍になる可能性からプレミアリーグへの移籍が流れたとの報道もされている。²⁵

3-2. 韓国表記から朝鮮表記への訂正

一方で、朝鮮表記を韓国表記に変えることが全く不可能な訳ではない。ここでは同じスポーツ選手である李敬史の例をあげる。李敬史はオリエンテーリングの国家代表である。それも南北両方の国家代表を経験している在日朝鮮人である。李敬史はもともと韓国表記を持っていた。大学時代にオリエンテーリングの競技に魅せられ、2001年にハンガリーで、そして2002年と2004年に韓国にて韓国代表としてジュニア大会(U-20)に参加している。ここで重要なポイントとして李敬史は韓国旅券ではなく「旅行証明書」を持って韓国へ渡航し、韓国代表として国際大会に出場している点である。

「旅行証明書」とは、本来旅先などで旅券を紛失した者が旅券の発給には時間がかかるので臨時に旅券の代わりに発給される証明書である。そのため旅行証明書を指して「臨パス（臨時パスポート）」と呼ばれることもある。そして朝鮮表記であれ韓国

²⁴旅券発給業務を受け付けている総聯の関係者によると、韓国の旅券を取得してないことが朝鮮民主主義人民共和国の旅券を申請できる条件になるという。しかし韓国旅券の有無を確認する手段は本人に聞く以外存在しない。

²⁵「鄭大世, 二重国籍問題で英プレミア移籍ならず」『スポーツ朝鮮／朝鮮日報日本語版』2010.02.18.（現在は link 切れ）。

表記であれ、韓国への在外国民登録と家族関係（旧戸籍）の整理をしていない在日朝鮮人が韓国へ渡航しようとする場合には旅券を発給してもらえないので、一回のみ有効な旅行証明書を持って韓国に入国することとなる。在外国民登録は朝鮮表記の韓国表記への変更が求められる。しかし旅券の取得にはさらに家族関係の整理が必要になる。この家族関係の整理は往々にしてとても大変な作業になる。全く家族関係の整理がされていない場合、一世が既に亡くなっていると死亡証明書から必要になり、その子供たちの出生証明なども必要になる。また様々な事情で日本の書類上の名前や生年月日と韓国の書類上の記載が一致しないなどのケースも多く、大変な時間と労力が必要になる場合が多い。これらが困難な場合、韓国の地方裁判所に申し立てて申請者一人だけの戸籍を作ることもできるが、通常3ヶ月から6ヶ月を要する。このように家族関係の整理は決して簡単ではない。また国民登録の手続きに関して言うならば、自国民の在外国民登録を受け付けるのに、何故か日本の外国人登録法上の表記の変更が必要になるという、非常にいびつな構造も指摘できる。

李敬史は韓国への国民登録に抵抗があり、旅行証明書を取得して韓国へ渡航した。旅行証明書は通常1、2回しか発給されずに、以降は国民登録と韓国表記への変更を求められるといわれているが、李敬史の場合もこれ以上の旅行証明書の発給は国民登録をしない以上無理だといわれた。有効な旅券が無いと国際大会に参加できないので、李敬史は総聯関係者に相談し今度は朝鮮民主主義人民共和国の旅券を取得し朝鮮民主主義人民共和国代表としてポーランドで行われた国際大会に参加した。鄭大世と同じく韓国表記のまま朝鮮民主主義人民共和国の旅券を取得したのである。違うのは二つ、一つは南北双方の代表歴があるという点、もう一つは日本に戻った後に表記を朝鮮に変えたことである。

朝鮮表記から韓国表記への変更は、1965年の政府統一見解に反対する運動の中で可能になった。日本は国交の無い朝鮮民主主義人民共和国を国家として認めていないので、この場合は国籍変更にならない。これは国籍である韓国表記から便宜上の記号である朝鮮表記に戻すものであり、法務局民事局通達1810号に基づき登録事項の訂正という形式になる。訂正というのは、韓国政府による国籍証明書が無いにも関わらずミスにより韓国表記へと変更した者に、表記を訂正するという論理である。そのため韓国への国民登録をしていないこと、韓国の旅券を有していないこと、申請者本人および父親の滞在資格が協定永住ではないことの三つの条件を満たす必要がある。しかしながらこの条件を満たす在日朝鮮人は、非常に少数である。韓国の旅券を申請したことがない韓国表記の在日朝鮮人も、その殆どが協定永住権を取得しており、李敬史のようなケースは非常に稀で、韓国表記から朝鮮表記への変更はほとんど不可能といえる。

3-3. 朝鮮表記のまま韓国旅券の取得

ここまで韓国表記でも朝鮮民主主義人民共和国の国籍を取得できる例をあげたが、その逆の朝鮮表記のままでも韓国旅券は取得することも以前は可能であった。一部在日朝鮮人の帰化申請や戸籍の整理などの業務を扱う行政書士などのウェブサイト上にも書いてあるが、ひとつの方法は本国で直接手続きをすることである。日本の領事館は原則朝鮮表記のままの在日朝鮮人の旅券申請手続きを拒否するが、韓国国内においてはそのような障害はなくなる。家族関係（旧戸籍）の整理さえできれば、韓国旅券を申請し取得することが出来た。また旅券の電子化以前に民団が旅券の発給業務を代行していた時期は、民団に相当のコネがある場合、融通が利いたという。

ただし次章でも言及するが、現在は朝鮮表記のまま韓国旅券を取得することはとても難しくなっている。本国での申請においても、少なくとも男性には徴兵の義務の履行に関する兵籍証明書が求められるが、在外国民2世に対する兵役免除申請が在外公館でのみ申請が可能で、日本の韓国領事館はその朝鮮表記の在日朝鮮人の申請を受け付けないので、旅券を申請する為の書類をそろえることは不可能である。また兵籍証明書が必要とされなかった時期に全ての書類を揃えた朝鮮表記の弁護士が外交通称部に書類を提出しようとしたが、ついに受け取らなかったという。それなのでおそらく女性が申請しようとしても受け取らない可能性が高いと言える。

旅券は国籍証明の大きな手段であるが、多くの在日朝鮮人は鄭大世や李敬史と違って国家代表となることとは無縁である。そのような中で、現実的には国籍が問題になる時は海外にでる時である。特に韓国への入国の際に国籍表記と旅券の有無が問題になる。それでは以下、韓国への渡航の際に、特に総聯と関係がある在日朝鮮人がいかに問題になるかについて考察する。

4. 韓国渡航の制限

4-1. 軍事独裁政権下

反共的な軍事独裁政権が続いた韓国において、韓国表記に変更しない朝鮮表記の在日朝鮮人が韓国へ入国することは長らく難しかった。朝鮮半島の分断構造の中で朝鮮表記は朝鮮総聯の関係者とみなされたからである。また永住帰国を除く在日朝鮮人の祖国への入国に関しては、日本への再入国という問題もあった。観光を除く主に民団の主催する訪問団や視察団などの形での往来は早くから確認されているが、朝鮮民主主義人民共和国への往来が実現したのは1965年12月であり、1972年にハンガリーで行われた世界教職員連盟総会に参加した朝鮮学校教職員代表4名が、朝鮮表記の者として初めて海外旅行をした例である。

総聯と関係する在日朝鮮人たちが韓国に集団的に入国したのは、1975年の墓参団事業が初めてである。前述のように朝鮮表記のまま韓国旅券を取得し韓国に入国した例はあったと推測されるが、朝鮮表記と総聯はイコールではないことは留意する必要がある。

ある。軍事独裁政権下の韓国においては日本にいる親戚が総聯活動をしているという事実だけで十分に弾圧の根拠となった中で、総聯同胞を対象にした墓参団事業はとても画期的な出来事であった。しかしこの墓参団事業は南北政府が合意して行った事業ではなく、「墓参り」という人道的な響きからほど遠い、在日朝鮮人の韓国への転向を求める政治的な訪問プログラムであった。²⁶その後も度重なる在日朝鮮人が関係したとされた公安事件が続く中で、朝鮮表記の在日朝鮮人の韓国への渡航は難しかった。しかし韓国社会の民主化の実現以降、その状況は少しずつ緩和されていく。そして2000年6月15日の南北首脳会談を気に、朝鮮表記の在日朝鮮人の韓国訪問を取り巻く状況が劇的に変わったのである。

4-2. 民主化以降

民主化の実現と南北対話の進展は総聯と関係のある在日朝鮮人、そしてその中多く含まれる朝鮮表記の在日朝鮮人たちの韓国渡航の道を少しずつ広げた。1990年8月に制定された南北交流協力法の第10条は「海外同胞等の出入保障」に関して「外国国籍を保有せず、大韓民国の旅券を所持しない海外居住同胞が韓国に往来しようとするときは、旅券法による旅行証明書を所持しなければならない。」と規定した。ここでいう外国国籍を保有せずに大韓民国の旅券を所持しない海外居住同胞とは、朝鮮表記を含む韓国旅券を持たない在日朝鮮人たちが含まれる。この規定により法的な担保を得たのである。

とはいえ国家保安法が残る韓国に総聯と関係が深い人間が渡航することは依然困難であった。また総聯との関係が深くなくても朝鮮表記のものの渡航は簡単ではなく、「一回だけなら行ける」「二回だけなら行ける」「それ以上は韓国表記への変更を強く求められ、拒否すると行けないなどの話」は在日朝鮮人社会においてよく聞かれた話である。しかし2000年の南北共同宣言はもう一つの大きな転機になった。総聯の同胞たちが総聯の名のもとに韓国への渡航が許可されるようになった。特に2002年には、釜山アジア大会への総聯同胞応援団、金剛山歌劇団のソウル公演、在日朝鮮学生少年芸術団のソウル公演など文化交流が活発に行われた。このように南北関係の進展とともに総聯系の在日朝鮮人の渡航も緩和された。しかしこれは在日朝鮮人の韓国への渡航の可否が、南北関係に従属している側面を表している。現に保守的な李明博政権に入り南北関係が悪化するなかで、総聯系や朝鮮表記の在日朝鮮人の韓国は困難の一途を辿っている。

例えば朝鮮表記であった筆者は、あの「美女軍団」が話題になった釜山アジア大会に総聯同胞応援団の一員として初めて韓国の地を訪れた。その後何度か大学院における学術交流などで韓国を訪問し、2008年9月からはソウル大学校へ1年間の交換留学

²⁶詳しくは김성희, 2011 を参照.

をしている。その際に法で定められた上限である1年の有効期限の旅行証明書を発行されたことは、非常に珍しいことであった。しかし2008年に李明博政権に入りながら、旅行証明書の申請のための手続きに朝鮮民主主義人民共和国への渡航歴や親族がいるかなどの書類が必要になり、面接時においても許可がおりない可能性を指摘されるようになった。2010年にソウル大学校日本研究所にて1年間補助研究員として働くことになった時も、数回の面接を経てやっと3ヶ月有効の旅行証明書を発給された。そして更新のために日本に帰ると、天安艦事件の調査報告を理由について旅行証明書の発給を拒否されたのである。

それでも2010年の時点で朝鮮表記のまま韓国に渡航できたのは稀なケースである。領事館ごとの裁量により対応に差があるが、大阪や東京ではもっと早い段階から何の説明もないままに申請を拒否されたり、領事が面接時に国籍変更をせまる威圧的な態度をとり国家人権委員会により人権侵害と認定されている²⁷。現在朝鮮表記のもの韓国への渡航は現在ほとんど不可能になっており、大学院の試験に合格したのに入国ができずに断念した事例や、学術大会に招待されたのに参加できなかった事例²⁸など、たくさんの事例をめぐって国家人権委員会の勧告や、訴訟が起きている。得に注目すべきは、韓国表記への変更と韓国への国民登録を迫る動きは前からもあったが、最近では韓国表記の変更さえも受け付けず、また韓国表記であっても旅券の発給を拒否する事例があらわれていることである²⁹。

4-3. 「偽装韓国籍者」

在外国民登録を受け付けない、または旅券の発給を拒否する動きは在外国民参政権の付与と関係があると推測される。在外国民参政権は制度設計の段階ですでに総聯と関係する在日朝鮮人が除外されている。前にみたように1997年に李健雨ほか7名の憲法訴願審判請求に対して憲法裁判所が1999年1月28日に合憲との判断を下した論拠には、それまでの判例をみる限り「北朝鮮住民」や総聯系の在日朝鮮人も韓国国民であり、これらの者に決定権を与えかねないので在外国民に選挙権を与えないのは合憲との趣旨があった。それに対し2007年の判決は一転して、旅券の有無に

²⁷国家人権委員会「国籍変更強要による人権侵害」

http://consult.humanrights.go.kr/01_sub/body05_v.jsp?id=2380&flag=VIEW(2012.1.30 アクセス).

²⁸「何故今になって南北のどちらかを強要するのか」『ハンギョレ21』など

http://h21.hani.co.kr/arti/society/society_general/25141.html (2012.1.30 アクセス).

²⁹国際法律事務所そん法務事務所 blog エントリ「ある在日コリアンの涙.」には、領事が申請者に総聯との関わりを一切やめる旨の誓約書を書いて提出しないと旅券を発給しないと対応した事例が紹介されている。

<http://www.shon.jp/blog/archives/346>(2012.1.30 アクセス).

より「北朝鮮住民」や朝鮮総連系の在日朝鮮人は区別が可能であるとの論拠が示された。つまり「北朝鮮住民」や総連系の在日朝鮮人は、韓国の国籍を有しているが選挙からははじめから除外されているのである。

本来選挙権は国民なら誰もが持つべき権利のように思われるが、韓国の旅券法第12条には、「外国での違法な行為などにより国威を著しく損傷させた事実が在外公館または関係行政機関により通報されたもの」に対して旅券発給の制限や拒否が認められている。在外国民国政参政権の行使の為には選挙人名簿に登録する必要があるが、この時に旅券が確認書類になる。選挙に総連関係者が投票できないように、韓国表記であっても総連関係者には旅券を発給しないことが法的に可能である。

同時にこのような動きの中で、「偽装韓国籍者」、または「便宜上の韓国籍者」という言葉が登場した。李敬成によると「偽装韓国籍者」とは「韓国籍を取得した後も朝総連組織に属して何らの活動をする」者を指す³⁰。そしてこれらは韓国の実定法に反するため対策を立てるべきだという主張がなされている。具体的には今後韓国入国や海外旅行の際に不便が生じるとの観測や、偽装韓国籍者が韓国を往来しながら工作活動を行い、また民団をかく乱しようとする危険性を指摘し対応を急ぐことを要求している。これは決して李敬成一人だけの主張ではない。民団団長である鄭進は2011年の新年の辞において、「2012年問題」について言及している。この2012年問題は、金日成の誕生100年を迎える2012年に「強盛大国の門を開く」としている朝鮮民主主義人民共和国が、2012年の大統領選挙に合わせて攻勢を仕掛けてくるという危機意識である。そしてこの危機意識の中には、「偽装韓国籍者」が在外国民国政参政権を得て韓国の選挙に介入してくるとの危惧も含まれている。

現にそのような懸念は、韓国の国会で具体的な行動に移されている。『日朝国交「正常化」と植民地支配責任』³¹のいくつかのエントリーでも紹介されているが、韓国政府は2009年9月20日の大統領令22393号にて、旅券法施行令の一部を改正し、第6条第2項に「国外に滞留する国家保安法2号に基づく半国家団体の構成員であり、大韓民国の安全保障、秩序維持および統一・外交政策に重大な侵害を惹起する憂慮がある人物：1年から5年までの範囲で侵害憂慮の程度に合わせ外交通商部長官の定める基準による期間」との条項が加えられている。またハンナラ党の李敬在議員が、総連系でありながら韓国表記に変え旅券を取得した「便宜上の韓国籍者」5万人が、来年

³⁰ 「<民論壇論>朝鮮高校無償化問題「偽装韓国籍」奇異な存在浮上」『民団新聞』2010.8.25.

<http://www.mindan.org/front/newsDetail.php?category=0&newsid=13172>(2012.1.30アクセス).

³¹ Blog『日朝国交「正常化」と植民地支配責任』<http://kscyksy.exblog.jp/>(2012.1.30アクセス).

の選挙で選挙権を行使する可能性を危ぐし、9月14日にはハンナラ党のユン・サンヒョン議員を初めとする12名の名前で、公選挙法一部改正法律案が提出されている。

改正法律案の提案理由は朝鮮表記から韓国表記へ変えた「親北性向を持つ者」が投票に参加することを防ぐためであり、その為に「大韓民国の利益と安全を害するためにこの法が規定する選挙に参加する恐れがあると認定しうる相当の理由のある者」は、在外選挙人名簿に登録できないように改正を求めている。しかし日本の韓国領事館の領事自身が言及しているように³²、この朝鮮民主主義人民共和国の指令を受けた5万人という数字自体が出鱈目である。2009年2月に在外国民選挙法が制定されたが、2000年から2011年にかけて朝鮮表記から韓国表記に変更し国民登録をした在日朝鮮人が5万人程度なのであって、選挙のために指示を受けて国民登録をしたわけでもなく、またこの数字には旅券の申請していない者も含まれている。ましてや領事自ら今は総聯関係者には旅券を発給していないと暗示していることはとても重要である。

在日朝鮮人が韓国の国政選挙に与える影響も、実際より過大に評価されている。中央選挙管理委員会は日本の予想選挙人数を462,590人と算出しているが、これには朝鮮表記の者も含まれているし、旅券を取得していない韓国表記の者も含まれている。また金雄基は2010年11月に実施された模擬投票時の日本における投票率61.4%を根拠に、予想投票人員数を290,833人と算出しているが³³、2011年11月13日から2012年2月11日までの90日間にかけて行われた選挙人登録において、最終的な申告者は18,575人で予想選挙人員の4.02%、永住権者に限ると10,202人の2.76%に過ぎない惨憺たる結果になっている。その理由として母数が過大に評価されている点や、模擬投票の形式上の問題なども指摘できるが、そもそも特定の政治的意図がこの拡大解釈に反映されていたとの疑念も抱かせる。またこの数字をみれば5万人もの朝鮮民主主義人民共和国の指令を受ける立場の偽装韓国籍者が、投票行為を通して韓国の大統領選挙に介入しようとしているという主張がいかに非現実的なのか明らかであり、この主張自体がハンナラ党の選挙の度に朝鮮民主主義人民共和国の脅威を煽る政治手法にすぎないと言える。

結びに変えて

本稿でこれまでみてきた通り、在日朝鮮人の国籍を巡っては非常に複雑な権力関係がある。韓国との関係だけをみるならば朝鮮表記であっても大韓民国の国籍を有するが、実効的国籍という面では旅券の発給などにおいて制限され、また法整備において

³²「日本で北韓の指令を受けて5万人が投票するって？」『OhmyNews』2011.12.16.
http://www.ohmynews.com/NWS_Web/View/at_pg.aspx?CNTN_CD=A0001671919&CMPT_CD=P0001(2012.1.30 アクセス).

³³김웅기, 2011:64.

も矛盾が多い。例えば韓国の在外同胞法は朝鮮表記の在日朝鮮人をその適用範疇から排除しているが、在外同胞財団法はこれに含めているなど一貫性がなく、現在も議論が続いているのである³⁴。また韓国表記で国民登録を済ませていても、総聯と関係がある場合や韓統連³⁵のように政権に批判的な者たちは、国民として権利を制限されている。重要な事実の一つは、南北関係に従属する形で在日朝鮮人の処遇が変わるという点である。

特に在外国民参政権の付与を契機に、在日朝鮮人には国家の選択が迫られている。2007年の憲法訴訟に対する韓国の憲法裁判所の判決は、1998年のそれと異なり「憲法は国民の基本権公使を納税と国防の義務履行の見返りとしていない」としているので、すぐさま徴兵制の論議が起こるとは考えにくい。が、国家保安法の適用問題と関連しては、韓国へ渡航を希望する在日朝鮮人に対し韓国政府が総聯や朝鮮学校との繋がりを断つことをより一層求めるようになる可能性を指摘できる。そして現に総聯と繋がりのある者の韓国への渡航は大変難しくなっているのである。解放後の朝鮮半島で付与された最初の参政権が単独選挙であったように、また総聯同胞墓参団事業がそうであったように、分断状況を抱えた在日朝鮮人にとって南北両政府の合意に基づかない参政権の付与は、それが人権に関わる事項であっても新たな対立構造が付随してしまうのである。

ただ一方でこれは大韓民国だけの問題ではない。特に分断国家のもう一人の当事者である朝鮮民主主義人民共和国も、誰が公民かという問題は同じように抱えている。そして朝鮮表記の在日朝鮮人の韓国渡航の際の人権侵害がなかなか表面化しない理由の一つに、朝鮮表記や総聯と関係する在日朝鮮人の韓国への渡航を総聯が良しとしない風潮があることも指摘できる。朝鮮民主主義人民共和国と総聯にとって在日朝鮮人は海外公民であり、とくに朝鮮表記は朝鮮国籍を意味し、韓国表記への変更は時に「裏切り」であり、韓国への渡航に対しても対応が緩和されているものの、基本的には好ましくない行為なのである。そして本稿では詳しくみることが出来ないが、特に近年の日本政府の朝鮮表記の在日朝鮮人に対する排外主義的な対応も共に考察されるべきである。

在日朝鮮人の国籍は、一番良い形としては個々人が自由に選択できるべきである。そして基本的人権である渡航の自由などはいかなる国籍や国籍表記を選択しても、在日朝鮮人の歩んで来た歴史的経緯からも保証されなければならない。しかし現状では仕方なく韓国表記や韓国旅券の取得する場合や、日本への「帰化」を選択するという

³⁴ 「在外同胞関連国会係留法案たちはどうなるのか？」『在外同胞新聞』2011. 12. 16. <http://www.dongponews.net/news/articleView.html?idxno=20246> (2012. 1. 30 アクセス)。

³⁵ 在日韓国民民主統一連合. 1973年に結成された韓国の民主化と祖国統一をスローガンとする運動団体。

ケースが多すぎる。同時に議論が必要なのが、そもそも朝鮮半島の分断という現実の中で国籍または表記の選択を迫る行為もまた、暴力的だということである。「選択をしない」という選択もまた尊重されなければならない。

在日朝鮮人の国籍をめぐる政治は、日本の植民地過去と朝鮮半島の分断というこの地域の激しい政治対立の中で何重にも拘束されている。しかし見方を変えるならば、在日朝鮮人の国籍をめぐる起るひとつひとつの問題に対し、南北両政府と日本が真摯に向き合い共に協議を重ねるのならば、この地域において新たな平和のための制度を作り出す機会にもなりうるのである。このような希望的な観測が実現されるには、政治的な南北対話と日朝国交正常化交渉の進展とともに残された多くの課題に対する学問的な議論が必要である。本稿がその為に少しでも役立てたのならば、韓国表記を強いられた者としても幸いである。

参考文献

- 金友子(2007)「「同胞」という磁場」『現代思想 vol35-7』青土社、211-224.
- 金賛汀(2007)『在日義勇兵帰還せず—朝鮮戦争秘史』岩波書店.
- 金英達(1992)『日朝国交樹立と在日朝鮮人の国籍』明石書店.
- 白井京(2009)「韓国の公職選挙法改正—在外国民への選挙権付与」『外国の立法 vol241』国立国会図書館.
- 鄭栄恒(2011)「「再入国」制度の歴史現在：在日朝鮮人に対する運用を中心に」『プライム』vol33,明治学院大学国際平和研究所,31-46.
- 李敬史(1998)『在日朝鮮人の「国籍」選択要因の比較検討—1970年福岡県田川市の「国籍書き換え運動」の事例より—』静岡大学大学院情報学研究科情報学専攻修士論文.
- 尹京媛、金泰植訳「コリアン・ディアスポラ—植民地主義と離散」駒井洋監修、陳天爾・小林知子編著(2011)『東アジアのディアスポラ』明石書店、220-243.
- 김성희(2011)『1970년대재일동포모국방문사업에관한정치사회학적연구』서울대학교대학원사회학과석사논문.
- 김웅기(2011)「재외국민국정참정권과재일동포사회의변화」『일본학 제 32 집』동국대학교일본학연구소.
- 김태식(2011)「누가디아스포라를원하는가 - 영화『엑스포 70 동경작전』과『돌아온팔도강산』에나타난재일조선인표상」『일본비평통권 4호』그린비.
- 조관자(2011)「‘민족주체’를호출하는‘재일조선인」『일본학 제 32 집』동국대학교일본학연구소.

アニメ聖地巡礼者の持つ2つの欲望

移動したい巡礼者／ジモトに滞留したい巡礼者

谷村要（大手前大学メディア・芸術学部講師）

1. はじめに

アニメーション作品のモデル地域となった場所が、コンテンツを活用したツーリズムの見られる場所として、2000年代後半より注目を集めている。このような場所はアニメファンの間では、「聖地」と呼ばれる（宗教上の聖地と区別するため、以下「アニメ聖地」と呼ぶ）。また、アニメ聖地を訪れる観光行動は「聖地巡礼」とも称される（上記と同様の理由で、以下「アニメ聖地巡礼」と呼ぶ）が、それが無視できない経済効果を地域に与えているとして、近年観光学で議論の俎上に上がるようになっていく（山村 2011）。そこでは、このようなアニメ聖地巡礼現象を単なる流行現象としてのみ捉えるのではなく、情報化や郊外化の問題と結び付けられながら議論される（山村 2009; 岡本 2010; 谷村 近刊）。

以前拙稿において、アニメ聖地における「コミュニティ」としての機能に着目し、そこに集まるアニメファン同士や地域住民との結びつきの脆弱性を指摘しつつもそこに新たな関係性が芽生えつつあることを論じた（谷村 2011）。本稿では、そこでの問題意識を引き継ぎつつ、このアニメ聖地巡礼現象の担い手であるアニメファン（アニメ聖地巡礼者）の地域との関わり方やその語りに着目し、彼らがアニメ聖地となった場所に何を欲しているのかを考察していきたい。

2. アニメ聖地巡礼現象を巡る現状

まず、アニメ聖地巡礼するアニメファンについて取り上げる前に、2012年3月時点におけるアニメ聖地の現状について簡単に整理しておきたい。

すでに論じられているように（山村 2008）、アニメ聖地巡礼現象が注目されるきっかけになったのは、2007年に放送されたTVアニメーション『らき☆すた』（らっきー☆ぱらだいす製作、独立UHF系列放送）の放送である。『らき☆すた』作中では埼玉県北部の郊外都市が背景のモデルとして用いられており、放送中にアニメ雑誌で具体的な場所が紹介されたことから多数のアニメファンが舞台となった地域に押し寄せるようになった。舞台の一つである埼玉県北葛飾郡鷺宮町（2010年3月23日より埼玉県久喜市鷺宮地域。以下、鷺宮と表記する）ではこのようなアニメファンに対し、鷺宮町商工会（現・鷺宮商工会）の職員が積極的に関わることでそのニーズをつかみ、鷺宮を訪れるファンを対象としたイベントを開催するようになっていく。

当初は『らき☆すた』というコンテンツを前面に押し出したイベントを開催していた鷺宮であるが、やがて地域行事（「土師祭」）にアニメファンを参加させるりなど、

コンテンツに必ずしもよらないファン参加型のイベントを企画していくことになる。結果、鷺宮地域内にある鷺宮神社の初詣参拝客数がアニメ放送前と比較して3年で約5倍（山村 2011: 3）になるなど、東京の一ベッドタウンであった鷺宮の知名度を大きくあげることになった。

このような鷺宮の成功を受けて、いくつかのアニメのモデル地域となった場所では、アニメを活用したまちおこしを進めるようになっていく。たとえば、2009年4月より放送されたTVアニメーション『けいおん!』（桜高軽音部，TBS系列放送）の舞台であるとアニメファンから見做されている豊郷小学校旧校舎群を所有する豊郷町では、町の商工会青年部や観光協会が2009年6月に「けいおんでまちおこし実行委員会」を立ち上げ、週末には旧校舎群敷地内の施設でファン向けのカフェを営業しているほか、グッズ製作やイベントの企画などをおこなうなどして、2011年12月現在も多くのアニメファンを呼び寄せることに成功している²⁾。

また、鷺宮や豊郷町のケースでは、アニメが放送された後やファンが大挙して押し寄せたことをきっかけに地域住民が自らの住まう地域がアニメの舞台となったことを知る形であったが、2011年になると、放映前にアニメの舞台情報を地域側や製作者が告知・公開していた作品のモデル地域が多くファンを集める事例も見られるようになってきている。具体的には、2011年4月～6月にかけて放送されたTVアニメ『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない』（「あの花」製作委員会製作，フジテレビ系列放送）のモデル地域である埼玉県秩父市、2011年4月～9月にかけて放送されたTVアニメ『花咲くいろは』（花いろ旅館組合製作，日本テレビ系列・独立UHF系列放送）の舞台のモデルとされた石川県金沢市湯涌町の湯涌温泉街などが挙げられる。これらの地域では、アニメ放送後においてもファン参加型のイベントを開催し、多数のファンを呼び寄せることに成功している。たとえば、先に挙げた湯涌温泉では、2011年10月9日に作品中で描かれた架空の祭りをモデル地域となっている温泉街において実際に開催し、5000人ものファンが温泉街を埋め尽くしたという³⁾。



写真 2.1 ぼんぼり祭り当日の湯涌温泉街の様子（2011年10月9日 筆者撮影）

上述のようにアニメ聖地となったことを活かしたまちおこしとしては、旅行者であるアニメファンが認知されてから地域側がまちおこしを進めていったものと、地域や製作者側が観光客誘致を見込んで放送前に情報を公開するものとに大別することができる。山村（2011: 75）は前者を「旅行者先導型」、後者を「FC（フィルムコミッション）型」と呼んでいるが、後者はこれまでも映画を活用したロケ地観光において用いられてきた手法である。むしろアニメ聖地巡礼現象が観光学や社会学で着目されたのは、アニメファン＝旅行者がモデル地域の情報を自らネットメディアを通じて発信し、あるいはその地域に積極的に関与していくことで地域の観光資源を「観光客」である彼ら自身がつくりだしている点にあった。

2011年に入り、「FC型」のアニメ聖地巡礼を活用したまちおこしが目立ちつつあるのは、鷺宮や豊郷小学校旧校舎群の「成功」がマスメディア等で喧伝される中でアニメ聖地巡礼現象を活用することで得られる経済効果等の利点を地域側や製作者側が認知したためであろう。このような「FC型」まちおこしが、今後の「ご当地アニメ」を活用したまちおこしにおいては一般的になることが考えられる。

これまでのアニメ聖地に関する研究の成果によって、地域住民とアニメファンとが協働でつくりだすアニメ聖地の姿が可視化されてきた。そこでは、アニメの舞台となったことは地域にとってあくまでも観光客を誘致するきっかけであり、いかに作品のファンから地域のファンをつくりだしていくかが重要であることが提言されてきたが、「FC型」の増加がそのようなアニメ聖地におけるファンや地域住民との関わり方によつたような影響を与えていくか、さらに考察していく必要があるだろう。

このように現在進行形で移り変わっているアニメ聖地を巡る状況を踏まえて、本稿で論じたいのが、アニメ聖地巡礼現象において欠かせないアニメファンたち＝アニメ聖地巡礼者の実態である。

筆者は2008年10月より主に鷲宮と豊郷小学校旧校舎群を中心にアニメ聖地へのフィールドワークをしてきたが、その過程でアニメファンの属する電子コミュニティやアニメ聖地巡礼を目的としたオフ会への参与観察や巡礼者への聞き取りをおこなってきた。そこで出会った人数は30名を越える。次に、それらの知見を踏まえてアニメ聖地巡礼者像を描き出し、彼らが地域に求めている欲望の一端を明らかにしていきたい。

3. アニメ聖地巡礼者が地域に向ける欲望の諸相

3. 1. 先行研究

アニメ聖地巡礼現象の研究そのものが本稿執筆段階で未だに3年半ほどしか蓄積がないため、アニメ聖地巡礼行動に関してはその新規性が強調されることが多い。そのため、アニメ聖地巡礼行動をとる旅行者＝アニメ聖地巡礼者については、ほとんどアニメファンというくくりでしか言及がなされていない。

ただし、無論ではあるが、彼らは一様な存在ではない。

たとえば、アニメ聖地巡礼者の情報発信行動並びに受信行動に着目した岡本(2009)によつて、3種類の巡礼者像がすでに論じられている。それは、(1)開拓的アニメ聖地巡礼者、(2)追従型アニメ聖地巡礼者、(3)二次的アニメ聖地巡礼者である。ここでいう開拓的アニメ聖地巡礼者は、アニメを視聴した後、その舞台について推論を働かせ、いち早くその舞台を特定するアニメファンのことを指す。彼らはGoogle Earthなどを用いてアニメ聖地の場所を特定し、現場を撮影した写真をネット上にアップロードするなどして、ネットメディアを通じてアニメ聖地の具体的な場所を公開するのである。追従型アニメ聖地巡礼者は、開拓的アニメ聖地巡礼者により公開された情報を参考にして聖地巡礼をする者であり、二次的アニメ聖地巡礼者は、アニメ聖地によるまちおこしに関する報道をきっかけに、アニメ作品を見て聖地巡礼をおこなう者である。

ここでは、岡本の分類を踏まえつつ、それとは異なる枠組みでアニメ聖地巡礼者像を描き出し、それぞれの欲望のベクトルを示していきたい。その際に注意したいのは、アニメ聖地巡礼者とアニメ聖地になった地域との関わり方やそれに関する語りである。

3. 2. 「開拓者型」アニメ聖地巡礼者

「開拓者」的な傾向を持つ巡礼者については、先に述べたように、岡本(2009; 2010)によってその存在が指摘されている。彼らはアニメ聖地をいち早く発見し、ネットメディアを通じてアニメ聖地に関する情報を発信するなど、アニメ聖地巡礼者の中でも能動的に活動する存在である。

このような「開拓者型」の傾向を持つ彼らは、自らを「アニメ聖地巡礼者」でなく「舞台探訪者」と名乗ることがある⁴⁾。「舞台探訪者」であることを自認するアニメファンによると、「舞台探訪」という言葉には、すでに「聖地」として価値づけられた場所に行くのではなく、聖地化されていないアニメの「舞台」を主体的に探し求めるという自負を込めているのだという。なお、「彼ら」と呼ぶように、筆者が接触を持った舞台探訪者を名乗る人びとは全員 20 代～40 代の男性である。

彼らは自らのホームページやブログを活用して情報発信しているだけでなく、mixi のコミュニティ（「舞台探訪者コミュニティ」⁵⁾）やツイッターなどの電子コミュニティを通じて舞台探訪者同士でつながりあい、定期的に行われるオフ会で交流を深めている。また、彼らは電子コミュニティを介して舞台探訪者同士でアニメ聖地の場所の特定をめぐる競争をしている（岡本 2009）が、一方で、舞台探訪をおこなう際のマナーを呼びかけるなど⁶⁾、モデル地域とされる場所への配慮を表明している。

その顕著な事例として挙げられるのが、舞台探訪者の一部が鷺宮におけるまちおこしのボランティアスタッフ（鷺宮町商工会ボランティア部）として鷺宮の「成功」に寄与していることであろう。このボランティア部については山村（2008）が詳しく触れているが、彼らの活動は鷺宮町商工会による企画へのアドバイスやイベント時の会場運営など、アイデアやマンパワーの面で地域を助けてきた側面がある。

このようなまちおこしになぜ彼らに関与しているのか。2009 年 7 月 18 日に開催された



写真 3.2.1 鷺宮町商工会（当時）ボランティア部のスタッフ証（2009年3月28日 筆者撮影）

アニメファン参加型イベント「萌フェス in 鷺宮」の打ち上げ会時に、イベントの運営に参加していた舞台探訪者の一人がその理由を語ってくれたことがある。彼は、アニメ聖地巡礼現象を特殊事例として取り上げようとする傾向への批判をしつつ、ボランティアに参加した動機を以下のように述べていた。

〔「聖地巡礼」が〕特殊なものとして扱われているのを何とかしたいんだよな。たとえば、巡礼者を「冬ソナ」で韓国に観光旅行に行くおばちゃんと同じように〔普通のこととして〕扱ってほしい。……だから、今が大事な時期なんだよ。巡礼に来るファンが何か問題を起こしたら、ここまで築き上げたもの〔アニメ聖地巡礼者のポジティブなイメージや地域との良好な関係〕が台無しになってしまう。

彼は、上記の理由から、同じアニメファンを管理するイベント運営の仕事に自らも参加しているのだという。彼らの危機感はツーリストとして過剰なまでに外部の目を気にしているようにもみえるが、この「舞台探訪者」と同様の危機感については他の「開拓者」的なファンも述べている。

自身が製作した同人誌を用いてファン向けに『らき☆すた』のアニメ聖地情報を先駆的に発信してきた刑部慶太郎氏は、山村（2011）によるインタビューにおいて、『らき☆すた』の放映直後にネットを通じてモデル地域にアニメファンが着目しつつあることを知ったときの気持ちを以下のように述べている。

埼玉は東京からも近く、学校や住宅地を含む現地に結構な人数が行くとすると、正直困ったことになったなあと心配しました。

4コマ漫画の『らき☆すた』ファンは大部分おとなしいファン層であると確信していたのですが、昨今のアニメのブームとなると中には舞台へ行ってコスプレしたり騒いだりという人が出てきて、どうしても世間の目が悪い方向に行ってしまう。それが想像できたので、一ファンとして危惧しました。僕はその時、たまたま『らき☆すた』の同人誌を出すつもりでいたので、まだ今なら人が実際に動く前に、誌面で注意喚起ができるのではないかと考え、2週間で冊子を編集しました。（山村 2011: 91）

これらの語りから彼らが抱いている危惧を考えた際、マスメディアやインターネットにおけるアニメファンへの「オタク・バッシング」を彼らが内面化していることがうかがえる。特に、刑部氏が「舞台へ行ってコスプレしたり騒いだりという人が出てきて、どうしても世間の目が悪い方向に行ってしまう」ことを「想像できた」と答えていることは重要な示唆を含んでいる。

いわば、内在化された「世間の目」（佐藤 2004）を彼らは持っており、それが地域振興の手助けや社会規範の遵守の呼びかけにつながっている。彼らはアニメ聖地巡礼行動という文化に対する危機意識を持っており、それを守るために行動しているのである。

3. 3. 「リピーター型」アニメ聖地巡礼者

「開拓者型」のアニメ聖地巡礼者として、舞台探訪者を取り上げたが、アニメの新作が放送される度にさまざまなモデル地域を訪れる彼らと違い、あるアニメ聖地を重点的に訪れる巡礼者も存在している。多くはアニメ聖地となっている場所の周辺住民であるが、一部には他県から足しげく通う人びとも存在する。

このような「巡礼者」たちは、同じ趣味を持つ者どうしで交流しあうだけでなく、ときには地域住民とも「（観光）客」という立場を越えて接触を持っている。たとえば、鷲宮ではファンの集まる場所として鷲宮神社が有名であるが、そこだけではなく、いくつかの飲食店や商店もファンのたまり場になっている⁷⁾。また、豊郷小学校旧校舎群においても、ファンに開放された公共スペースがあり、週末に一部の施設で「けいおんでまちおこし実行委員会」によるファン向けのカフェが運営されたり、旧校舎群周辺の飲食店がファンのたまり場として機能したりする姿が見られる。

このように一つのアニメ聖地に繰り返し訪れる巡礼者を、ここでは「リピーター型」のアニメ聖地巡礼者と呼んでおきたい。



写真 3.3.1 アニメファンのたまり場となっている鷲宮の Snackbar と中華料理店の外観

(2012年1月22日 筆者撮影)

このようなりピーターたちのたまり場ではファンによる自作イラストが商店の軒先や店内に掲示されるなど、ファンの趣味が表出する空間となっている。すでに別稿(谷村, 近刊 b)で論じたが,このような趣味が表出した空間が作りだされることにより,巡礼者にとって居心地の良い場所が作りだされ,ファンのアニメ聖地へのコミットメントをより深めることにつながっている。

また,このように自作イラストがアニメ聖地に表出させることでアニメ聖地の地域イメージがより強化される側面がある一方で,当のイラストを描いた巡礼者の中には自己実現する機会を地域が与えてくれたとして感謝する者もいる。

たとえば,その一人として,鷲宮神社の絵馬掛け所に2012年1月1日段階で,140枚以上の絵馬を奉納している⁸⁾もてぎ氏が挙げられる。鷲宮の伝統的な地域行事である土師祭では,2008年より地元で伝わる千貫神輿と並んで「らき☆すた」登場人物のイラストが描かれた通称・「らき☆すた神輿」がインターネットで募集されたアニメファンにより担がれているが,その神輿のイラストの作成者の一人がこのもてぎ氏である。

もてぎ氏は鷲宮のアニメ聖地巡礼者の代表格としてメディア上で幾度か取り上げられている⁹⁾が,彼はそのたびに鷲宮への感謝を表明している。たとえば,アニメ聖地巡礼を取り上げたムックにおいて,鷲宮の魅力についてインタビュアーに尋ねられた際,以下のように答えている。

個人的には自分の住んでいる場所と空気が似ていて親近感を覚えます。町の人も良くしてくれて来やすい場所。みなさん本当に親しくしてくれるので,ココには自分にしかできない何かがあるんじゃないかなって感じがして... 絵馬のこともありますし,人生のちょっとした目標をくれたこの場所に自分なりの恩返しをしたいと思っています。(松沼編 2011: 20)

もてぎ氏とは,何度か会話したことがあるが,筆者に対しても同様の発言をしている。引用したこの言葉も,彼の偽らざる気持ちであろう。

もてぎ氏のようなファンの語りは鷲宮に関する言説では決して特別ではない。例えば,「わし☆みやファン」を名乗る島崎隆氏は,2010年の土師祭において「らき☆すた神輿」を担いだ際の経験について,山村に対し,以下のように語っている。

祭りの最後に「らき☆すた神輿」の代表がおっしゃった,町の方への感謝の言葉には,いつの間にか私も涙があふれ,本当にこの町が好きになっていた自分たちを再確認しました。

祭りが終わったあと、担ぎ手有志と祭興会（筆者註：鷲宮の住民により構成される土師祭の運営母体）の方々によって祭り会場となった街路の「深夜のゴミ拾い」が行われました。「自分たちを快く受け入れてくれた町の人たちのために恩返しを」という感謝の想いを込めて、地元の皆さんと共に『らき☆すた』ファンの有志が参加しました。私もこのゴミ拾いに参加しましたが、こうした作業と一緒にできることこそ、地元の皆さんと『らき☆すた』ファンの幸せな関係の一つの形なんだなとしみじみ感じました。（山村 2011: 155）

島崎氏の語りにも出てくる「深夜のゴミ拾い」のようなボランティアな活動は、アニメ聖地に関する研究において、「幸せな関係」＝「Win-Win の関係」として捉えられてきたが、その関係がファンの「自分たちを快く受け入れてくれた町の人たちのために恩返しを」という意識に支えられている点には、先の「開拓者型」の巡礼者の意識と同様に、やはり注意しなければならない。

先の「舞台探訪者」と同様に、ここで取り上げたファンの意識の前提にはアニメファンである自分たちが地域に受け入れられないかもしれないという不安が常に内在化されており、それが「恩返し」という意識につながっているのだ。それは逆に言えば「受け入れて欲しい」という承認欲求を彼らが持っているということであり、だからこそ、その欲求を叶えてくれる地域への深い愛着を彼らは示すのである。

3. 4. 「フォロワー型」アニメ聖地巡礼者

舞台探訪者に代表されるような「開拓者型」、繰り返し特定のアニメ聖地を訪れる「リピーター型」といった二種類の巡礼者像に言及してきたが、このような「開拓者型」・「リピーター型」の予備軍でもあり、彼らに追従する層でもある人びとを「フォロワー型」のアニメ聖地巡礼者としておきたい。

このような「フォロワー型」には、岡本が指摘した追従型アニメ聖地巡礼者や二次的アニメ聖地巡礼者が含まれる。彼らはインターネットサイトやマスメディアの報道からアニメ聖地を知り、巡礼する。いわば、「開拓者型」が情報の「送り手」的な特徴を持つのに対し、「フォロワー型」はアニメ聖地巡礼者の「受け手」的な存在である。アニメ聖地となった地域に関する関わり方も相対的に受動的な態度をとるが、ただし、彼らも巡礼行動を続けることで「開拓者型」や「リピーター型」に遷移していくこともある¹⁰⁾。

3. 5. アニメ聖地巡礼者が持つ2つの欲望のベクトル

以上のように、アニメ聖地巡礼の前段階の情報行動の差異に着目して分類した岡本とは異なるアプローチで、アニメ聖地巡礼者を3類型に分類した。改めて整理しておこう。

一つは「舞台探訪者」に代表される「開拓者型」のアニメ聖地巡礼者である。彼らはさまざまなアニメのモデル地域に足を運び、ネットメディアを通じてアニメ聖地情報を発信する。いわばアニメ聖地巡礼者のオピニオンリーダーである。彼らは、アニメファンを取り巻く外部のまなごしを内在化しており、それがゆえにアニメ聖地におけるマナー遵守を呼びかけたり、アニメ聖地で開催されるイベントスタッフを務めたりするなどの行動をとる。

一方で、「リピーター型」のアニメ聖地巡礼者もいる。彼らはさまざまな地域を旅して情報を発信する「開拓者型」とは異なり、一つのアニメ聖地を繰り返し訪れる。彼らはそこで地域住民や同じ趣味をもつファンと交流し、居心地の良い場所としてアニメ聖地を捉えている。いわば「ジモト」としてアニメ聖地をとらえている（谷村 近刊 a）層である。ここでいう「ジモト」とは、自分の住まう地域に限定されない、かけがえがない「自分の帰属先」（鈴木 2008）であると当事者によって捉えられる場所のことをいう。彼らはジモトとしてのアニメ聖地に深くコミットしている。

上記の両者に追従するのが「フォロワー型」のアニメ聖地巡礼者である。「開拓者型」や「リピーター型」の影響を受けている層であり、両者の予備軍でもある。

これら三者の間には、2つのベクトルが働いていることが指摘できる（図 3.5.）。そして、それはアニメ聖地巡礼者の持つ2つの欲望のベクトルでもある。

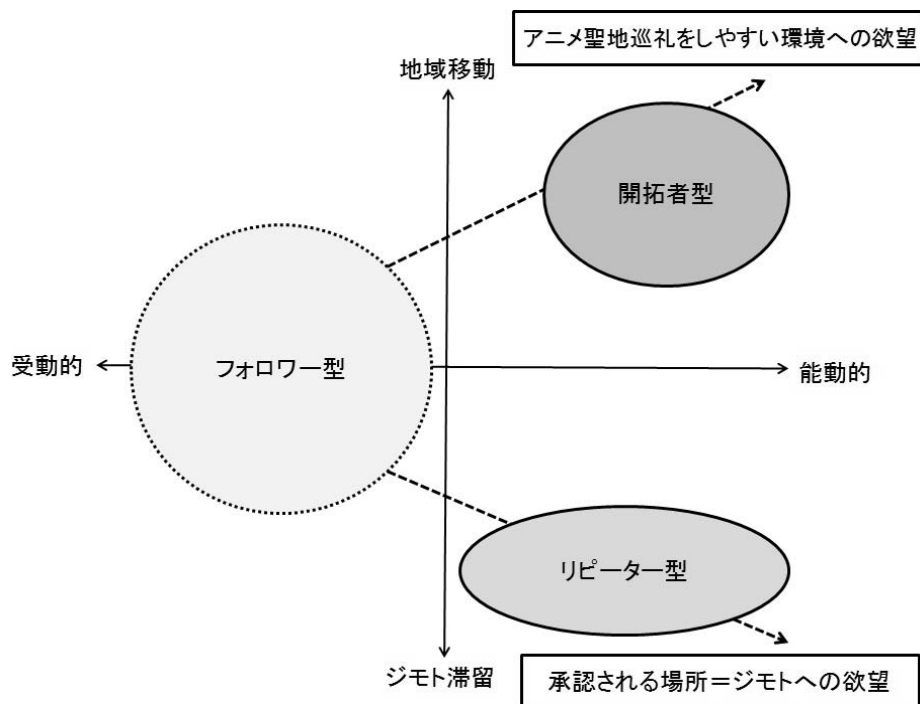


図 3.5. アニメ聖地巡礼者が持つ2つの欲望のベクトル

そのひとつは「フォロワー型」から「開拓者型」へと向かうものである。それは、さまざまなアニメ聖地を移動し聖地情報を発信していくために、アニメ聖地巡礼行動をよりやりやすい環境を求める欲望である。そのためには、アニメ聖地巡礼行動という観光行動を社会に認めてもらう必要がある。だからこそ、彼らは同じ巡礼者に対しマナーの遵守を呼びかけ、あるいはアニメ聖地におけるイベントが円滑に運営されるように手助けするのである。また、この欲望はオタク文化に対する外部からのまなざしに対する危機意識の裏返しとしてあることには注意が必要である。

もう一つのベクトルは、「フォロワー型」から「リピーター型」へと向かうものである。これは、巡礼者に自らが承認されたいという欲求があり、その承認欲求を満たす「ジモト」としてのアニメ聖地を求める欲望である。それは、巡礼者が地域へのコミットメントを強める働きをしており、だからこそ、「リピーター型」のアニメ聖地巡礼者は、巡礼行動をするに留まらず、ボランティアな清掃活動などに積極的に参加していくのである。

このような2つの欲望のベクトル——「アニメ聖地巡礼をしやすい環境への欲望」と「承認される場所＝ジモトへの欲望」は向いている方向が異なる。一方はさまざまなアニメ聖地に移動ししやすい環境を求め、一方は特定の地域へのコミットメントを深めようとする。しかし、強調しておきたいのは、これらの方向性の異なる欲望がともにアニメ聖地となった地域におけるアニメ聖地巡礼者のボランティアな活動へとつながり、地域振興に寄与する結果につながっている点である。

浅野（2011）は若者たちの趣味を通じたつながり（趣味縁）が社会参加や公共性へと結びつく契機となりうることを指摘しているが、アニメ聖地巡礼現象をきっかけにしてつくられる人間関係もまたアニメファンに地域社会と関わるための経路をつくりだしているといえる。

浅野は、趣味集団においてもその趣味へのこだわりゆえに葛藤は起こりうるが、その趣味への愛着があるからこそ対立した相手とも協力しあい、目的を達しようとする求心力を趣味文化はもちあわせていることを指摘している。

アニメ聖地巡礼現象においても、巡礼者がアニメ聖地に求めるものは決して一つに限定されるものではない。アニメ聖地で作品の物語に想いを馳せる者もいれば、そこに自身の居場所を求める者もいる。また、他のアニメ聖地巡礼者に先んじて自身がアニメの舞台となった場所を特定したいと考える者もいる。このようなアニメ聖地巡礼者たちは、しかし、その趣味によって、ときには目的の違う巡礼者や地域住民という趣味の外部にいる人びとと交流し、ときには協力しあって、自分自身を取り巻く環境をよりよいものにしようとして試みていくのである。そこには浅野や稲葉(2006)が着目する「オタクの公共性」（浅野 2011: 86）のひとつの形を見出すことができよう。

4. 結びにかえて

本稿では、アニメ聖地巡礼者を「開拓者型」「リピーター型」「フォロワー型」の3類型に分類したうえで、彼らの語りや行動に着目し、そこに存在する2つの欲望のベクトルを示した。そのひとつは「アニメ聖地巡礼をしやすい環境への欲望」であり、もう一方は「承認される場所＝ジモトへの欲望」である。これらの欲望の背景にはオタク文化に対する外部のまなざしへの危機意識や不安感がある。彼らはそれゆえに地域に関与していくのだが、それは一方で、社会と向き合う契機を趣味によるつながりがつくりだしているとも言える。

これまでのアニメ聖地巡礼に関する研究は、情報化に伴う新しい観光形態として、あるいは新しいまちおこしのあり方として、その実態を可視化し、エンパワーメントしていくところに主眼が置かれていた。そして、アニメ聖地巡礼を用いたまちおこしを活用しようとする自治体や商工会が現れる中で、その目論みはある程度達せられたといえるかもしれない。

しかし、一方で、アニメ聖地巡礼現象の当事者に関する社会学的分析は十分になされていない。たとえば、アニメ聖地巡礼の当事者である人びとの経験的語りをより詳細に分析していく作業は今後必要になるだろう。

アニメ聖地巡礼現象がポジティブなものとして捉えられたのは、偏見を覆す形でアニメ聖地巡礼者が地域振興につながるボランティアな活動を積極的におこなったからであり、また、地域住民がアニメ聖地巡礼者を受け入れ交流していったからである。しかし、なぜ当事者たちはそのような態度を取ったのか／取ることができたのか（あるいは、取らざるを得なかったのか？）という課題は未だ明らかになっていない。そのためには、彼らの語りを記述し、考察していく作業が必要になるだろう。本稿での試みはそのための極めて小さな一歩としてある。

アニメ聖地を活用したまちおこしを試みる地域が増えつつある中、その担い手である当事者の持つ欲望やまなざしをいかにして捉えていくか。筆者の今後の課題である。

[注]

- 1) 鷲宮では、江戸時代より伝わる千貫神輿という神輿を担ぎ練り歩く土師祭が毎年9月第1週に開催されているが、2008年よりインターネットを通じて募集したアニメファンの担ぎ手がファンと地元住民が共同で作成したらき☆すた神輿を担いで練り歩くようになっている。
- 2) 豊郷小学校旧校舎群が公共施設であることを利活用して、アニメファン主催のイベントを定期的で開催している。たとえば、2011年11月6日に開催された『けいおん!』の登場人物の誕生日記念会には、約200名のファンが集まった（「今日の部室(けいおんの舞台 豊郷小学校旧校舎群) 20111106」
<http://bushitsu.blog47.fc2.com/blog-date-20111106.html>, 2012.01.09)。

- 3) 「アニメ『花咲くいろは』の舞台で『祭り』再現 湯涌温泉，人にわく / 石川県」 (朝日新聞，2011年10月13日，朝刊，石川全県版，29面)
- 4) たとえば，「舞台探訪まとめ wiki」 (http://wiki.livedoor.jp/lsh_er/, 2012.1.10) を参照.
- 5) 「-mixi-舞台探訪者コミュニティ」 (http://mixi.jp/view_community.pl?id=2857738, 2012.1.10) は，コミュニティへの参加条件が厳しいこともあり，コミュニティの設立から4年が過ぎた2012年1月9日の段階においてもメンバーは99名しかいない.
- 6) たとえば，上述の「-mixi-舞台探訪者コミュニティ」を管理する人物は，「舞台探訪 (聖地巡礼) 時の大切なお願い」として，アニメ作品のモデル地域を訪れる際のマナーを詳細に説明した文章をネット上で公開している (「habusan.net ~舞台探訪まとめ Wiki・案内サイト~」 <https://sites.google.com/site/lshersite/butaita-onegai>, 2012.1.10) .
- 7) 山村 (2008; 2011) も触れているが，鷺宮町商工会の飲食店や商店を巡るスタンプリーカーキャンペーンなどをきっかけとして，鷺宮では地域住民とファンとの交流が促進されたという.
- 8) もてぎ氏が運営しているブログ「もてぎの鷺宮神社参拝記.」 (<http://motegionityan.blog72.fc2.com/>, 2012.01.11) を参照.
- 9) 2009年10月に関東ローカルで放送された『オタクと町が萌えた夏』 (フジテレビ・オルタスジャパン制作，フジテレビ放送) では，鷺宮を訪れる「オタク」の代表として彼を取り上げている. なお，同番組は鷺宮町商工会が運営する鷺宮 SNS で視聴することができる (「『オタクと町が萌えた夏』 鷺宮特集ドキュメンタリー動画紹介 : 鷺宮 SNS らき☆すたの聖地鷺宮の SNS」 http://sns.wasimiya.com/?m=pc&a=page_o_free_page&c_free_page_id=14, 2012.1.11) .
- 10) たとえば，先述した mixi の「舞台探訪者コミュニティ」のオフ会などに参加すると，当初舞台探訪者による聖地情報を参考にして，アニメ聖地巡礼を始めた人びとと出会うことがあることがある. また，鷺宮においてファンのたまり場となっている商店に行くと，マスメディアの報道をきっかけとして鷺宮に来た巡礼者がそこに居心地の良さを感じ，リピーターになる事例も見られる.

[参考文献]

- 浅野智彦, 2011 『趣味縁からはじまる社会参加』 岩波書店.
- 稲葉振一郎, 2006 『モダンのクールダウン』 NTT 出版.
- 国土交通省総合政策局観光地域振興課・経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課・文化庁文化部芸術文化課, 2005 「映像等コンテンツの制作・活用による地域振

興のあり方に関する調査 報告書」.

(<http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/souhatu/h16seika/12eizou/12eizou.htm>, 2011.12.10)

岡本健, 2009 「情報化が旅行者行動に与える影響に関する研究 : アニメ聖地巡礼行動の事例分析から」 『2009年日本社会情報学会 (JSIS & JASI) 合同研究大会 研究発表論文集』 364-367.

——, 2010 「コンテンツ・インデュースト・ツーリズム —コンテンツから考える情報社会の旅行行動—」 『コンテンツ文化史研究』 3: 49-69.

佐藤直樹, 2004 『世間の目 なぜ「渡る世間は鬼ばかり」なのか』 光文社.

鈴木謙介, 2008 『サブカル・ニッポンの新自由主義—既得権批判が若者を追い込む』 筑摩書房.

谷村要, 2011 「『祭りのコミュニティ』による『出会い』の可能性—『ハルヒダンス』と『アニメ聖地』を事例として—」 『社会学批評 別冊共同研究成果論集』 97-109.

——, 近刊 a 「『ジモト型コミュニティ』の浮上」 『日本情報経営学会誌』 32(4).

——, 近刊 b 「『アニメ聖地』における趣味の表出 —『趣都』と『アニメ聖地』の比較から」 山村高淑・岡本健編 『北海道大学観光学高等研究センター叢書』 (6).

松沼猛編, 2011 『日本縦断! 萌えキャラ&萌えおこし総合ガイド 萌えコレ!』 三栄書房.

山村高淑, 2008 「アニメ聖地の成立とその展開に関する研究 : アニメ作品「らき☆すた」による埼玉県鷲宮町の旅客誘致に関する一考察」 『国際広報メディア・観光学ジャーナル』 7: 145-164.

——, 2009 「観光革命と 21 世紀 : アニメ聖地巡礼型まちづくりに見るツーリズムの現代的意義と可能性」 『CATS 叢書』 (1): 3-28.

——, 2011 『アニメ・マンガで地域振興 まちのファンを生むコンテンツツーリズム開発法』 東京法令出版.

[付記]

本稿は、『大手前学論集第 12 号』(近刊)掲載論文「アニメ聖地巡礼者の研究(1) —2つの欲望のベクトルに着目して—」をもとにしている.

魔法使いの遺産

まちづくりはなぜ失敗するのか／大曾根商店街（名古屋市北区・東区）

渡邊拓也



序にかえて

まずはこの論考が学術のオーソドックスな記述からややみ出したスタイルで書かれる点についてご容赦頂きたい。本稿に登場するカタカナの「ジモト」の領域は、政治や経済、科学や学問といった大文字のディスクールでは語られ得ない部分を含んだ、繊細でデリケートなものなのである。ロジックで捉えられないものをすべて存在しないものとして切断する態度は余りフェアとは言い難いし、また論理の速度を越えてしまう場面に関しては、時に詩人や文学の言葉が要請されてくるものなのだ。特に調査者である「私」が調査対象に含まれて自己言及のパラドクスを引き起こすような場合にはなおさらそうである。言い換えれば、これは筆者自身の出身地（ジモト）に関する記述であり、どこかで当事者である以上完全に客観的な記述ではあり得ない。それはむしろ私自身との対話であり、内省的な旅の記述でもある。

新緑の頃、僕は故郷名古屋のとある商店街に足を運んだ。

JR大曾根駅の北口、駅前広場のバス・ロータリーの脇に地下通路への入口がある。広場は長い工事期間を経て完成したもので、さも昔からそこにあったような顔をして鎮座しているけれど、幼い頃からこの場所を知っている者にとってはまだどこか据わりの悪い、目新しいものだった。下りのエスカレーターに大人しく乗ってみると、やがて小さな地下迷宮に辿り着く。右手は地下鉄のコンコースに連なり、左手にはコンビニ、薬局、美容院、パン屋などが見えた。駅の近くで人通りは絶えない。眼につくのはスカート丈の短い名古屋の高校生たちと、足早に乗り換えを急ぐサラリーマン、そして昭和のペースを守りながら散歩を楽しむ年配の層だった。流れる群衆を横目にしばらく歩いて階段を上れば、そこに大曾根商店街「オズモール」はある。

地理的に見た「大曾根」は、名古屋の北東の玄関口という交通の要衝に位置しており、その行政エリアは名古屋市の東区と北区の境界をまたぐようにして東西に伸びている。商店街のスタート地点はJR中央線の大曾根駅だ。そこには私鉄の名古屋鉄道(名鉄)と市営地下鉄、そしてガイドウェイバスが乗り入れており、常に人の流れがある。乗用車にとっても名古屋環状線(都市高速)と国道19号線のクロスポイントにあたり、交通アクセスは非常に良いと言っていい。シナプスのように複雑に連結された駅の集合体から、東へ向かえばナゴヤドーム、西へ向かえば商店街という配置である。

迷宮を抜け、やや長めの階段を上って地上に復帰してみると、その商店街は閑散としていた。平日の昼下がりとはいえ人通りはほとんど無いに等しい。左右に見える個人商店の多くは完全に機能を停止し、シャッターという名の瞼を降ろして深い眠りについている。ここには高校時代、悪友と授業を抜け出して安物のチェスセットを買い求めに来たことがあったと思うのだが、左手にあったはずのその玩具店ももう見当たらない。一言でいえば、時代が移ったのだ。両脇を固める街路灯にはスピーカーが設置され、あまり聴いたことの無いインストゥルメンタルのBGMを奏でている。曲調は軽快なポップで、主旋律を歌うのはやや硬質なシンセサイザー・オーボエだ。五月の風と柔らかな春の日差しが頬に心地よい。しかし、白を基調にデザインされ作り替えられたこの小綺麗な街路の風景からは、まるで人々だけが消えてしまったかのような奇妙な感覚を覚えた。

大曾根商店街はもう昔の面影のない白い街になっている。まちづくりと地域活性化の再開発に失敗した典型的なケースだった。しかしその失敗はどうして起こったのだろうか。どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

—この辺りだったかな。

やや迂回して広い車道を横断し、分断されている商店街の続きをしばらく進んだところで、僕はふと足を止めた。右手には見覚えのない喫茶店がある。外装は新しい。ただ僕の直感が正しいとすれば、この付近には僕の遠い日の記憶の欠片がひとつ、存

在したはずなのだ。幼い頃の断片的で不確かな記憶であって、ここだという自信は毫もない。しかし他に思い当たる選択肢もない。

僕はドアを開け、見知らぬ喫茶店に入った。

その時からこの街での僕は、迷い子のドロシーになった。

第1節 エメラルドの都

大曾根商店街は、1989年に「オズモール」（正式な表記は「OZモール」）へと生まれ変わった。昔ながらのアーケードの屋根を外すことで太陽光を入れ、立ち並ぶ商店をすべて道路境界より1.5メートル以上セットバックすることで道を広く確保し、風通しを良くした。通りに面する建物を三角屋根に統一し、軒の高さを3.2メートルと定め、また正面外壁には白とグレーを用いることが決められた。

「オズモール」とは、大曾根をローマ字表記した「OZONE」と、児童文学『オズの魔法使い』とをひっかけてつけられた名称だった。東西方向に伸びる商店街の西の端から順番に、物語の進行に合わせてブロンズ像のようなオブジェが配置されている。主人公ドロシーは、カンザス・シティから竜巻で「オズの国」に飛ばされ、途中でかかしやブリキのきこり、ライオンといった仲間に出会い、エメラルドの都に住む魔法使いオズに会いに行く。商店街を抜けて歩く道すがら、そのストーリーがさりげなく展示物によって再現されているのだ。

街路には赤茶色のレンガが敷かれて、人工的な小川が走っている。ところどころに休憩スペースが設けられ、少し腰掛けて休んだり、のんびり読書したりする場所には事欠かない。街の中央には噴水とベンチがある。また近年の傾向に抗って、灰皿や喫煙コーナーが数多く配置されているのも愛煙家には嬉しい配慮だろう。ひょっとしたらこの街は、ある瞬間を境にして時が止まっているのかもしれない。

大曾根のドロシーが入った喫茶店の中には、あまり商売気の無さそうな初老の夫婦がいた。職人肌のもの静かなマスターと、快活で面倒見のいい小母さんという様子で、内装も木の暖かみのある感じの良いものだった。店の隅の席ではスーツのサラリーマンがひとり新聞を広げ、昨日国内で起こった出来事を時間をかけて再確認していた。ドロシーは別の一角のテーブルに腰を据えると、ホットコーヒーを注文して、ラク・マイルドに火をつけた。見上げればテレビには古いサスペンスの再放送がかかっている。

ドロシーはこの店をすぐに気に入った。町の小さな喫茶店の中には時折、近所に住む者のみで構成される排他的サークルのようになっている場所もある。よそ者はすぐ

それと分かり、よそ者の側もそれを悟る。だがここはそうではなかったし、いずれにせよドロシーにとってこの街はホームだった。

かつてこの辺りには、古いアーケード型の屋根付き商店街があった。細長い通りに小さな商店とせり出した屋台がひしめき、行き交う人々の熱気と店主たちのかけ声に溢れていた。とても賑やかで、縁日のような場所だったことを子供心にもよく覚えている。そこへ「まちづくり」がやって来た。

再開発のための予算は潤沢だった。80年代後半より、「街並み・まちづくり統合支援事業」、「ふるさとの顔づくりモデルと地区画整理事業」、「商店街近代化事業」、「優良再開発建築物整備促進事業」といった、国土交通省（旧建設省）および名古屋市の資金が投下され、大規模な再開発事業が計画されていた。もちろん、いくら当時の日本がバブル期であったとしても、これほどまでに手厚い公的支援が商店街ひとつに注がれるなどということは考えられない。

先に触れたように、大曾根は名古屋市の北東を固めるかつてのゲートであり、江戸時代には名古屋城と中山道を結ぶ拠点だった。国鉄中央線の大曾根駅は明治末期に作られ、現在では種々の交通機関が交叉する結び目となっている。この街はまさにその理由によって再開発の重要地区に数えられたのだった。

路面を走っていた名鉄電車は高架へと移され、線路の踏切が引き起こしていた国道の交通渋滞の緩和が図られた。三菱やJTが保有していた広大な工業用地と空き地は、レジャー施設や商業施設の計画的設置のために買い取られた。空白地の有効活用と交通の合理化は、この地区の地理的重要性を鑑みれば着手するのが遅すぎたほどだったが、要するに名古屋市にとって、商店街「オズモール」の改修工事は、大曾根エリアを中心とする周囲一帯に広範囲に施されたこのような一連の都市再開発事業のほんの一部分に過ぎなかった。

こうして大曾根西口の古くて騒々しいアーケード街は、小洒落た奇麗な街並みへと変貌を遂げた。それはわずか14ヶ月の改修期間で「魔法のように」変身したという。よく計算されたデザインは、それだけを取り出せば完璧に近いものだ。広く明るくなった立体的な街路空間に、貫流する二本のせせらぎが曲線的でゆるやかな秩序を与え、メルヘンと遊び心にあふれたオブジェが時間的にも適切な位置に置かれている。国政と市政より手厚い資金援助を受け、さらなる客層を惹き付けるのに十分な魅力を持った街が、完成したはずだった。

だがその凋落はすぐに始まった。人々が消えたのだ。

区画整理によって街のシンボルだったアーケードが取り外された。道幅を広げるという名目で古い店舗は追い払われ、店主たちはそれまで通りの営業を続けることができなくなった。よそのエリアに移るか、仮店舗に入るかだった。そして街路に面する

ことになる新しい店は、メルヘンチックな白い壁と三角屋根を備えていなくてはならなかった。

要するにそれは、魔法の杖のひと振りによる華麗なる変身などではなく、14ヶ月の長きにわたる大手術だったのだ。街はその手術で命を落とすかもしれないが、歯を食いしばって耐え抜いた。大改修が終わった後、最初は物珍しさからそれなりに人は集まったけれど、蜜月は長く続かなかった。今では誰もが認めている。手術は「失敗」だったと。

原作における魔法使いオズは壮大なペテン師だったが、もし街の新しいモチーフに選ばれた物語がまちづくりの運命までを言い当てていたとすれば、それはアイロニー以外の何ものでもない。

第2節 東の魔女と西の魔女

もともと名古屋の街には豊富な資源がある。それは名古屋城やテレビ塔、あるいは100メートル道路のような古いタイプのアイコン的建築だったり、赤味噌やきしめん、名古屋コーチンのような地方食文化だったり、場合によっては中日ドラゴンズやトヨタ自動車だったりする。名古屋に生まれた者は、最初自分がそうしたアイコンや特産物に何ら愛着を抱いていないように感じているのだけれども、彼／彼女が名古屋を離れて暮らし始めると、それらはライフゲームの電子の種のように心のフラスコの底面に茫洋と広がって行って、時折ひょっこりと表に顔を出すようになるのである。

少なくともここは何も無い街ではない。つまり名古屋における「まちづくり」は、観光資源の創出や再起動によって観光客を呼び入れるという性質のもの（まちおこし）とは相当のずれがある。欠如や喪失の感覚はいつだって相対的なものだけれど、このケースにおいて比較対象となるのは東京や大阪ではなく、また栄や名古屋駅といった他の繁華街でもなく、むしろ過去の栄光という自分自身の幻影なのだった。この幻影は、現在を起点にして、人々の願望が過去に向かって投射された時に現れる。その時不確かな《記憶》は、どこかでフィクションを追加されつつ美化されていくのだろう。人はしばしばそれをノスタルジーと呼ぶ。

近代そして近代化のプロセスは、それとはまったく別のことを人々に要求してきた。ハイデガーやギデنزが指摘していたように、近代において願望は未来方向へ向けて投射されねばならない（**pro-ject**=前へ企投すること）。また「他人指向型」のリースマンが述べていたように、そうして設定された何らかの「目標」の達成に向けて、絶え間ない努力と苦心惨憺を強いられるというのが近代的主体に課せられたミッションだった。苦難の後にこそ真の喜びがあるというベートーヴェンのようなテーゼや、向上心

のない者は馬鹿だという夏目漱石的なテーゼは、確かに近代化の隠れた動力源のひとつになっているのだろう。

まちづくりおよびまちおこしは、その街に人を呼び、「活気づける」という至上命題に貫かれている。つまりこれも経済的成功という未来の目標へ向かう、典型的な近代型のプロジェクトなのだ。けれども、まちづくりという近代化が、その絶えざる前進と努力のプロセスが、仮に「失敗」に終わったとしたら、そのことは人々に何をもたらすのだろうか。

ドロシーは、街の声に耳を傾けてみた。「オズモール」がすっかり寂れてしまったのは、活気のある駅の東部エリアに客足を奪われてしまったからだというのが、どうやら彼らの集約的な意見のようだった。確かに1997年に、大曾根駅の東の区画にはナゴヤドームがオープンし、2006年3月にはそのドーム前にイオンの巨大ショッピングセンターが完成している。

さらに悪いことに、その年の12月には駅の西口広場とロータリー、地下街（オズガーデン）の工事完了に伴って、JR大曾根駅と「オズモール」のあいだを直接行き来することができなくなった。もはや一度地下を経由するか、少し離れた横断歩道まで迂回しなくてはならないのだ。東側エリアの活性化と、新しくできた広場による西側経路遮断。街の人の分析および状況定義は、手短かに言えばだいたいそのようなものだった。

しかしその分析はあまり正確ではない。長らくこの街を歩いてきたドロシーは知っていた。《東の魔女》イオンモールが君臨する以前の時期にも、そして駅からすぐに道を渡って西側の「オズモール」へとダイレクトに至ることが可能だった時期にも、そこは閑散としていたことを。それどころか、ナゴヤドームが完成する1997年より前の時期でも状況はそれほど変わらなかったのである。降りているシャッターの数はずっと少なかったけれど、屋根を失った街は、当初からがらんとした虚ろな白い箱のように見えた。ひとりで大きなキャンディの箱の底にいて、そこから四角くて青い空を見上げているような感覚だった。

「では原因は何なのでしょう」と、小倉トーストをかじりながらブリキのきこりが言った。

「この場合バブル崩壊と考えるのが自然だと思うんだけど」とドロシーは答えた。

「なるほど、消費そのものが冷え込んだとすれば、時期的にも、人々の足が遠のいたことの説明にはなっていますね。しかし、その後客足がやや戻ってきた時期に、それを取り戻せなかったことの説明にはなりません」

「そうね。ということは、イオンモールに持って行かれたっていう説もけっこう当たってるのかな」

「人間たちが徒歩や鉄道ではなく車で移動するようになったので、大きな駐車場のあ
るイオンのような郊外型の巨大ショッピングモールが大成功を収めていったという流
れは、すでにひとつの歴史的事実ではないでしょうか」

ドロシーは少し首をひねって言った。「どうかなあ。よく考えてみると自家用車が
普及したり、商店街のお店が大手のスーパーマーケットに勝てなくなったりしたのは、
たしか70年代くらいからの話だったと思うのよね。それに、交通手段が変わったこと
とかで全部説明できた気分になるのって、ちょっと焦りすぎな気もする。他の要因も
あるんじゃないかな」

「そうですね」とブリキのきこりは少し身を縮めた。

古株のからっぽ頭のかかしが静かに口を開いた。「この商店街から客足が遠のいて
いったのは、ずいぶん早くからじゃったよ。ドロシー、まだ君が生まれる前の話だ――」

1970年、商店街から少し西に行った場所に、4階建ての「ユニー大曾根店」がで
きたという。全国第3位の規模を誇り東海圏に名を轟かせていた系列店大型スーパーの進
出は明白な脅威だった。1978年には名鉄瀬戸線が栄に直結して交通の利便性は大幅に
上がったが、皮肉なことに買い物客は、今度は百貨店・デパートのひしめく名古屋の
中心街へと流れていく。バブル期が始まる前にはもう、全国各地で商店街という存在
そのものが危機に直面していたのだった。

簡潔にまとめれば、旧大曾根商店街は《西の魔女》ユニー大曾根店のために苦戦を
強いられ、起死回生の一撃として期待された「オズモール」も、新たに君臨した《東
の魔女》イオンモールの前に敗れ去ったということになる。個人商店が東になっても
巨大企業にはかなわなかったというこのストーリーは、非常にクリアで分かりやすい
仮説ではあったが、あまりドロシーを納得させるものではなかった。ドロシーはつぶ
やいた。「うーん、それって要するに、誰かを諸悪の原因に祭り上げて自分たちは安
心を得るってパターンじゃないのかなー」

「贖罪山羊的な発想の域を出ていないということですか」とブリキのきこりが返した。
「そうね。あと、その説明ですっかり分かったような気分になって、何か大事なこと
が見えなくなっちゃうんじゃないかって」

臆病なライオンが口を挟んで言った。「すみませんがドロシーさんたちのお話は難
しくて、ときどき何を言っているのか、わからなくなるのです」

「ごめんごめん」とドロシーは微笑し、すっかり冷めたコーヒーを口に運んだ。「原
因はひとつなんかじゃないし、どのみち今のことの方がずっと大切よね」

第3節 虹を越えて

季節が移った。騒がしく蝉が鳴いている。上空では夏の太陽が、白い街と赤レンガをこがすように照りつけていた。ブロックでできた人工の小川は、近所から来たのだろうか、小さな子どもたちの恰好の水遊び場になっていた。その傍には花屋の女主人と立ち話を楽しむ、日傘の若い母親たちの姿もあった。

例えば、まちづくりによって活気を取り戻すといった経済的発展にまつわるテーマ設定がなされると、それは行政の問題として切り出され、政治的な、あるいはアカデミックな議論の俎上に乗る。つまり「地元」ないし「地域」活性化の問題となって、舞台上でスポットライトを浴びることになる。だがその時、光と影のコントラストが強まるのに伴い、後景の陰影に沈み込んでイシュー化を逃れていく部分というのも常に発生する。それは、仮に問題であったとしても問題視されることの無いような、行政的イシュー化を拒むことで不可視の領域に留まっているような部分である。これを川端浩平にならってカタカナの「ジモト」と呼んでおくことにしよう。

まず行政と経済とを分離して考えなくてはならない。市場経済は生き物であって、政治的介入を許さない部分が大半を占める。想像してみれば分かる。仮に国会が、その年度の経済成長率を10%にする等と満場一致で議決したとして、その通りに市場が動くだろうか。政治が市場経済に対してできることは、到達目標を設定することと優先順位を決めて予算配分すること、そして市場に働きかけてそのリアクションを見ることくらいなのだ。したがって、たとえ大曽根商店街が商業的復興に失敗していたとしても、それを一概に行政上の失敗と捉えることはできない。

二度三度と通っているうちに、ドロシーの中で少し心境の変化が起こった。この街はそれほど悪くないと思いはじめたのだった。この日、近くのテーブルには常連らしき親子連れの様子があつた。笑い声もあつた。他のテーブルにも老人が何人かいて、思い思いの時間を過ごしていた。やがて親子連れの母親は用事があると店の小母さんに告げ、子どもを預けて外に出ていく。優しい静寂が戻る。その時思ったのだ。確かに経済的には失敗だったかもしれない。だがこの街は死んでいない、息をしていると。

他の面々は議論の続きに明け暮れていた。

「もっとシンプルに、具体的に考えてみませんか」とブリキのきこりは座り直して言った。「店を入れ替えればよかつたんじゃないでしょうか。きれいな街の外観に合わせて、若者向けのおしゃれな店に。見栄えばかりよくなつても、中身が古い八百屋だったり、ご年配向けの服ばかり売っていたりしては、ターゲットの客層がどこなのかよくわかりませんよ」

「入れ替えはあつたんじゃない。古くからあつた店は、改修工事のあいだに場所を移つたり、仮店舗で営業したりしとつた。戻つて来ない店も多かつたが」とからっぽ頭のかかしが答えた。

「では、商店街にスーパーマーケットを組み入れて、地域の生活密着型にするというのはどうでしょう。近所の人が必ず買い物に来るんじゃないでしょうか」

「昔ながらのアーケード街のイメージじゃな。それはひとつ方法かもしれんのだが、来るのは主婦と子どもたちばかり、しかもユニーに勝てんかったでう。きょうび若い人にアピールしづらいなんてのはあかんて」

「でもいっそのこと、アーケードを残した方が良かったんじゃ……」

彼らはすでに何度もループして凡庸化したテーマについて、出口の見えない議論を消費行動的に繰り返していた。ドロシーはすっと立ち上がると、静かに店を出た。

歩きながら考える。魔法使いは確かにこの街に魔法をかけ、エメラルドグリーンのお眼鏡で短い夢を見させたのだろう。だが、まちづくりという近代化の「失敗」経験は、この街に何を与えたのだろうか。ひとつにはそれはノスタルジーだ。近代的な主体は、何らかの目標を設定し、それに向かって努力し前進することを要求された。富を得て経済的に成功すること、地位と名声を得て社会的に成功すること。リースマンはそうした近代人の姿をジャイロスコープ（羅針盤）に喩えていたが、社会的に広く認可された目標に向かって邁進する態度は、20世紀の初頭には人間の持つ「社会的欲求」であると、つまりは（金銭欲や名声欲といった）一種の本能であるとすら考えられていた。

この目標地点は通常は未来方向に設置されるべきものだったが、失敗の経験はそれを過去方向へ向け変えることがある。ノスタルジーはそうして出現する。欲望を数学的ベクトルに喩えるなら、エネルギー量を保持したままで方向の転換のみが行われるのである。大曾根のケースで言えば、商店街は経済的発展という将来における成功を目標に設置したけれども、自由競争に敗れ、過去における成功体験の《記憶》に指向性を向け変えたということだ。

時に、何らかの目標を目指して進もうとする近代人の態度はここでも常に保持されている。彼ら近代型のメンタリティを持つ者は時折、「オズモール」の現状を嘆きつつ新しいものを批判することもあれば、将来的な巻き返しのためのアイデアに思いを巡らせることもある。換言すれば、現実と理想があり、その間にはギャップがあり、それを埋めるために努力が必要だという近代型の考え方と行動パターンは、常に保存されている。

「ドロシーさん！」と後を追ってきたブリキのきこりが呼んだ。「急にどうしたんです」

ドロシーが考え込んでいると、からっぽ頭のかかしが言った。「なあ、ついでにちょっと散歩でも行こまい。見せたいものがあるだよ」。そして彼は西の方角に向かって跳ねていった。

「オズモール」の西の端には、やや思い切ったデザインのアーチ型の門がある。それを抜けて、さらにしばらく歩いたところに「すずらん通り」はあった。もはや車道となり商店街としての体裁をなしていないものの、通りの入口にはすっかり彩度が落ちて古ぼけた虹色のアーチがかかり、往時の面影を伝えている。

「大曾根駅周辺の再開発エリアから外れ、取り残された場所じゃよ」とかかしは言った。

古くは遊郭のある場所だったという。その頃の名残だろうか、小さなスナックやバーが散見されるのだが、現在ではほとんどの店舗がひっそりと閉店している。閑静な料亭や庭園のある日本家屋と古い演芸場が共存する不思議な街だ。一本脇道に入れば、昼間に人も通らないような、典型的な場末のシャッター通りの風景に出会う。

そこにあったのは、市場の自由競争にあまりにフェアな形でさらされて自然死した、商店街の骸だったのだろう。人間に寿命があるように、呼吸する街にも恐らく誕生と死の循環サイクルがあるのだ。ほんの目と鼻の先にあったのに、何の助けも受けられず、見捨てられ、見殺しにされたもうひとつの大曾根商店街と見ることもできるかもしれない。しかし、視点を変えれば、それは単なる民家の連なりでもある。商店街という先入観の色眼鏡さえ外して見れば、これだってどこにでもある古い宅地の光景なのかもしれない。

かかしは遠い目をして言った。「ドロシー、君は大曾根から客足を奪った者を魔女に喩えていたね。でもその大曾根もかつては、他の誰かにとっての魔女だったかもしれないんだよ」

横手にある広い道を銀のプリウスが静かに通り過ぎて行く。

どこか遠くでじりじりと蟬が鳴いていた。

第4節 ナルシシズム

ある種の対照実験として、大阪の十三商店街を二度ほど訪れてみたことがある。西側に伸びる商店街は見事な「古いアーケード街」だった。道は狭くて自転車と人の波で歩きづらい。多種多様な古い個人商店と見たことのない名前のスーパーマーケット、新しいシアトル系カフェまでもが同居共存する様子を見て、かつての大曾根商店街の光景が脳裏に鮮やかに浮かび上がった。「ファスト風土化」が指摘されるよりずっと前から、それと似たような現象は始まっている。鉄道沿線に並ぶ住宅や駅近くの商店街は、昭和の均質的な風景のひとつだ。勢いに気圧されつつも駅の東側に転じてみる。道はやや広くなり人通りも落ち着いた。商店のサイズはちょっと大きい。さらにその道を抜けて歩くと、町外れの位置に東本通という寂れた通りがあった。屋根はな

く、狭い道に小さな商店がぼつぼつと並んでいる。あまりのギャップに驚かされるのだが、それは華やかな十三商店街の一隅にひそやかに咲く、忘れ去られた野花だった。

忘却された町は、行政からは見捨てられ、無いことにされた部分だとも言える。それは「活気づける」といった近代の目標追求型の問題設定からすれば、守備範囲の外にある。つまり、イシュー化を免れる部分なのである。ここに、ジモトの問題系にアプローチするひとつのヒントがある。

外は小雨が降っていた。その日は臆病なライオンと二人だった。彼はホットミルクのマグカップを両手でいじりながらぼそぼそと言った。「ドロシーさん、ボクは正直なところ、今のオズモールのどこがいけないのか分からないのです」

「私もこの街が好きよ」とドロシーは答えた。その答えはライオンを少し安心させたようだった。

「確かに昔に比べたら、さびれてしまったのかもしれませんが、どうしてブリキのきこりさんは、この街のことをあんなに悪く言うのでしょうか。ボクは今の静かな暮らしでじゅうぶん満足しているのです」

「ブリキのきこりさんもこの街のことが好きなのよ。だから昔みたいな賑わいを取り戻したいんじゃないかな」

「好きなのに悪く言うのは、なんだか矛盾しています」

「理想があるのよ。だから現実に満足できなくて、目標に向かって走り続けるの。永遠にね」

ギデنزの再帰性の理論からすれば、現代とは高度近代であり、ダンプカーのように前進を続ける巨大なプロジェクトだった。構造が行為を、行為が構造をそれぞれ規定する点において、それは社会変動の可能性を論的射程に収めているように見えるのだが、松浦雄介が指摘していたように、この時構造は常に単一のものとして想定されている（松浦 2005: 20）。この想定は、複数の価値規範が対等に共存するような多様性とは相容れないようにも見えるが、そう断じるのはやや性急である。この理論が提出された背景には、近代の「大きな物語」の終焉と価値規範の脱中心化を謳うポストモダンの論者たちとの意見の対立があった。手短かに言えば、人々の価値観が多様化しているのを認めた上で、それでも近代的価値規範という中心軸は保持されているというのが、現代社会に対するギデنزの見立てなのだった。それは、他のあらゆる価値観に対して上位に置かれ、またすべての市民に共有されるべき、スタンダードで画一的な価値規範の存在を認めるということでもある。要するに彼は、現代社会においても（金銭や社会的名声の追求といった）近代社会が公認した「正しい」価値規範や、努力と前進の美学のようなものが、人々の間に依然として保持されていると考えている。

このことを「まちづくり」のケースに即して見てみよう。まず、街を「活気づける」という経済的成功の近代的価値規範に貫かれた至上命題が掲げられる。しかしながら、「勤勉に努力していれば結果はついてくる」というその基本方針は、市場経済そのものが拡大に向かっていった時期には妥当性を持つ有効な指針だったかもしれないが、つねに成立するような普遍的なものではない。まちづくりは行政と経済の両輪で進められるものであるのに、行政や住民たちの努力に過剰な期待がかかることになる。そこに第一の誤解がある。第二の誤解は、結果として失敗したものに関して、それが（デザインや宣伝広告などの）努力不足によるものだと考えられがちな点である。デザインが良かろうと悪かろうと、おそらく逆転のためのまちづくりが企図された時点で、しばしば勝負はすでに動かないものになっているのに。

これらの誤解はいずれも近代的パースペクティブからまちづくりを眺めた時に生まれるものだが、重要なのはここで「活気づける」というコンセプト自体には決して疑いの目が向けられないという点だ。近代型の主体は努力の重要性と前進主義を信じて疑わず、富や名声の獲得は「誰にとっても」幸福なことであるに決まっていると思込んでいる。つまりそこでは、近代型のスタンダードな価値規範がキープされている。

しかし我々の課題はむしろ、そのひとつ先の段階について思考することなのだ。昨今の状況は、ギデズ的な想定をはみ出しつつある。例えば、すでに役目を終えて忘却された町を、再び商店街として奮い立たせようとする態度には——それは涙と成功の近代型ヒューマンドラマを生む可能性を持つかもしれないけれど——どこか違和感がある。

近代社会は、目標に向かって努力していれば必ず報われるのだと人々に言い聞かせてきた。産業革命を経て市場規模が拡大していった時期のヨーロッパ、そして途上国からの搾取と戦争によって太り続けた帝国主義期の欧米にとって、その説得はリアリティを持っていた。けれどもこうした近代化の神話は、とりわけリーマンショック以降ますます維持が難しくなっている。ハイパーモダンなネオリベラル陣営の論者たちは、この進歩発展の神話の継承者となって個々人の努力を最大に引き出そうと躍起になっているけれど、そうした努力が報われる保証はどこにも無いと気がついてしまった者は、「何か素晴らしい目標を設定すべし」という最初のステップからもう手を引いてしまうのだ。

そこに出現した、ダメかもしれないけれど別にそれで構わないという泰然自若とした態度は、近代の駆り立てるような切迫感とはまた別のタイプのものなのだった。まちづくりという近代化の「失敗」は、一方ではノスタルジーをもたらした。他方で、それが彼らに教えたもうひとつのことは、近代が示したような経済成長や自由平等の達成といった「大きな物語」を追いかけることの他に、別様の生き方もあるということだった。商店街にまだ活気のあった頃の《記憶》を持つ人々は、それを思い起こす

こともできるだろう。しかし他方には、新参だったり十分に若かったりして、その思い出を共有していない（あるいは美化していない）人々もまた存在するのである。

ここでリースマンが「他人志向型」と呼んだものや、クリストファー・ラッシュやマルセル・ゴーシェが現代的「ナルシズム」として描いたものがヒントを与えてくれるだろう。それは簡潔に言えば、いつも周囲の反応を気にしているような弱い自我であり、自信がない割には自己愛が強く、最終的には社会生活から遊離してヴァーチャルな世界に閉じこもってしまうようなイメージで描かれた。ただしここで「社会」と呼ばれているものは、コミュニティというよりは近代社会のことである。すなわちこれは、現代のナルキッソスたちが（富や名声の獲得といった）近代型の価値や目標には向かわずに、むしろ個人的な楽しみと趣味の世界に没頭しようとする傾向を持つということも含意している。このことは近代的主体の目から見れば、公的な社会生活から距離をとってひきこもるような、反社会的antisocialではなく「非社会的 asocial」な振舞いに映るのかもしれない。

ぱっとしないジモトの現状に特に問題を感じないという、当事者たちのある種の無関心は、ひとつにはこうしたところから生まれてくる。例えば、何か問題が隠されていると目された時点で、ジモトの問題は近代的な「地元」や「地域」の問題領域へと併呑され始めるのだ。もっと言えば、その状況を「寂れている」と感じとったり、ネガティブな定義付けをしたりするためには、比較対象としての何らかの理想像が必要なのである。そうした近代型エンパワーメントのまなざしと、そもそも目標設定から手を引いた現代型ナルシズムの態度の間には、大きな温度差がある。後者は、社会によって公認された大きな目標を追いかけることの他に、もっと個別で多様な生き方の選択肢があることに気がついている。この場合は、地元の発展だけが彼らの幸福ではないことに。

第5節 愛の対象

いつもより随分と遅いタイミングで秋が訪れた。ドロシーは「オズモール」の中程にある、やや入口のわかりづらい、だがすこぶる美味しいラーメン屋で早めの昼食をとっていた。店員の小母さんたちは韓国ドラマの話題で盛り上がっている。

こざっぱりとした雰囲気の良い店内には、なぜかラフマニノフのピアノ・コンツェルトがかかっていた。カウンター席の正面の壁には、来店した浅田真央のサイン色紙が写真付きで飾られている。その周囲にも中日ドラゴンズの選手たちの直筆サイン、テレビやラジオの名古屋ローカル局のパーソナリティたちのサインがずらりと並ぶ。彼／彼女たちは地元のスターであり有名人であり、郷土の誇りなのだった。

地位や肩書きが人を縛るように、出身地も人を縛る。それは識別の上でのラベルであり、名付けなのだ。ただし、日本国内で「私は日本人です」という機会が滅多に訪れないのと同様に、名古屋において「私は名古屋の生まれなんです」と言う者は、多かれ少なかれ外と内との往復を経験してきた者である。そうやって形成されるアイデンティティの同質性や、偶然隣りに座った見知らぬ客との仲間意識のようなものは、どう考えてもフィクションなのだけれども、そこから関係性の糸を紡ぎ出せるような小さなきっかけや接着面としては立派に機能する。逆に言えば日常において、それはもうツールでしかない。

しかし非日常および問題状況においては、事情が異なってくる。異国の環境に放り込まれて和食が恋しくなるのは、関西に移り住んだ名古屋人が赤味噌を買い求めるのと平行だ。我々はそうした瞬間に、自分の中の地元に出会う。それはすでに名付けられ、代理表象されたものだったりする。そこまではいい。さらにその向こう側にある、忘却され思い出されることのない即自的な存在の核、あるいは不在であることによるのみ認識されるドーナツの穴のようなもの、それが「ジモト」の問題系をなす。

近代型のスタンダードな目標を追うことが必ずしも唯一の選択肢ではなくなった時、そして人々の欲望が未来にも過去にも向かわなくなった時に、いわゆる価値観の多様化が起こるのだが、それら小さくて新たな価値観の担い手は、おそらく「愛の領域」としての親密圏に集中していただろう。

近代社会が、自由、平等、富や名声といったものに至高の価値を置いていたとすれば、現代人たちは、あらゆる種類の「愛」に無上の価値を見出すようになったと言える。最も分かりやすい例は恋愛だが、家族愛、地元故郷への愛、祖国愛なども挙げられる。また様々な趣味における、例えば、スポーツ、旅行、音楽、自動車、ゲーム、ギャンブル、ペット、アイドルやアニメへの愛でも構わない。それは未来にも過去にも向かわず、今を楽しむような、現在の充溢した生を生きるような態度だった。それら親密な愛は本来私的で個人的なものだったはずだが、恋愛話が人を惹き付けるように、「どこか共感できる」という偶発的な一致（の幻想）によってシェアされる可能性を持っている。共通の趣味による結合によく現れているように、現代における人と人とのつながりは、近代型の同質的アイデンティティには必ずしも支えられていないのである。この過去にも未来にも向かわない愛の、最も純粋な形態は自己愛すなわちナルシズムとなるが、それですら他者に共感されシェアされる可能性を宿している。

したがって、現代型のジモトはまず、私的な愛着の対象としてある。

ジモトそれ自体には成功も失敗も無い。それはまちづくりという近代的成功のヴィジョンと目標が示されて、ジモトが「地元」へと変換された後でようやく現れる何かである。

まちづくりやまちおこしが、人々のジモトへの愛着を「地元」愛にすり替えつつ利用しようとする時、その試みはほぼ「失敗」するのだろう。そしてこの失敗は、どうやらローカルエリートが斬新なイノベーションを起こせないことによるのではなく、むしろ近代型メンタリティと現代型メンタリティとの間の解離に起因しているように思われるのだ。まちづくりは徹頭徹尾、近代型エンパワーメントのまなざしに貫かれているのだが、現代型のジモトがそれに抗し続けるのである。宗教改革とプロテスタントイズムが私的財産への愛に公的承認を与えた時、人々は来世における救済を夢見ることができたけれども、まちづくりが地元愛に公的承認を与えようとする時、それが示す「将来的な」成功のモデルケースはもう手放しで受入れられることはない。要するに、近代型の成功神話に人々がついてこなくなっているのである。

一度視点を反転し、裏側から眺めてみよう。近代化の神話はまた他方で、日常生活上の不安を解消する装置でもあった。つまり、遠大な理想と目標の設置によって人々の不安が吸い上げられ、未来方向へ向けて永遠に先送りされていくというトリックがそこには存在した。だがその神話を信じない人々にとって、生活上の不安は個々で格闘すべき課題へと姿を変えていく。

—だから彼らは《忘却》する。

麵をすすりながらブリキのきこりは言った。「産業革命の頃の下層労働者たちは、惨めな生活を忘れるために安酒ばかり飲んでいました。階層の移動や社会的成功があまりに困難で、新興のブルジョワジーのように社会の発展に無邪気に期待を寄せることができなかつたんです」

「阿片もね。ロンドンでは安かったみたいだから」とドロシーは答えた。

「現代人たちも似たようなものですよ。将来に希望が持てない以上、何かに中毒することで現在の不安を現在の範囲内で忘れていかななくてはならないのですから」

「中毒って、たとえばゲームとか仕事とかに？」

「そうですね、趣味の世界などでもいいと思いますが。」ブリキのきこりはさらに続けた。「ところで前から訊きたかったんですが、ドロシーさんはこのオズモールをどう思ってるんですか」

「どうって、私は好きだけど。ジモトだし」

「昔にくらべて、活気がなくなったとか、寂しいなあとか、ないですか」

「今は今で悪くないと思ってるかな。静かで落ち着いてて。私、人が多いのって苦手なのよね」

ブリキのきこりは少し沈黙した。ラフマニノフはいつのまにか次の曲に変わっていた。

ドロシーはふと顔を上げて言った。「ねえ、もし明日世界が滅ぶとしたら、何をやる？」

ブリキのきこりはしばらく考え込んでいたが、「分からないですけど、でも何となく、いつも通りの一日を送ってしまうんじゃないかと思います」と答えた。

「日常生活——それがあなたの忘却のスイッチなのね」と、ドロシーは言った。

何かを愛の対象に選ぶという行為は、他のことを忘れさせる作用をも併せ持っている。近代は長期的な計画とヴィジョンを重視し賞揚していたが、将来の見通しもなく即物的な快楽に身を任せる傾向というのは、前近代的でもあるがあるいは極めて現代的な態度なのかもしれない。

ときに、地域を「活気づける」というまちづくりの目標に至るためのメソッドは、実は二通りしかない。あくまでスタンダードなやり方に則るか、そうでない方法をとるかである。商店街の性質を考えれば、そもそもの最初の方針は、徹底したコストダウンやサービスの充実といった通常の経営努力であるべきだったはずだ。ところがそれでは巨大企業に太刀打ちできない。同じ土俵に乗れば淘汰されてしまう。

そこで登場した次善の策が、その街を愛してもらうこと、その街自身が人々の私的な愛着の対象となることだった。それは現代型のメンタリティにも合致しており、時代の風潮を読んだ上での適切な施策ではあった。だが、それはマーケティングにはつながらない。まちづくりがあくまで経済活性化という近代的目標に向かって動くのに対して、そもそも個人的な愛着の対象というものは、たとえ恋愛話のようにシェアされやすい領域にあってさえ、他人から見ればしばしば「どうでもよい」ものなのだ。愛することと出資することは異なる二つのことであり、端的に言えば、近代的な経済活性化と現代的な愛の領域の創出とを重ね合わせて見てしまった点に、まちづくり全般の失敗はあったと言える。人々がそれぞれに抱いていた私的な愛着を、地域への愛へと転化させ、さらに消費衝動へと「水路付け」ようとする発想自体が近代型の古いアイデアだったのである。

経済を活性化させなければ市場経済の内部でまず勝負するのが本筋であり、話題作りとメディアへの期待によって人を呼ぼうとする短絡的な試みはすべて失敗するのだろう。結果として、私的な愛着の対象となろうとした街はしばしば、既存の成功したモデルケースを参照することで、決して成功することのない多くの劣化コピーを生み出すことになった。例えばまず「ゆるい」ご当地マスコットキャラクターを愛してもらって、後にそれを地元愛へ転化させるという奇妙なアピール方法も、このようにして生まれてくる。まちづくりは、近代型のスタイルを取るならばビジネスでの勝負に徹すべきだし、現代型アプローチを取るならば愛されることで満足すべきなのだ。

しかし現実にはそうはならない。そこにまちづくりの困難と不幸、そして内在的ジレンマがある。

結語 遍在するジモト

夕刻の白い街は茜色に染まりつつあった。どの記憶の欠片に反応したのだろう、頭の中にラフマニノフ交響曲第2番のアダージョが流れ出す。ドロシーはふと足を止めた。見れば病院着の老婆がひとり、看護婦二人に付き添われて歩道をゆっくりと散歩していた。この街には、自動車はおろか自動二輪すら侵入できないよう柵が設けてあって、つまり遊歩道としての機能を備えていた。ベンヤミンによればその昔、19世紀パリのパサージュで、カメを連れてその速度に合わせて歩む行為が流行したと言うのだが、そうしたのんびりとした時間がこの街には流れていた。ほんのひと時、めまぐるしく流れる日常を忘れさせてくれる空間。でもそれは彼らにとっての日常生活空間でもある。

「どうしてこの街に帰ってきてしまうんだろう」とドロシーはつぶやいた。

「ホームだからだって言ってたじゃないですか。何だか安心するって」とブリキのきこりが言う。

「その安心はどこから来てるんだろうと思ったのよ。この街の人たちは、幸せそうに見えるんだもの」

からっぽ頭のかかしが言った。「ここにはもう何もないぞ。人もいなくなったし」

「でも何かがあります」と臆病なライオンが続けた。

ドロシーが答える。「そうね、ただそこで『じゃあ何があるのか』と考えてしまうと、見逃してしまうのよね。無いんだけどあるのよ。例えばドーナツの穴は、周りに食べられるドーナツの円環があることでしか出現しないっていうか、何もない不在としてしか存在できないから。だから『何かがある』としか言いようがなくて」

「それがジモトなんですね」とブリキのきこりが言った。

その場所の美化された《記憶》とノスタルジーも、確かに一役買っているのだろう。もちろん家族や友人といった親密な人間関係も、人を出身地に結びつける重要な要因となる。けれども、そうしたものをすっかり取り去ってしまったところになお残り続けるものがあって、それは適切にも「ジモト」と呼ばれるものなのだ。

仮に精神分析的に言えば、その正体は恐らく、人間存在の根源的な不安に対する否認の作用だということになるのだろう。様々なラベルやアイデンティティの仮面で身を飾ってその穴を埋めようとしたところで、その空隙はつねに残り続けていく。過

去において失われたと想定された「母の乳房」や「対象a」と言えば、フロイトやラカンの理論に親しんできた人々には分かりやすいかもしれない。けれども、これこそまさに近代型の理論であり、つまりリビドーが過去に向かうという幼児退行とノスタルジーの理論なのであって、それに対して現代型のナルシズムはこの範疇をはみ出していく。

大多数の現代人は、世代にも左右されるけれど、ある程度の近代型メンタリティと、ある程度の現代型傾向とが各自の配合で混じり合ったようなものの見方を、基本的には身につけているように思う。彼らの裡に、ノスタルジーという近代の反転の次に出現したのは《忘却》というメソッドだったろう。ある者は日常を忘れるために趣味の世界に逃げ込み、ある者は日常生活そのものの持つ忘却作用に身を委ねる。光の当たる部分とのコントラストによって影に沈み込む事象の他に、当たり前過ぎて見えなくなっていく事象というのもまた存在するのである。平穏に見える日常は、各自の《忘却》のプロセスによって維持されて、ゆったりと回転を続けているのだ。

現代社会においては、近代合理主義の哲学者たちが信じていたような大文字の《真理》はもう存在せず、ただ各自が信じている個人的な真理があるだけだ。それと同様に、大文字の「地元」は個人化されたジモトへと雲散霧消していった。ひとりひとりのジモトがあって、それは隣家の幼なじみとすら共有されている必要はない。だとすれば、私的な愛着の対象としてのジモトを可視化しイシュー化するというのは、それを地元と取り違えた近代人の錯視であり、本来はひとつの語義矛盾だということになる。逆に言えば、不可視に留まり続けるジモトは、不安を抱えた人々の最後の個人的な逃避先のひとつとして、積極的な意義を持つことにもなる。愛の領域としての親密圏に公的なものが介入してきたとしても、それをかいくぐって避けるようにして残る領域がジモトなのである。

ドロシーたち一行はふたたび「すずらん通り」の前まで来ていた。
「ここって昔アーケードの屋根あったよねえ」とドロシーが訊いた。
「いやそれは記憶違いじゃ。ここは無かったて」とかかしが答えた。
「大曾根商店街の記憶と混ざってるんですね」とライオンが言った。

記憶なんてずいぶんといひ加減なものだ。商店街としての「すずらん通り」は「オズモール」よりも遙か昔に栄華を極め、そして少し早めに眠りについた。2010年には《西の魔女》ユニー大曾根店がその40年の歴史に幕を閉じた。今はまだ誰も想像できないかもしれないけれど、いつかは《東の魔女》イオンモールも、その歴史的役目を終える日がやってくる。その場所に残されるのは大きな空箱だけれども、そこに自らのジモトを感じていた者は、他の街で出会った同様の箱にも同じくジモトを感じ取ることになるだろう。それは里山の景色や深夜の国道沿いを流れる風景と同じように、

どこにでもあるような、しかしながらどこか懐かしいような原風景として機能し始めるのだった。

現代のジモトはこうして場所の特異性からも解放され、そこかしこに遍在するようになる。現代型の主体にとって、もう帰るべき心の故郷はひとつである必要はない。記憶は過去の事実というよりは、あくまで現在から遡って作られるものである。例えば名古屋のダイエーの屋上にあった小さな遊園地と京都のデパートの屋上で見つけたそれとに、同じジモト愛を感じ取ることができるのは、そうした事情によっている。より厳密に言えば、それは地理的場所性というよりは視覚的光景への愛着に起源を持っているのかもしれない。ジモトがいつまでも同一の場所性に縛り付けられていると考えるのもやはり近代の錯視であって、ジモト愛を地元愛へと変換しようとする行為なのである。

だから、たとえ経済的に失敗していたとしても、もし誰かに愛される街をつくることができたなら、まちづくりとしてはそこで満足な成果を上げたと思なすべきなのだ。大曾根のケースは端的にそのことを我々に教えてくれたように思う。

入口の古い虹色のゲートまで戻り、もう一度それを見上げてみる。やっぱりどこか見覚えがあるけれど、その記憶も怪しいものだった。上を向いている僕に、背後からからっぽ頭のかかしが話しかけてくる。

—ところでドロシー、探し物は見つかったかね。

—いいえ、でも何となく、僕はこの場所をよく知っているような気がするんです。

—ああ。多分そうだと思っていたよ……

吹き上げた一陣の風に振り向くと、もう彼らの姿はどこにも無かった。

ただ夕焼けの茜色だけが、優しく街を包みこんでいた。

参考文献

Gauchet, M. (2002), *La Démocratie contre elle-même*, Paris, Gallimard.

Lasch, Ch. (1981[1978]), *The Culture of Narcissism*, Norton (=石川弘義訳『ナルシズムの時代』、ナツメ社) .

松浦雄介 (2005) 『記憶の不確定性—社会学的探究』、東信堂。

Riesman, D. (1964[1950]), *The Lonely Crowd*, Yale University Press (=加藤秀俊訳『孤独な群集』、みすず書房) .

参考 URL

「大曾根の再開発を振り返って」

(<http://www2u.biglobe.ne.jp/~y-itoh/ozonesaikaihatsu.htm>)

「～大曾根～OZ モールの現状とは？」

(<http://mimizun.com/log/machi/toukai/1028796280/>)

「ファミリーレ大曾根レジデンス情報」

(<http://www.takara-f.jp/ozone/blog/access13.html>)

地方・女性・建築家 —反転するマイノリティー

松村 淳

0 はじめに

本稿は、ある一人の建築家に対する聞き取りを基にした記述を行う。彼女は地方在住で、四十代の女性である。タイトルに挙げた「地方・女性・建築家」はいずれもマイノリティを表象するものである。それらに対応するマジョリティは「都会・男性・建築士」である。「男性社会」と言われる建築業界の中で女性は圧倒的にマイノリティである。しかも、クライアントの絶対数や建築家に対する認知度の低さという点で、地方在住という事実は建築家としてやっていくには不利な条件である。その建築家という存在もまた、きわめて厄介である。建築家という職能が現れたのは明治時代であるが、21世紀になった現在でもまだ「公定」されてはいない。建築家を名乗って活動する者は、建築士全体の約1パーセント程度である。メディアの力によって人口に膾炙するようになったその名前ほどには、職能の実態は知られていない。

そのような「逆境」にあって、彼女はどのようにして独立開業を果たし、そして設計事務所を維持し続けているのだろうか。聞き取りから得られた彼女のライフヒストリーから「地方・女性・建築家」を生きる一人の職業人のリアリティに迫ってみたい。

1. 建築家N氏ができるまで

本稿は40代の女性建築家であるN氏に対して行った聞き取り調査をもとに構成される。ここでN氏の略歴について触れておきたい。N氏は高松市に生まれ、高校卒業までを高松で過ごす。その後広島で大学で建築を学び大手ゼネコンに入社する。二年ほど経験を積み退社。その後、結婚を機に高知の設計事務所に移り、さらに経験を重ねる。数年でその事務所を退社し、別の設計事務所に移り、数年間の勤務の後独立し、現在に至る。高松市の中心部に自身の設計による自宅兼アトリエを構えている。聞き取りは2011年10月、Nさんのアトリエで行われた。

1-1. 建築家を目指した理由

筆者：「建築を志したきっかけをおしえてください」。

N氏：「学校の成績的に、医学部に行くはちょっと難しいねということで、一浪して、滑り止めの一つとして受けたところが建築学科でした。他の学部も受けていましたよ。建築って特殊な所だと思っていて、あまり建築をしたいとか思っていなかったのですが。ただ、子供のころから、空間とかに対する感覚を覚えているんです。幼稚園

の時からこの家のここが好きとか、祖母の家の微妙な高さの窓が好きとか。そういうことを思っていました」。

筆者：「じゃあ、建築家にはなるべくしてなったという感じですね」。

N氏：「でも、唯一無為にそれがしたいと言われるとそうでもないです。もう一度人生やり直すとなると、違う事がしたいですね」。

1-2 設計事務所での修業時代

大学卒業後の建築家の一般的なライフコースは、まず建設会社や設計事務所に勤めることである。そこで仕事のノウハウを学び、業界のしきたりを覚えていく。また多くの建築関係者に会うことで、将来の独立に備えた人脈づくりもできる。しかし、大手建設会社を例外として、ほとんどの建築設計事務所は零細企業であり、薄給・長時間労働が常態化しているのが実情である。彼女が勤めた事務所も例外ではなかった。

N氏：「大学を出て、大手ゼネコンに勤めた後、二つの設計事務所に行ったんですけど、一か所目は、有名な建築家の弟子が率いるアトリエ的な事務所でした。働き始めたころに、雑誌にもちょっと出てたりして、めちゃめちゃ過酷な職場状況というか、労働条件でしてね。毎日夜は11時とか12時とか。私は、そのころ丁度結婚したばかりで、もともと結婚しても仕事は続けるつもりだったんで、5時にかえってご飯の用意をしましょう。なんて気はなかったんですが、それでも普通には帰りたいなあと思ってました。でも、結局毎日上司が帰らないから、帰れないんですよ。それと教えてくれないんですよ。いろんなことを。見て覚えろみたいな。なんか職人みたいなかんじで。でも見てもわからないんですよ。いろんなことが、それでウソばかり（図面に）描くじゃないですか、そうするとすごい怒られて。K建設にいたころは実施図面をやったことがないんですよ。概算を出すための設計をしたりとか。だから平面図とかも1/200とかが多くてね。大きなショッピングモールが建つときの近隣に対する説明用の資料を作ったりとか、あとは大きなボリュームをだすのに必要なボリューム模型を作っている周囲との調和を考えたりとか。だから全く実施図面なんか書いたことなく、それが設計事務所に行くと、いきなり展開図を描いてくださいとか、言われてね。でも描けないからいつまでたっても仕事が終わらないから、帰れなくて。残業代もつけてくれていたんですが、それをいれても安い給料ですよ。一応株式会社だったので保険とかはかけてくれていたけど、たぶん、（給料は）手取りで14.5万くらいだったかな。ただ時間的なことや金額的なことだけじゃなくって、あまりいい環境じゃなかったんで、さっさとやめようと思って。わたし、K建設にいるとき、（一級建築士の）学科はパスしていたんですが、製図がまだ受かってなかったんですよ。

そこが過酷な労働条件だったので、これはさっさと受かってやめたいと思って。放っておいたら毎日そんな時間（深夜）に帰らないといけないから、試験の3か月くらい前に「私は、今年は絶対に一級をとりたいので、これから5時で帰ります」って宣言をしたんです。それで、いい職場だったら、がんばりなさいなんて、言ってくれるんだろうけど、なんかすごい厳しいから「そんなことやっても、受かるものは受かるし、受からないものは受からないぞ」と厳しいこと言われたりしてね。それから、もう何を言われてもいいと思って、それでなんとかその年に合格しました。合格発表があった時にやめますって言って。ちょうど2年間勤めたから、しばらく休もうと思ったんだけど、ある設計事務所の人が声をかけてくれて、休んでいるんなら（その事務所に）来なさいと。私は1か月くらい休んでから行こうと思っていたんだけど、そんなに休んでたらダメだって言われて、ほとんどブランクのないまま、休みなく次の事務所に行ったんです。そこで5年近く働きました。そこは前の事務所は違って、前の事務所は実施設計をやらしてくれないんですよ。現場にも連れて行ってくれない。事務所に留守番で、雑用ばかりやらされたりね。その事務所は一応、私に、肩書を付けてくれてね、主任という。仕事も最初から所長も一緒にきて、基本設計して、現場が始まったら現場管理もする。設計の時は所長のチェックを受けるけど。現場管理は管理専門の年配の人が部長だって、その人が一緒についていってくれるなかで、配筋検査などをさせてもらって、最初から最後まで一つの仕事をやらせてもらったんです。一つの仕事を最初から最後まで全部見るということをその時の事務所でやらせてもらって。ちょうどその事務所に入ったとき、年齢でいうと28くらいでした。その頃5つ6つ上くらいの男の人たちが独立するのでやめちゃったんですよ。そうしたら所長、管理部長、私っていう三人体制になったんです。だから、そのときの仕事のほとんどに携わることができて、その時にトータルで仕事を見られたというのはありがたかったなあというのがあって。ただ、それは珍しい、そんなふうにしてくれる設計事務所ってあまりないんですよ。そこは組織的な事務所をめざしていて、男性はスーツなんですよ。クライアントが法人なので設計事務所がラフな格好はダメだと。女性もスーツに準じるような恰好をするんです。そこが結構仕事が厳しくてね。書類の管理とかも。仕事はあなた個人の仕事ではなく、事務所が受けている仕事なので、誰でも答えられたりとか、確認したりできるようにするために、誰でもアクセスできるようにしておけて。そこでも、残業もしていましたけど、夜中までではなくては7時くらいには帰れて、隔週で土日2日はお休みでした。給料もどんどん上げてくれて。最終的には設計事務所にしては結構いい給料をくれていたんだなあ、今思いますよ。そこを辞めてこっちに帰ってきたときに、何か所か面接に行ったんですけど、ある高松で名の知られてるところに行って、「給料どれくらいですか」って聞いたら、「前はどれくらいもらっていたんですか」って逆に聞かれたんです。だから、「これくらいもらっていました」って答えたら「たくさんもらっていたんですね」って言われ

て、うちはそれは出せない。無理ですみたいなことを言われました。その事務所にたまたま二級建築士の人がいて、彼女の年収はこれくらいです、って言われた年収があまりにも安くて。そんな彼女の給料の倍なんかくれないわけですよ。倍もらっても前もらっていた給料よりも少ないんですよ。これは絶対ダメだと思って。こっちからお断りしたんです。日建設計（注1）とかはいいですけど、個人の設計事務所は、あんまりいい職場環境ではない。だからみんな独立しなきゃいけないと必死になるんですよね」。

2 建築とジェンダー

前述したとおり、建築業界は旧態依然とした男性社会である。以下のインタビュー記録にも記載されているようなセクハラまがいのことは少なくないと聞く。業界で女性は補助的な役割しか与えられていない場合が多い。それが常態化している業界にあっては、そのこと自体の是非を問うという論調よりは、それに抗うのか、それとも「そういうもの」として受け入れるかという働く者個人の価値観の問題へと往々にして横滑りする。

2-1 建設業界の女性差別

N氏：「大学を出てからはK建設にいましたが、スーパーゼネコンには、今はちょっと分からないけど、女性と男性の差別というか、区別があるんですよ。会社の中で。女の子は雇用様式としては支店採用なんです。大阪は大阪支店採用。福岡なら福岡支店採用。大学を出ていようが、どんないい所（大学）を出ていようが、関係ない。最初から給与形態が違うんですよ。最初のボーナスで、ちゃらちゃらした事務系の男の子がボーナス二倍もらっているのを聞いて「やってらんない」と思いましたね。彼は国立大学の大学院を出た人ですが、彼は入社二年でちょっとしたマンションなんかを任されるようになっていたけど、私はいつまでたっても補助的な仕事で、やっぱりなんかこう悔しいなと思いましたね。身近な上司たちは「いつまでもいてね」なんて言ってくれるんだけど、社会的には女性を育てる風土がないんですよね。だから、ある時からさっさとやめようという感じに思ってた、ちょうど結婚をしたときに辞めたんです。そして結婚をして高知に行きました」。

2-2 独立後の苦勞

N氏：「独立してからも、女性だと甘くみられるんですよ。女の人だからリフォームするんですか、住宅（の設計のみを）するんですか、って言われますね。私はもともと大きな施設がやりたくて建築をしてるんで、たしかに今は小さなものが多いけど、今も大きなものを作りたいというのはあって、でもなかなかそう見てくれなかったですね。香川県の建設会社のおじさんたちは、「先生はどこにおったんですか」と小バ

かにしたように聞いてくるんです。そこで「K建設です」というと「あら、そうですか……」というリアクションになるんですよ」。

2-3 明るいセクハラ

N氏：「女性は最初から立場として区別されている。独立仕立ての頃は現場に行くと「スカートをはいてこなかったら現場にきたらいかん（笑）」なんて言われたりね。まあ明るいセクハラですけどね。そんなこと言われたって、まあ本当に現場に入れなわけではないんですけど、なにかしらそういう風に、その、建築の仕事って男社会だなと思うことがいっぱいありました。仕事をしていくうえでは建設会社と対峙しないとダメな場面がたくさんあるんですけど、ただただ、和やかに打ち合わせをするだけでなく、いろいろな厳しいことを言わなければならないことがあるんですよ。そういうときに、正論なんだけど、そういうことをパシッと言うよね。逆上するんですよ。男の人って。ものすごく怒鳴ったり、怒ったりする。それは、私が女性だからなんですよ」。

2-4 女性だからよかったこと

N氏：「逆に、女性だから得するという意味では（建築界に女性が）少ないので、みんなが気にしてくれたりとか重宝してくれたりとかがありますね。私はまだまだ小さな仕事しかしていないけど、何かあったときはお鉢が回ってくる。チャンスがまわってくるというか、それは仕事独自ということではなくて、それは何かの会で、たとえば知事との懇談会が年に一回あって、地元の有名企業の社長夫人なんかに交じって、私を呼んでいただいたり、経営者の団体に私も入れてもらったりとかして。一応、事務所していますが、経営者というものでは全然ないですけどね。そういうところに入れてもらえるというのは珍しいからだと思うんですよ。ダイレクトに仕事にはつながらないですが、男の人なら入れないところに入れるラッキーさというものがありますね。たとえば、私は、経済同友会っていうのに入っているんです。恐れ多くて全然（会合に）行ってないけど。誘っていただいたのはいいんですけど。いろいろ顔を売るのがいいからと、言ってくれて入ったんです。ここは推薦者がいないと入れないんです。お歴々がいるんで。地元の大会社の社長が会長になる。あまりにもメンツがすごいので行けないんですよ。怖くて。（笑）だから行ってないですね。行って何しやべたらいいんでしょうかと思ってしまっ」。

筆者：「Nさんのような女性の建築家には女性のクライアントが頼みやすいというのはありますか」。

N氏：「それがそうではないんです。お客さんでも、奥さんがイニシアチブを取っている家庭もあれば、ご主人がとっている家庭もある。私のクライアントは後者です。自分よりも年上だと男性のクライアントが多いですね。年下だと女性がしっかりしているクライアントが多い。たしかに女性だから話しやすいというのはあるかと思いますが。私は、飲み屋さんの女性に好かれるんですよ。私にご依頼をくださるのは、歳がいったママさんで、かつパトロンがいないママさん。そんなママさんにかわいがってもらえる。女性だから女性のほうがいいっていうのはよく聞きますが、実際はそうでもないんですよ。カッコイイ男性の建築家の方が女性にはいいんですよ。年配の大御所の先生に聞くと、旦那さんを置いて自分のことを好きにさせるくらいの、たらしこむくらいの甲斐性がないと実際住宅の仕事をとるのは難しいよ、なんて話も聞いたことがありますね」。

3 建築家という仕事をめぐって

3-1 建築家らしさとは

筆者：「建築家になるために、これが大事と言えるようなことはありますか」。

N氏：「どうでしょうね。現に私が作品性の高いもので第一作目をしたというわけでもないんです。でも、どうすれば建築家らしくなれるのかなってすごく思っていて、独立したての頃って、仕事があっても設計料をもらいにくい。仮にももらえとしても値切られるとか。どうやったら仕事ができるのかな、とかいろいろ考えていました。そんなとき、東京で行われた JIA（日本建築家協会）のセミナーに行ったんです。その一人の講師が、建築家として自分を確立するためには、自分をそういう風に見せることが大事。一般の人は建築家をあこがれのイメージをもっているのだから、建築家と友達になると、いろんな芸術家、アーティストなんかと間接的に付き合えるというのも魅力の一つだから、香川ではそんなことはないけど、だからそういう風に装いなさいと。あとはガツガツしないことが大事だといわれました」。

3-2 三つの決め事

N氏：「私は独立した時に、自分で三つのきまりをきめたんです。ひとつ目は、設計をするには契約をしてからじゃないとしない。そもそも本当は簡単にプランを出して、それが流れちゃって、お金を全然もらえないっていうのが今も昔も設計事務所に多くあることですが、二つ目は、設計料は値引かない。絶対に値引きしない。値引きするならやりません、ということ。最後は、絶対に自分の顔が出る仕事しかしない。つまり下請け仕事はしない。そのかわりにどんなに小さな仕事でもいい。自分がやったって表に出せる仕事しかしないということなんです。でもね、こうやって（このような決まりを忠実に守って）やってくると、なかなか仕事がこないんですよ。一時、

仕事がすごく減った時に、クライアントを建築家に紹介するところに入会したんですよ。そこでは、お客さんと建築家をマッチングさせるんですが、私ね、女性だからかもしれないんですが、面接はたくさんしているんですよ。ほんとにたくさんの方に来ていただいているのに、全然仕事にならなくて、一体なんでこんなに仕事にならないんだろう、何が悪いんだろうと、悩んでしまって。その年の暮れに忘年会があって、ある建築家が、「Nさんのところには結構お客さん来ているでしょう」って聞くから、ええ、来ていますけど全然仕事に結びつかないんですよ。というお話をしたら、「そのお客さんたちみんなうちに来ているよ。Nさんファーストプラン（無料で施主に提案する最初のプラン）しないんでしょ」って言われました。「（正式に契約をしてから最初のプランを提案することは）建築家として、とてもエライと思うよ。でも僕はするんだ」。と言われて。だから要は私のところにきたお客さんが、その人のところに流れて行って、その人が仕事をしているんです。別の人も聞いてみたら、「一回目のプランくらいは無償でやるよ」と言われて、え！そうなんだ。みんなそうやってやるんだ。私だけやっていなかったんだ、って気づかされたんですね。その時からケースバイケースでいこうと。これを頑なにいうのは、よくないなと。お客さんにとっては私という存在がどういう人なのかよくわからないのに、契約しないとやりませんというのは難しいのかなと。そこからは柔軟にしようとおもっています。ほんとに私のいろんなこと、それ以外のことで判断できるいろいろな材料があるのならいいのかもしれないけど、まだまだ私の作った建物の数も少ないですし。お客さんにとっては難しいのかなと思って。そこからはもっと柔軟にしようと思っています」。

3-3 お金とモチベーションをめぐるジレンマ

N氏：「私のところに来てくれるお客さんは、公務員とか社長さんとか収入の面でしっかりされている方が多いですね。私のお客さんで多いのは『渡辺篤の建物探訪』が大好きな人。なんでもいいから建ててというひとはまず来ないですね。それから、圧倒的にお客さんの外車率が高いです。決してお金持ちとかじゃないですよ。ただ、オシャレといえばオシャレですね。私のところに来る人は。独立してからは設計料を値切られたことはないですね。実際高いですもんね、設計料。でも、それを貰わないとやっていけないですしね。クライアントからは、プロだから安くてもいいものを作ってよ、って言われるけど、安い予算だったら安いものしかできないですよ。一時ローコストというワードがはやったんです。それがはやると建築家は自分の首を絞めてしまうという現実がありますね。ローコスト住宅を扱った本の中でね、建築家はいろいろな工夫をして、1500万円でこんなことができましたって書いてあるけど、1500万円の家を建てて、設計料300万円くださいなんて言えないじゃないですか。もちろん、クライアントのために、すごく色々なことを考えてあげることはできますけど。でも、考えた分の、その労力分のお金を私が受け取ることはできないですしね。今、

800万円のリフォームを受けているけど、私は最低設計料を決めているんですが、800万円の予算しかない人から最低設計料をもらうことはできないです。申し訳なくて言えないですね。（話を）聞くと力になってあげたいと思し、でも、その人たちの力になってばかりいたら事務所としてなりたないですしね。そのあたりのジレンマが延々とありますね。この仕事やる意味あるのかという仕事、実際ありますよ。モチベーションがあがらないですね。そういう仕事。あの、その、お金を値引かないというものの一つには、今までどうしてもその、ほとんどないんですけど「消費税分だけ値引きます」とかあったりして、最初（その金額で）できると思っていたけど、顧客の要求が増えて、それならもう少し貰わないと、となっても、最初と話が違うから払えないよ。なんてなるんです。それってやる気がなくなってくるんですよ。自分の仕事を評価してもらえないというか。建築って時間がかかる仕事なんで、もらう金額は大きいかもしれませんが、費やした時間を換算すると、ほんとにねえ、割に合いませんよね。（設計料を）ちゃんともらっていると、絶対頑張らなきゃって思うけど、それを安くしてくれなんて言われると、自分の仕事を全然評価してくれてないというか、やる気がぜんぜんでない。それもあって、なるべくお金を引いてはいけないうって思いました。ちゃんとお金をもらってちゃんと仕事をしようと思いました。ちゃんとお金をもらうことの大切さは、東京に建築家のセミナーに行ったときにも言われたんです。設計事務所はちゃんと適切な利益を上げて、事務所として存続することがお客さんのためになるんだから、それで建物をね、一緒に見守っていく、何かあればケアをすることができる。だからお金を儲けることは悪くないんだと。だからちゃんとした設計料はいただかないといけない、そこはちゃんと主張していかないといけないなと思いました」。

3-4 この仕事のやりがい

N氏：「その人の人生に、なにか関与できるということかな。以前、カフェを設計させてもらったのですが、そのクライアントの同級生には偉くなって人がたくさんいるんだけど、医者や弁護士とかね、その人は、いままでコンプレックスを持っていたんだけど、この建物が僕のプライドになると言ってくれて、それがうれしくてね。そういう言い方をしてくれるお客さんはその人ですけど、それ以後も、そこで、当然できたことで喜んでくれました。ビフォー・アフターのように泣いてくれたりはしないですけど（笑）竣工して何年経っても、いまだに付き合いが続いています。彼がね、先日湯布院の豪華旅館に泊まったそうなんですよね。でも（その人がいうには）「私ね、そんな宿よりも自分の家が一番いい」って。今でも本当にそう思うよ」ってそういうことを言ってくれる。その人がそこにいることによって豊かな時間を過ごしているのかと思うと、いいお手伝いをできているのかなと思います」。

筆者：「そのクライアントの方とはどこで知り合ったのですか」。

N氏：「たまたま、営業に来るメーカーの人の知り合いでした。まだ自分の作品がほとんどない状態で、私がまだ独立する前に手がけた喫茶店を気に入ってくれて、それをみて頼みたいと言ってくれたんです。高校の同窓生のネットワークが仕事に結び付いたことはないけど、中学校の先輩後輩には、ちょっとしたことを依頼されました。この1.2年で数件ですね」。

3-5 建築家とはなんぞや

N氏：「建築家のある会合でね。建築家とはなんぞやという話になってね、年配の人は「オレは自分のことは建築家ではない、そんなことは人が決める」という。若手の人は名刺にも建築家って書いているのね。自分たちは建築家だと思うし、そもそも設計士という言葉は無いんですよ。明確に、私は建築家であると言うべきだし、もちろん認められるだけのことはしていかないとダメですけど。私も、言いにくいですがのね。自分のこと建築家ですって。「何やっていますか」って聞かれて建築家ですって言いにくいですね。でも、逆に建築家という呼称をすごいものとしてとらえないでいいのかもしれないですね。絵を描いている人は画家、建築を作っている人は建築家、それでいいような気がします。建築家というと安藤（忠雄）さんを思い浮かべますが、安藤さんと一緒というところちょっとねえという感じになるしね。ちゃんと設計で生計を立てられているのなら建築家でもいいのではないかと思います。そういう意味では、最近は、昔よりも抵抗はないかもしれませんね。

ただ、お客さんの前で、作ったものを「作品」というのはおこがましいかなと思って言いませんが」。

3-6 東北大震災と建築家／建築士

N氏：「3.11の後多くの建築家が被災地復興に向けてのプロジェクト等にかかわっていますよね。ここ、香川からも何人かの建築家は現地に行って色々なことを実施しています。Nさんは、そのような動きをどう思われますか」。

N氏：「建築家／建築士として何かやるべきじゃないかと、私も思った。でも、実際に何ができるかと思った時に考えると何もできないし。それが本当にひとのためにやっているのか、自分のためにやっているのかがわからないんですよ。いろいろなことを通してみると、たとえば、建築家が中心となって講師を呼ぶイベントがあつて、それがおわると裏方のはずの若手建築家が講師を囲んで飲みに行ってしまうという。自分たちがその人とつながりたいがためにやるみたい。人のためにそのフォーラムをやるのではなくてね。いまどきの30代、40代の人ってそんな感じよね、って

言われる。私たちの年齢がそうなのか、世代がそうなのかわかりませんが。みんな自分がわかってもらいたい、自分が世に出たいという気持ちでいろいろなことをやっているということが確かにあって、もう焦っている世代ですよ。もっと若かったらわからないし、年を取ったらいろいろひらきなおれるし、この年齢だから仕方がないのかなど。もちろん、建築家／建築士として何かをしたいという気持ちもあるというのも当然なんですけどね」。

4 東京と地方

「地方」は建築家にとって極めて厳しい場所である。当然、人口の絶対数が都市部に比べて少ないので、依頼が来るチャンスも減ってしまう。それだけでなく、建築家という公定されていない職能に承認を与えてくれるリソースも少ない。都市部には、非常勤講師等に関わる大学や専門学校が数多くあるし、建築家が集う各種シンポジウムや展覧会なども多い。都市部の建築家たちはそのような場所に参与することで承認を調達しているのである。一方、地方にはそのような承認のリソースが極めて限られている。図1は都市部における建築家の承認のリソースを図示したものである。筆者の居住地の関西を例にとっても、建築家に建築家としての承認を与えるためのリソースは数多く存在している。（図1参照）教員として関わる可能性のある大学や専門学校などのアカデミックな場や、建築関係の図書を専門に扱う出版社や書店もある。週末ともなれば建築家の手がけた住宅の竣工に伴うオープンハウスが関西一円のあちらこちらで開かれているのだ。筆者は何度かオープンハウスに招かれ訪れたことがあるが、招待客は建築家をはじめとした同業者ばかりである。ホスト役であるその家を設計した建築家は、招待した建築家たちと延々と建築談義を交わすのである。招く者も、招かれる者も、そのような数々の実践の中で建築家としてのアイデンティティを固めていくのである。一方、地方においては、承認のためのリソースの種類は限られ、規模も小さくなる。（図2参照）それゆえ、仕事を得る事以上に、建築家として承認されることに困難が生じるのである。

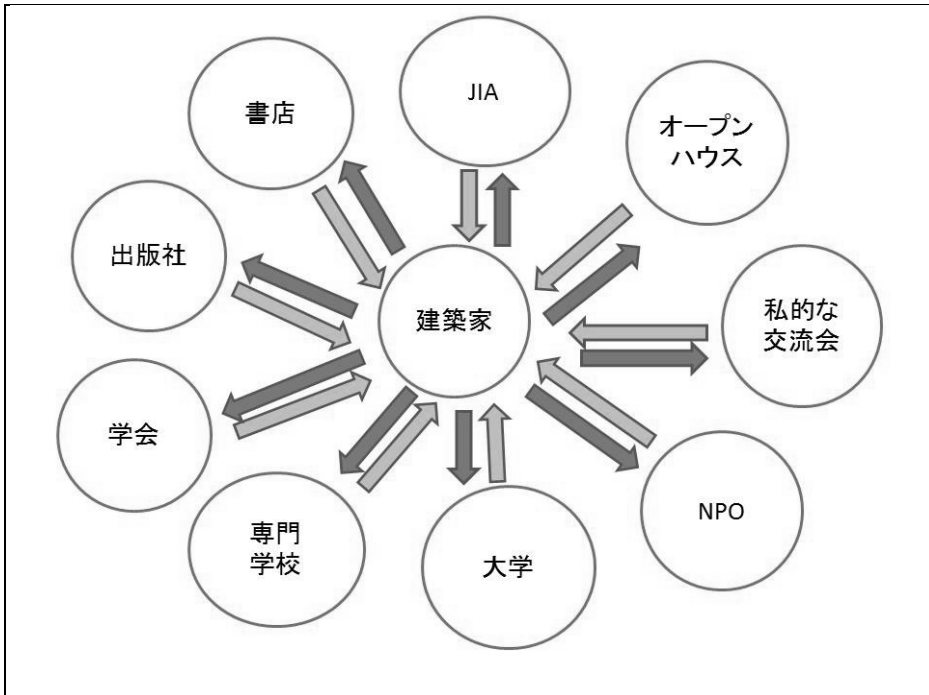


図 1 都市における建築家の承認のリソース

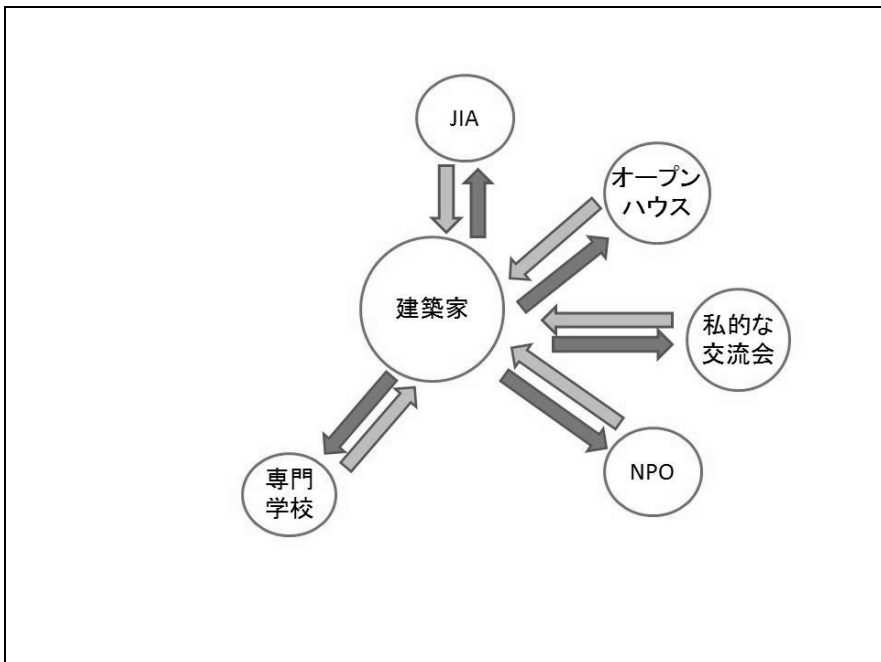


図 2 地方における建築家の承認のリソース

4-1 東京と地方、異なる建築家像

N氏：「東京の建築家像と地方の建築家像と違うところがあるんですよ。彼らはどちらかというと、一般の人よりもおしゃれですし、みかけも普通のサラリーマンみたいなことはないし、私がいた建築事務所の人も見たい目もおしゃれだし、いい車に乗っていたり、素敵なお家に住んでいたり、いろいろなことに対して感性が豊かですよ。」

食べ物にこだわりを持っていたり、そういう人が建築家になるのか、自然にそれともそういう風になるのかなあ。こっち（香川）に帰ってきて、いろいろ見ていると、別にいい車に乗っている人もそれほどいなくて、お金がないから乗っていないというのではなくて、たぶん、そういうことにあまり価値を感じていないんでしょうかね。そんなにかっこよくなくても仕事いっぱい持っている人もいるし、格好じゃない部分とか、なんか、逆に泥臭い、人柄がいいとか、みたいな人が仕事をたくさんしている。仕事がたくさんあるというだけでいえば、一概に（建築家風の）スタイルだけではないような気がする。でも、以前、徳島に建築家が講演に来ていて、それを見に行ったんですけど、三人とも申し合わせたように黒の衣装を着てたので、建築家って黒の服なのかなあと思ったりしたこともありましたね。東京の（建築家の）先生と話すと（彼らには）すごい夢があるんですよ。ぜんぜん、ちがうというか、こちらで建築をやりたいといってもなかなか学ぶ場面がないというか。時々東京にいくと、本当にその差を実感します」。

4-2 地方では面白いことが出来ない

N氏：「設計事務所で働いている人が、ギリ貧になっているのは、設計事務所が儲からないからなんですよ。意匠設計がもっともっと（お金を）もらわないと下請けの、設備や構造の人も苦しい。東京の方では、構造家の方が意匠的なデザインを誘導するという、建物の作り方をしてて、すごく面白くてね。この人に構造をやってもらったら間違いなく面白いだろうなど。構造設計の費用は意匠設計の2割だそうです。こちらの（香川の）感覚からいうと高いですよ。でも、これくらいはもらわないと、ってことですよ。収入が無いといろいろな（おもしろいこと）をやっていけない。そういうことを業界としていろいろ高めていかないといけないですね」。

5 まとめと考察—反転するマイノリティと反転しないマイノリティ

地方は建築家にとって厳しい世界である。その理由は上述したとおりだ。筆者がこれまで聞き取りをしてきた多くの男性建築家は、自らがいかに他の建築家から「卓越」しているのかについて大いに語った。その語り口は総じて「熱い」ものであった。その姿は、これこそブルデューのいう「界」の中の闘争ではないかと思わずにはいられなかった。彼らは好むと好まざるとにかかわらず、地方の建築家によって形成される「地方建築家界」に投げ込まれている。そこでは、地元での有名性や仕事の多寡、注目される活動などが資本となる。しかしながら、女性であるN氏は、卓越化の闘争からは一歩引いたところにいる。それは「絵を描いている人は画家、建築を作っている人は建築家、それでいいような気がします」と述べていることに象徴される。建築家としての彼女にとっての「承認」とは、「顧客に正当な対価を払ってもらう」ことである。それこそが最大の承認のリソースなのである。彼女は建築家としての矜持を

持ちつつも、過剰に建築家であることの意味に縛られることを注意深く避けようとしている。地方の同世代の男性建築家たちが、少ない承認のためのリソースをめぐって争っている様子を冷めた目で見つめている（3-6 参照）。

彼女は、独立して事務所を構える女性建築家というアイコンを買われて、地元の経済団体に入会出来たり、知事に面会するチャンスを得たり、あるいは地元の大学が主催するシンポジウムなどに招かれたりするなどしている。これこそ、地方・女性・建築家という三つのマイノリティとしての表象が反転し、資源化している好例であろう。とはいえ、現場でのセクハラ発言を「明るいセクハラ」とサラッとと言えるようになるまで、相当の葛藤があったであろうことは想像に難くない。彼女は「逆境」を反転させることで得た資源を使って、順調に仕事を続けている。しかしながら、「成功」している彼女に続く若手の女性建築家がほとんど出てきていないという事実にも触れておく必要があるだろう。建築士として自分自身が建築業界にかかわった経験と、最近のフィールドワークに基づく実感であるが、建築業界で建築家／建築士として独立して仕事をするためのハードルはますます高くなっている。特に、地方都市では新規参入は容易ではない。特に地方において建築家、あるいは建築士として自立を目指すことのできる若者は、「資本」を持った者だけに事実上、限られてしまっている。

今後は、建築をめぐる厳しい時代が続く中において、反転することの無いマイノリティたちの死屍累々を見ることになるのかもしれない。

【注記】

① 日本を代表する大手設計事務所。社員数は 1724 人。技術士 124 人、一級建築士 728 人、二級建築士 121 人を擁する。最近の主な作品に「東京スカイツリー」など。

おわりに

川端浩平

まとめ—ジモト研究の今後の展開と課題

本研究ユニットの8人のフィールド調査に基づいたジモトをめぐる論考から明らかになったのは、いわゆる地元志向現象（エンパワメント表象）によって何が不可視化されているのだろうかということである。それぞれ、生活者（利害関係者）として身近な世界の考察を通じて明らかになったのは、地元志向という現象は決して地域や人びとの実態を反映したものではないということである。第一部、第二部の各執筆者の論考から窺えるのは、地元志向現象が前提としている地域への愛着なるものは、必ずしも地元滞留する若者たちやマイノリティの人びとの声を代表しているものではないということである。そのいっぽうで、第三部の執筆者たちは、地元という領域がまちづくりや再開発等を通じて可視化されることを通じて実体化していることを明らかにしている。しかし、そのような地元へ、エンパワメントの言説が掲げるような将来のビジョンや希望を見出しているわけではない。執筆者たちは当該地域との関係性が深いゆえに、地に足のついた批判的な考察を進めることを可能としている。むしろ本研究ユニットを通じて明らかになったのは、地元志向現象には生活当事者（利害関係者）の視点が欠如しているということである。フラット化する現実（グローバル化）に対する地元志向現象をめぐる言説が要請されているが、その過程で、不可視化される変数があり、それぞれ異なる変数から不可視化されるジモトの領域を明らかにすることを試みた。つまり、階層、地域性、マイノリティ、ジェンダーといった負の属性が切り離されるのである。

ただし、本研究ユニットの共同研究を通じて、ジモト研究をめぐる様々な課題も浮き彫りになった。とくに本研究ユニットの成果として見込まれていた、地域社会の批判的考察とマイノリティ研究を架橋することにより、グローバル／ローカル、マジョリティ／マイノリティ、包摂／排除といった二項対立的な分析視角によって抜け落ちる領域で営まれている生活実践の領域を明らかにするという作業をうまく進めていくことができなかった。2013年度は、ジモトという視座をさらに綿密に定義していくことを通じて、身近な生活世界において周辺化される時空間を客観的に調査するための方法へと高めていくことをめざしたい。

2011年度次世代研究「地域社会で不可視化された領域を考察するための〈方法としてのジモト〉」（研究代表：川端 浩平）による成果である。

【メンバー】（ ）内は2011年度プロジェクト時点

川端 浩平（京都大学大学院文学研究科グローバルCOE 研究員）

渡邊 拓也（京都大学大学院文学研究科グローバルCOE 研究員）

平田 知久（京都大学大学院文学研究科グローバルCOE 研究員）

森田 次朗（日本学術振興会特別研究員PD：京都大学大学院教育学研究科）

芦田 裕介（京都大学大学院農学研究科博士課程）

金 泰植（獨協大学非常勤講師）

谷村 要（大手前大学メディア・芸術学部講師）

松村 淳（関西学院大学大学院社会学研究科後期博士課程）

孫片田 晶（京都大学大学院文学研究科博士課程）

轡田 竜蔵（吉備国際大学社会学部准教授）

越智 正樹（琉球大学観光産業科学部講師）